
5人の高校生活

月形 竹保

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

5人の高校生活

【NZコード】

N7741W

【作者名】

月形 竹保

【あらすじ】

「コナンと哀を中心が始まった、5人の高校生活。
またも、クラスは分かれることもなく、仲良し5人は探偵部を始め
よつとするが…。

プロローグ（前書き）

初投稿です。

一話目なので、人物紹介でほぼ終わってしましました。
では、ご覧ください。

プロローグ

新一から「コナンとなつて一年。

FBIと協力し、組織は壊滅へと追い込んだ。

しかし、哀とコナンの望んだAPT-X4869のデータは、組織によりメインコンピュータが破壊されたことで、手に入れられず、解毒剤の研究は頓挫してしまった。

そのまま、数年が経ち、帝丹高校入学式当日。

いつもの交差点に向かう一人。

「あつー！ナンぐーん、哀ちゃん！おはよー。」

大きな声で挨拶してくるのは、吉田歩美。人当たりのいい性格で、誰からも好かれる女の子。胸くらいまで伸ばした真っ直ぐな髪を、両耳の上でヘアピンでとめている。

黒目がちな瞳が可愛く、男子からは絶大な人気を誇っている。

高校入試を上位の成績で突破した才媛もある。

「おはようございます。遅いですよ。お一人共。遅刻したらどうするんですか！」

と、呆れた顔をしながら話しかけてきたのは、円谷光彦である。

歩美の右横に立つ、長身でそばかす顔の青年。

敬語で話すのは昔から変わらず、礼儀正しいと、上級生の女子から、

絶大な人気を誇る。歩美同様、入試を上位で突破した頭脳明晰さである。

歩美の左横からは、

「お~っす！おせーぞ、お前らー！早く行こうぜ。」

と叫ぶ、小嶋元太。

ガツチリとした体躯は、中学から始めた柔道に因るものだ。無駄の無い、しなやかな筋肉で引き締まっている。その見た目と、大らかな性格から、男女問わず下級生から人気がある。

3人に答えるように、

「よお、わりーわりー。博士が哀の制服姿を写真に撮りたいってきかなくてな。」

といったのは、古びた黒縁眼鏡を掛けた江戸川コナンだ。
容姿端麗、頭脳明晰、スポーツ万能と、三拍子揃った上に、紳士で優しいと、年齢関係なくモテ、その推理力は、警察関係者からも一目置かれる。

コナンの横を歩きながら、疲れたように、

「おはよう。全く、博士にも困ったものだわ。」と呟くのは、灰原哀。

白く透き通るような肌に、翡翠の瞳、赤茶のウェーブがかかった髪は肩口で切りそろえている。

誰もが振り返るような美貌だが、その瞳は冷めていて、人を寄せ付けようとしない。

才色兼備で、スポーツも得意。人見知りをする性格故か、クールビューティーと言われるが、男子からの人気は高い。

プロローグ（後書き）

何だか、分かりにくいですよね。
誤字、脱字とう気づいた方は、知らせていただけないと有り難いです。
次話もよろしくお願いします。

クラス分けといれから（前書き）

今日、2度目がの投稿。
あまり先に進まない…。

クラス分けとこれから

帝丹高校へ向かつた5人は、クラス分けの掲示板前で固まつた。

「…………。」「」「」

「これで10年連続同じクラスか。何か怖いな。」

「え？ コナン君、コレはもう、奇跡だよ！！」

「そうですよ。神様が5人は分けてはいけないって言つてるんですけど…」

「少年探偵団は不滅だな！！」

「はあっ。とりあえず、教室に行きましょう。」

哀の言葉で、教室へと向かつた。

当然のように、コナンと哀は隣同士に座り、その前に、歩美を挟むように光彦と元太が座つた。

入学式は滞りなく過ぎ、放課後。

5人は一緒に帰りながら、これからのこと相談することにし、通りがかったファーストフード店に入り、昼食を食べることになった。

それぞれ食べたいものを注文し、ひとまず食べてしまつこととした。みんなが食べ終わり、歩美は話を切り出した。

「ねえ、部活なんだけど、【探偵部】を立ち上げない！？」

「え？俺、柔道推薦で来てるから、柔道部に入るぞ？」

「元太君は、兼部つて形を取れば大丈夫じゃないですか？」

「推薦で入った奴が兼部つてありなのか？」

「そうね、ちょっと難しいと思うわ。」

「え～？ そうなの！？ ジヤあ、どうしようつ…。5人いないと部になれないのに。」

「同好会じゃダメなの？」 「哀ちゃん…、だつて、格好良くないんだもん。」

「だつたら、同好会つてつけなきゃいいんじやないか？」

「そうですよ。【探偵俱楽部】つてするのはどうでしょ？」

言いながら、光彦は紙とペンを取りだし、【探偵俱楽部】と書いてみせる。

「それについては、俺と哀で先生に掛け合つてみるよ。」

「要は、先生を言い負かせばいいのよね。歩美ちゃん、安心してどうにかしてみせるわ。」

「わ～い。哀ちゃん、コナン君、よろしくね。」

「ところで、2人とも、高校では、2人が付き合つてると、公にするんだよね？」

「「え…？」」

「あ～っ！…やっぱり、黙つてゐつもりだつたんだ。」

「いい加減、公表しちゃえばいいじゃないですか。何を躊躇つてるんですか？」

「そうだぞ。言つちやえば、ラブレターも呼び出しあるんじ

やねーか?」

「まあ、そんなんだよな。哀、公表してもいいか? そうすれば、俺も嫉妬で狂いそうにならなくてすむだろ? じ。」

「コナン…。そう、そうね。私も、もう嫉妬で胸を痛めるのは辛いわ。」

「良かつた。これでみんなに訊かれてても、無理に誤魔化す必要ないもんね。」

「良かつたです。僕たちも良心が痛まなくなります。」

「よし! 明日からは訊かれたら、小2から付き合つてゐるぞって言つからな。」

「ああ、頼むよ。」

「よひしぐね、みんな。」

クラス分けとこれから（後書き）

読んでいただき、感謝です。

次も出来るだけ早く書けたらいいと思います。

ガールズトーク（前書き）

女の子同士の会話は、なんだかちょっと難しい。

途中で回想シーンが入ります。

ガールズトーク

「あつ、やべえ！俺、1時から、柔道部に顔出すんだった……わりいけど、俺行くな。明日なう。」

と元太は急いで荷物をまとめて走つていった。

「じゃあ、解散にする？」

「そうですね。僕たちは帰りましょうか。」

「あ…、あのさ、「コナン君、ちょっと哀ちゃん借りてもいいかな？」
「え？まあ、構わないけど。どうした？」

「コナン！－」

強めに名前を呼ばれ、驚いて哀の方を見ると、節目がちに首を横に振つていた。

コナンは、

『ああ、光彦のことか。』

と一人で納得し、頷く。

そして、

「じゃあ、俺も光彦に話があるから、ここで分かれよつ。哀、後でな。」

「ええ、後でね。円谷君、また明日。」

「はい、歩美ちゃん、灰原さん、また明日。」

「コナンと光彦を見送つて、改めて哀の方に向き直り話し出す。

「哀ちゃん、私ね、光彦君に告白しようと思つの。」

「そう。」

「うん、だつて、もう待つのは疲れたもん。」

「小嶋君に1個下の彼女が出来たんだから、遠慮しないで言えぱいいのに、煮え切らないのよね。」

「私も、光彦君も、同じ経験をしてるから…。」

「え？ 同じ経験？？」

「うん。私さ、コナン君のことが好きだったでしょ？あの頃、光彦君は、哀ちゃんが好きだったんだよ。」

「ええ、そうだったわね。」

「でも、2人が付き合い始めて、気付いたの。あれは、恋じゃなかつたつて。」

「恋じゃない？」

「うん。アレはね、憧れだったの。自分とは違う世界を持った人に対する憧れ。彼といえば、私も同じ世界を見れるんじゃないかなってね。」

「円谷君も？」

「たぶんね。あの当時、コナン君も哀ちゃんも、すごく大人びてた。一緒に居ても、一人だけは違うものを見る気がしてたの。」

「まあ、あの頃はね…。」

「だから、2人が付き合うことにしたって聞いたとき、ショックだつたけど、納得できたの。」

「あの後も、変わらず接してくれたものね。」

哀はあの日のことを思い出して、優しい笑みを浮かべていた。

（―――回想―――）

小学2年の冬。

組織壊滅の少し前、コナンは、哀に気持ちを告げた。

勿論、蘭には多少の嘘を交えて説明し、気持ちが他に向かったこと

を告げてからだ。

哀は、蘭に促され、素直な気持ちをコナンに伝えた。
そうして、2人は付き合いだしたのである。

告白の翌日、学校に行く道すがら、探偵団の3人にその旨を伝えた。
その時の歩美と光彦の顔は、一瞬、悲しみに沈んだが、次の瞬間に
は、いつもの笑顔を見せていた。

「そつかあ、やつぱりね。そんな気はしてたんだ。歩美は、2人を
応援するよ！だって、2人とも同じくらい大事だもん。」

「そうですね。僕もお二人はお似合いだと思います。応援しますよ。」

「だよな！俺も、おまえら一人はくつつくと思つてたぜ。」

「みんな…、ありがとう。」

哀は少し涙ぐみながら、笑顔でお礼を言って、コナンと指を絡めた。
コナンは、そんな哀の指をしっかりと握り、

「サンキューな。」

といい、嬉しげに顔を綻ばせた。

＼＼＼回想終／＼＼＼

「ふふつ。思い出しかやつたね。」

言いながら、ペロッと舌を出した歩美に、

「ええ、良い思い出よ。」

と微笑み返した。

まじめな顔に戻り、

「歩美ちゃん、たぶん、口ナンが今頃、円谷君に説教してるわよ。早く告白しろってね。」

「えっ！？」

「実はね、彼には言つてあつたのよ。歩美ちゃんが悩んでることを。それでね、せつづいて頂戴つてお願いしておいたわ。」

「哀ちゃん…。」

「だからね、あなたから告白はしないで平気だと思つわ。」

「本当！？ありがとう、哀ちゃん！大好き！…」

「お礼は、ちゃんと告白されてからよ。」

と言つと軽くウインクをした。

そして、2人は、軽い足取りで店を後にした。

ガールズトーク（後書き）

如何でしたでしょうか？

自分、女なのに、ガールズトークを書くのに苦労しました。
というか、会話 자체が難しいです。。

次は、同じ時間軸で、コナンと光彦の会話です。

迷いと決意（前書き）

予告通り、前話の時間軸で、男の子同士の会話です。

迷いと決意

歩美と哀がガールズトークをしている頃、コナンは光彦を連れて、近所の公園に来ていた。

空いていたベンチに座り、真剣な表情で話し始めた。

「なあ、光彦。高校にも無事入れたしさ、そろそろケジメをつけないか？」

「何の話ですか？」

「歩美ちゃんだよ。気付いてるんだろう？歩美ちゃんが誰を好きなのか。元太だつて悟つたんだ。オメエが気付いてないはず無いよな？」

「コナン君…。そうですね。元太君は、僕を気遣つて、下級生と付き合いだしたんですね。」

「ちょっと違うな。あれは、タイミングが良かつたんだ。元太は、中学に上がる頃には、歩美ちゃんのことは諦めてたよ。オメエをせつつくために敢えて、諦めてないフリをしてたんだ。」「そんな…。」

「まあ、やつと気付いたんだろうな、それが逆効果だつたって。だから、前から気になつてた後輩の告白を受け入れたんだ。」

「そつだつたんですか。それなのに、僕が行動に移さないから、内心、呆れてるんでしょうね。」

「呆れると言うよりは、怒ってるかもな。」

「僕はどうすればいいんでしようか？」

「どうするもこうするもないだろ。明日、朝一で告白しろよ。」

「あつ、明日ですか！？心の準備が…。」

「そんなこと言つてると、歩美ちゃんがしごれ切らして、自分から告白してくるぞ？」

「それは困ります！…告白は、僕からしたいです。コナン君もそつだつたんでしょう？」

「ん？俺か？ああ、俺からだよ、勿論。」

コナンはその時のことを思い出し、遠い目をした。

＼＼＼＼回想＼＼＼＼

小学2年の冬、組織壊滅の少し前のこと。

その日、FBIからの連絡で、近い内に組織へ乗り込むことが決まりた。

コナンの隣でそれを聞いた哀は、何かを決意したような顔で、一つのカプセルを差し出した。

「工藤君、これで、24時間だけ元に戻れるわ。だから、組織との対決の前に、蘭さんに説明してあげて！そして、あなたの気持ちも彼女に伝えてあげてほしいの。勿論、事情を説明するために、私も一緒に元に戻るわ。」

「灰原…。分かった。幼児化のことと、組織の詳細については言わないで、出来るだけ真実を話そつ。」

「出来るだけ早い方がいいわね。明日はどうへ日曜日だし。」

「ちょっと聞いてみるな。」

コナンは、新一の携帯と蝶ネクタイ型変声機を持ち、蘭に電話をかけた。

「あ、もしもし？蘭か？オレ。新一だよ。」

“新一！？本当に新一なの？今どこにいるのよ。』

「ああ、心配かけてすまねえな。明日、朝10時に阿笠博士の家に来れるか？話があるんだ。」

“心配なんかしてないわよ！明日の10時ね。大丈夫よ。』

「じゃあ、わりいけど、頼むな。明日、待ってるから。」

“分かつた。じゃあね。”

「平氣だつてさ。何時に解毒剤飲めばいいんだ?」

「そうね、朝7時かしら。データもとりたいし。」

「じゃあ、今日は泊まるな。」

翌朝10時、約束通りに蘭は阿笠邸の門をくぐつた。出迎えた博士に挨拶をし、リビングに行くと、そこには、新一と見知らぬ美女が立っていた。

「新一！来たよ。おはよう。そちらの人は？」

「ああ、蘭、おはよう。呼び出して悪かったな。彼女は、富野志保。今、関わってる事件の依頼人だ。」

「ふうん、毛利蘭です。よろしく！」

「…、富野志保です。」

ペコリと頭を下げる志保。その髪はストレートだった。哀との関係を探られないようじつた対応策である。

「まあ、座るつぜ。今、コーヒー淹れるからよ。」

「工藤君、私が淹れてくるわ。その間に説明を。」

と言い、席を立ちキッチンへと向かった。

志保が「コーヒーを淹れている間に、大まかな概要は説明した。そして、まだ解決しておらず、詳しいことは話せない」とも言つておいた。

そして、志保が3人分のコーヒーを入れて戻ってきたところで、「ねえ、新一、その事件、解決の目処が立ったから、話してくれてるんだよね?」「ああ、まあな。」

「じゃあ、それが終わったら、帰つてこれるんだよね!?もう、どこにも行かないんでしょう?」「あ…、いや、もしかしたら、無事には戻つて来れないかもしねえんだ。」

「どういうこと?そんなに危険なの!?」

「ああ、敵は、血も涙もない犯罪組織だからな。それに…言葉を濁す新一を不審に思い、蘭は先を促した。

「それに、何?」

「蘭、俺、オメエにさ、ずっと、待つてくれって言い続けてきたよな?」

「うん。だから、私、ずっと待つてたんだよ。」

「ああ、分かってる。そんなこと言って待たせてたのに、俺は、もし、無事に帰つてきても、オメエのところには戻らねえ。」

「工藤君!…あなた、自分が何を言つてるかわかつてゐの?」

「新一…、どういうこと?」

新一は、神妙な顔をして、

「俺、宮野と行動をともにするようになつて、気付いたことがあるんだ。」

蘭は目だけで先を促す。

「蘭に感じていた思いは、義務感から来る、庇護欲であつて、愛や恋では無かつたんだ。蘭のことは、守らなきやいけない、大切な奴だと思ってた。だけど、宮野は、俺が、自分の手で守りたい、幸せにしてやりたい奴なんだ。」

「貴方、何を言つてるの?それは、姉のことがあつたからでしょ!…それこそ贖罪の気持ちじやない。」

「いや、違うんだ。確かに、お姉さんを助けられなかつたのは、今でも後悔しているさ。でも、それとこれとは違う。オメエの涙を見て、俺は決めたんだ。コイツを一生守つていくと。俺の人生をかけてでも、オメエを幸せにするつてな。」

「新一…、そつか。何か、納得しちやつたな。私は大丈夫。実は、昨日ね、新出先生に告白されたの。新一を待ち続けるのも疲れちゃつてね、受けようと思つてたところなの。」

「え？ 蘭さん？ 本当にそれでいいの？」

困惑した様子の志保に、いつもの笑顔を向け、

「ええ。だから、富野さん、新一に、ちゃんと答えてあげて。」「蘭さん、ごめんなさい。そして、ありがとづ。」

志保は、涙を流しながら、蘭に頭を下げた。

そして、涙を拭い、新一へと向き直る

「工藤君、私も、初めて会つたときから、貴方が好きだつたの。」「富野！…いや、志保、俺の手でオメエを幸せにしたい。愛してる。ずっと、俺の傍にいてくれるか？」

「ええ！ 工藤君、私も愛してる、ずっと、傍にいるわ。」

蘭は、一人を見守り、そつと阿笠邸を後にした。

～～～回想終～～～

「コナン君？ いきなり黙り込んで、どうしたんですか？」

「あつ、いや、ちょっとと思い出しててな。」

「ちなみに、コナン君は、灰原さんに何て言つて告白したんですか

?」

光彦が、興味津々な様子で聞いてくるが、
「へっ、誰が教えるかよ！それは、まだが知つてればいいことだ
ぜ？」

「ケチですねえ。」

「で？告白する決心はついたか？」

「はい！頑張ります！僕も、コナン君や元太君に負けてはいられま
せんからね。」

二人で不敵に笑い合い、しつかりとした足取りで公園を後にした。

迷いと決意（後書き）

ちよつと遠くなってしまった。

回想シーンは、前話の回想の前の口の話です。

次は、光彦、いよいよ告白か！？

告白 盗み聞き（前書き）

いよいよ、光彦君の告白です！
その時、3人は…。

告白 盗み聞き

公園からの帰り道、コナンは、光彦に切り出した。

「明日の朝は、お前ら2人で行けよ。そん時に告白しろ。元太と哀には言つとくからさ。」

「登校中にですか?」

「ああ、改めて呼び出すのは勇気がいるぞ?」

「そうですね。呼び出す時点で相当緊張しますよね。」

「だから、無理矢理にでも一人きりの状況を作った方がいいだろ?」

「……はい。」

「じゃあ、明日は頑張れよ!」

「コナン君! ありがとう! やれています。また、明日。」

「おう、じゃあな。」

翌日、待ち合わせの少し前。

光彦はいつもの交差点に、歩美と一人きりでいた。

他の3人はというと、近くのビルの陰で身を潜めて一人を見守っていた。

「なあコナン、あいつ、本当に言えるのか?」

「大丈夫だろ? 昨日、ちょっと脅しかけといたしな。」

「あら、脅し? でも、それくらいしなきや、動かないわよね。まつたく、奥手なんだから。歩美ちゃんが可哀想だわ。」

「でもよお、こんなに離れてるんじや、会話聞こえねえじやんか。」

「元太、俺を誰だと思つてんだ? ぬかりはねえよ。昨日の帰り際、光彦の襟の裏に着けといたんだ。」

不敵な笑みで、盗聴器の受信ボタンを押した。

「ふふ。悪い人ね。」

「やるなあ、コナン! 流石だぜ! !」

「おっ！何が喋ってるんだ。」

「おはよー。光彦君！あれ？みんなは？？」

「おはようございます。歩美ちゃん。あ……、皆さん、今日は別で行くそうです。」

「え？どうして？」

「あの、その、実はですね、僕、歩美ちゃんに話したいことがあります……。」

歩美は、内心ドキドキと期待に胸を膨らませつつ、

「な・何？」

「あの、歩きながらでも良いですか？遅刻するとマズいですし。少し、緊張した面もちながらも、まずは、場を和ませようとする。「やうだね。遅刻はダメだよね……」

「はい。行きましょう。」

歩美を促しながら歩き出した。

その後ろを、一定の距離を保ちながら、ついていく3人。

「なかなか、切り出さないわね。」

「光彦のことだ、何て言おうか迷つてるんじゃないかな？」

「なあコナン、学校まで、そんなに距離無いぞ？本当に大丈夫か？」

と、話していたその時、

「歩美ちゃん……あの、僕、歩美ちゃんのことが、好きなんです！」

「言えました。とうとう想いを伝えました。何のひねりもなかつたんですけど、顔もすごく熱いんですけど、僕は、頑張りました！」

と、光彦が心の中で叫んでいると、

「……ほんとう？光彦君、私のこと、好き……？」

歩美は、戸惑ったような、信じられないような気持ちで聞き返した。
「はい！本當です。ずっと歩美ちゃんを好きなんです。僕と、付き合つてもらえますか？」

歩美は、嬉しさのあまり、涙を零しながら、

「わ…たし…、私も光彦君が好き。ずっと好きなの。」

「歩美ちゃん！」

光彦は、そんな歩美を、抱きしめた。通学路だといつにとは、最早、頭にはなかつた。

あと5分で予鈴がなるという頃、見かねたコナン達が、声をかけた。

「おい、いつまでそうしてる気だ？」

「あと、5分でチャイム鳴るぞーー！」

「これで、学校中に広まるわね。」

抱き合つたまま二人の世界に入つていたため、突然のことにつ、一人は驚愕した。

「ええっ！？ 3人とも、先に行つたんじゃないの？」

「うわっ、あの、その、あ～っ！ 学校！！ 早く行きませんとー。」
恥ずかしいやら、嬉しいやらで、『まかしきれないことに気付かない一人。その場をやり過ごすとするが、

「まあ、詳しいことは、後で聞くわね。歩美ちゃん。」

「光彦！ 報告しろよ？」

「結果は分かつてることだな。」

口々に言い、3人は走つていった。

残された2人は、顔を見合わせ、微笑み合つてから、急いで後を追うべく走り出した。

「待つてよー！ 哀ちゃん。」

「待つてくださいよーー。コナン君、元太君ー。」

こうして、5人の高校生活は始まったのである。

告白 盗み覽せ（後書き）

無事に告白成功！！
次は部活かな。

「ふまる尊（前書き）

前話の直後、教室でのお話をです。
探偵団の交際宣言ーー！

5人が急いで教室に駆け込むと…。

帝丹中学出身者が、それぞれ多数の生徒たちに囲まれるという状況にあつた。

理由はもちろん、歩美と光彦の関係についてだ。

しかし、その2人を含む『帝丹中学少年探偵団』は、あまりにも有名すぎた。

男子生徒たちは、

「あの、探偵団の天使、吉田歩美に彼氏が！？」

「ウソだ！、嘘だと言つてくれ～～～～！」

「俺たちの歩美ちゃんが…。」

「でも、相手は円谷か…、勝てっこない…。」

などなど、歩美ファンの男子達の嘆きと嫉妬と諦めの声が、学校中、いや、近隣の学校にも響いていた。

そして、光彦ファンの年上女子からは、
「円谷君に彼女が出来たって～。」

「え～？ 狙つてたのにい。」

「でも、あの、吉田さんでしょ～？ 勝ち目なくない？」

「とりあえず、フられるの覚悟であたつてみようかしら…。」
など、未だ諦め切れぬざわめきが聞こえてきた。

ついでと言わんばかりに、コナンと哀の噂、元太の彼女情報も、一緒になつて訊かれている。

「おいおい、流石にこれはないんじゃねえか?」

「そうね、でも、いいんじゃない? たまには事件以外のことと騒がれるのも。」

「そうだな! 全部事実だしな! !」

「ちょっと! ! 元太君、そんな大きな声で! ! !」

「そうだよ! 元太君、そんなこと大声で言つたら…。」

「ねえねえ、さつきの話本当! ?」

「円谷君と吉田さんって、付き合つてるの? ?」

「江戸川君と灰原さんも! ?」

「小嶋君には一個下の彼女がいるつて本当? ?」

と、いつの間にか、5人はクラスメート達に囲まれ、矢継ぎ早に質問されていた。

「あ~! ! もう、ちょっと待て。順番に答えるから。な?」
コナンは、若干キレ気味でその場の全員に向けて言い放つ。

「まずは、歩美ちゃんと円谷君ね。」

冷静に話を進める哀に、歩美は頬を朱に染めながら、「き! 今日から、私と光彦君は付き合い始めたの。」
周りの男子へ鋭い視線を向け、

「歩美ちゃんは僕の彼女ですから! ! !」

と言い、一呼吸置いて、先程より大きめな凛とした口調で、「僕には歩美ちゃん以外考えられません!」
と言い切つた。

少しざわめく生徒たちを余所に、

「言つじやねえか、光彦! 次は、コナンと灰原だな。
と元太が次を促すと、

「ああ。俺と哀は小2の冬から付き合つてる。」

「かれこれ、7年になるわね。」

言いながら、2人は肩を寄せ合い、コナンは哀の腰に手を回した。

「俺には、哀しか女に見えないし、哀さえいればいい。他はいらないから。」

コナンは皆の前で、哀に甘い言葉を囁く。

哀は照れながらも、

「コナン、私もよ。貴方が隣に居てくれるなら、他に何もいらないわ。」

と言い返す。

甘過ぎる言葉にあてられる者多数。

故に、コナン・哀ファンは、一瞬で諦めざるを得なかつた。

あまりに美男美女過ぎて、間に割つてはいるのも、些か難しいものがあるのも、理由の一つだ。

そして、最後に、

「俺も、帝丹中の3年に彼女がいるぞ。来年、ここに入つてくる予定だ。俺も、あいつ以外眼中にないからな。」

と、元太は淡々と語つた。

5人が話し終わると、友達と話し合う者、ケータイでメールを打ち始める者、どこかに電話しだす者、席につき静かに泣く者などがいた。

しかし、哀とコナン以外、誰一人として気付いていないことがあつた。それは、チャイムが鳴り、担任教師が教室に入つてきていたことだった。

教師としては、注意をしようかとも思ったのだが、何とも、話しかげづらい状況だつたため、つい、見守つてしまつたのだ。
それがいけなかつた。

ホームルームを始めるタイミングを逸してしまい、途方に暮れる羽目になつたのだから。

そんな教師を見て、哀とコナンは、部活申請のための作戦を練りだしたのだつた。

広まる噂（後書き）

これで、全校に、いや、近隣の学校中に広まつたはず。
部活申請の話は、次話に持ち越しです。

勧誘（前書き）

今回は、部活の勧誘がメインです。

この騒動を乗り越えれば、探偵部が立ち上げられるが…。

新入生が、学校に慣れてきたある日のこと。

2・3年生による部活への勧誘が始まった。

特に、1・Aの教室では、運動部・文化部共に激しい勧誘が行われていた。

理由は、少年探偵団の4人である。（元太は柔道部への入部が決まつているので特になし）

コナンと光彦には、サッカー部、ミステリー研究部から。
哀には科学部、ミステリー研究部、料理部から。

歩美には、テニス部、新体操部、ミステリー研究部から。

それぞれ、休み時間の度に囮まれて、勧誘されていた。

今までの、探偵団の実績を知り、ミステリー研究部はかなり本気で4人の勧誘に乗り出していた。

しかし、サッカー部も負けじと、男子2人を勧誘しようと躍起になつていて。中学時代、2人はサッカー部に在籍していて、共にチームを引っ張り、大会ではそれなりの活躍を見せていたのだ。

歩美への、テニス部と新体操部からの勧誘は、どちらにも仲のいい先輩が居たのが理由だ。中学の体育祭や球技大会で、歩美の運動神経が良いのは実証されていた。

哀への科学部からの勧誘は、ある科学雑誌に載つた、哀の研究論文によるものだ。

料理部は、噂で哀が毎食、自分で料理をしていると訊いたからとか。

こんな勧誘の嵐の中、3人は冷静に対応していた。

「先輩方、申し訳ないのですが、私（僕）は、新たに部活を立ち上げる予定ですので、他の部への入部は出来ません。諦めて、教室へ戻つて下さい。」

と、毎回毎回繰り返すのだった。

昼休みの屋上で、5人はお昼を食べていた。

コナンは哀に、光彦は歩美に作つてもらい、元太は彼女から登校途中で受け取っている。

それぞれのお弁当を広げながら雑談していた。

しかし、突然真面目な雰囲気になり、コナンは切り出した。

「なあ、そろそろ、本気で先輩方からの勧誘をどうにかしねえと、探偵部立ち上げらんねえぞ？」

「そうね、相手するのも大変だし。何か良い案ないかしら？」

「まずは、みんな共通のミス研部からですね。歩美ちゃん、活動内容はわかりますか？」

「うん。図書室でミステリー小説を読んでるか、視聴覚室でミステリー映画観てるかだつて。」

歩美は、元来の人懐こい性格で、探偵団の情報収集を担当している。

「どうか、じゃあ、簡単だな。」

「どうすんだ？」

元太は、特に迷惑はかかってないが、探偵団の一員として、協力は

惜しまない考えだ。

「ああ、ウチの蔵書の話しありやいいんだ。学校の図書室程度の蔵書なら、既に読む物はないってな。」

「工藤邸の蔵書は半端じゃないものね。」

そう、コナンは、中学に上がったとき、工藤夫妻と養子縁組みをしたのだ。苗字が違うのは、皆がそれに慣れていたのと、【江戸川コナン】でいふと決意したからだ。

「そつか、中学の時に、みんなで読み漁つてたもんね！！」

「では、ミス研部はそれで良いとしまして、コナン君、サッカー部はどうしましょう？」

「あ～、ウチのサッカー部つてどの位のレベルだっけか？」

「地区で上位だけど、全国区じやなかつたはずよ。」

「うん、バランスはいいんだけど、決定力に欠けてるみたい。」

「2人とも、サンキュー。なら、俺たちと勝負をして、こっちが勝つたら、今後一切、関わらないって約束させるか。」

「いいですね！まず負けることはないでしょ？。あ、元太君、キーぱーやつて貰えますか？」

「おつ！俺の出番か！？いいぜ。任せとけ！！」

コナンは、中学のサッカー部では、実力の半分も出さずにプレーしていた。

光彦は、小学生の頃からコナンとサッカーをしていたので、自ずとレベルは高くなっていたのだ。

元太は、柔道で鍛えた瞬発力とパワーがある上、光彦同様、サッカーセンスもいつの間にか身についていた。

この3人なら、例え上級生相手でも負けることはないだろ？。

「私の科学部と料理部は、問題ないわ。どちらもレベルが違うから。部に入る意味ないし。あの程度なら、言い負かすのは容易いわ。」

「私の方も、大丈夫だと思う。先輩たちも、ノリで誘つてるだけだし。周りが落ち着いたら、平氣のはず！」

「そつか。じゃあ、まずは、放課後、ミス研部撃退だな！」

そこで、昼休みの終了を知らせるチャイムが鳴り、5人は教室へと戻つていった。

勧誘（後書き）

最近の高校には、どんな部活があるんでしょうね？

次回は、撃退編です！！

擊退へ文化部編へ（前書き）

文化部編です。

誤字が有つたので修正しました。

2011/11/04編集

放課後、元太を除く4人は、ミステリー研究部の部室の前にいた。

歩美が調べたところ、ミス研は、放課後、一旦部室に集まって、ミーティングをしてから、図書室か視聴覚かに揃って移動するらしい。したがって、ホームルームが終わって直ぐのこの時間は、部室にいるはずである。

「まずは、『口からだな。』

「上手くいくかな？』

「大丈夫よ。歩美ちゃん。彼がちゃんと言い負かすわ。』

「では皆さん、良いですか？行きますよ？』

ノンノン

光彦がドアをノックした。すると、中から、

「はい、どうぞ。』

と言つて、部員の山本（2年）がドアを開けながら、

「ようこそ。ミスティリー研…きゅう……、あーっ！…』

言ひ終わらぬ内に、驚きの叫びになつた声に、

「こきなり大声を出すんじゃない！皆さん迷惑だらう……』

と部長の北村から、怒声が飛んだが、山本はそれどころではなかつた。

「あ…、ああ、た・たた探偵団！……』

「えつ！？なつ何つ！まさか！？ちょっとだけつ…

どもる山本を押し退け、北村部長が扉の前に来た。

「いんにちは。部長さん。』

歩美が笑顔で挨拶をする。

「やあ、君たち、やつと入部する気になつてくれたんだねーー！」

満面の笑顔で北村部長は4人を歓迎した。

しかし、次の瞬間、光彦の言葉で部長以下8人の部員達は、凍りついた。

「いえ、正式にお断りするのに、一応、そちらの活動内容を知つておこひつと思いまして。」

すかさず哀は、

「今日は、何をするんですか？」

と質問を浴びせた。

いち早く、正気に戻つた部員が、

「あ、えーっと、今日は、図書室で小説を読む予定だけだ。」

と答えると、

「本は、図書室のを読んでるんですか？そんなに、置いてなかつた

と思いましたけど。」

とコナンが再び質問をする。

「ああ、図書室のだけだよ。持ち込みは禁止にしてるんだ。盗難とかがあると困るからね。」

「そつですか、じゃあ、やつぱり、僕達が入部することはないです
ね。」

コナンはサラリと言い切つた。

やつと先ほどの衝撃的な発言から立ち直つた北村部長は、その言葉に、

「なぜーー？ 駄だつて、ホームズが好きだひつーー図書室には全巻揃つてるよー。」

どうにか興味を引こいつと、ホームズの話しひ出してみるが、

「ウチの書斎にも全巻揃つてます。僕の養父はあの、工藤優作ですよ。世界中のあらゆるミステリーを收集してます。僕がまだ読んでいないのは、原文で書かれてるものだけです。まあ、それも、もう、

そんなにないんですけどね。そんな、僕に図書室にある、何を読めと仰るんですか？皆も、中学の頃にウチで、日本語に訳されてるのは読んでますから、今更読むものありませんよ。」と、淡々と説明した。

すかさず光彦は、

「何か、他に断る理由は必要ですか？」

歩美も、

「それに、私たち、今までの経験を生かして、新しく部活立ち上げますから。」

最後に哀が、

「これ以上、私達を勧誘するのは、止めていただけますね？と、極上の笑顔で有無を言わざず、頷かせた。

固まつた部員達を部室に残し、颯爽と去っていく四人だった。

「上手くいったね！」

「事実しかいってないんですけどね。」

「最後の哀の笑顔でKOのだつたな。」

「これで、ちょっとは静かになるわね。」

教室に戻り、帰り支度をしながら、話していると、

「あ、私、ちょっと料理部と科学部に行つてくるわ。先に帰つても良いわよ。」

と哀は言つて、鞄を置いたまま教室から出て行つた。

「あ～、俺、哀を待つてるから、オメーら先帰つて良いぞ。」

「いえ、コナン君、サッカー部のことできょとお話し…。」

「ん？何だ？今日は無理だぞ。元太いねーし。つづーか、やるなら、

「昼休みだな。」

「そうですね。僕も、昼休みがいいと思つてました。そうじやなくて、人数ですよ。」

「人数？」

「はい。キーパー入れて3人はやつぱりシラ」と思つんですよ。せめてもう一人…。」

「ああ、確かに。でも、サッカー部の奴らには頼めねーし。あいつら、わざと負けそうだしな。」

「そ、そうですね。どうしましょ?」

2人が悩んでいると、歩美がおずおずと口を挟んだ。

「あ…、あのさ、2人とも、…私で良かつたら、一緒に戦うよ?」

「…………えつ!?」

2人は、思いがけない言葉に、目を見開いて驚いた。

「だつてね、私だつて、みんなとサッカーで遊んできたよ。運動神経は自信あるし、15分位で良いなら、フルで動けると思うの。」

「歩美ちゃん、いいのか?相手は男子だよ?」

コナンは、気遣うように聞くが、

「大丈夫!!今までだつて、男子と試合してたもん。」

笑顔で言い返す歩美。

「でも、サッカー部だつて本氣で来るはずですよ!!…ケガでもしたらどうするんですか!?」

心配しすぎて、少し声を荒げてしまつた光彦。

「光彦君、大丈夫だよ。それにね、私だつて、探偵団の一員だよ!!」

協力させてよ。ね?」

諭すように光彦に言つて、最後は、得意のおねだり攻撃。

そう、歩美は、両手を顔の前であわせて、小首を傾げて見上げるようにお願いのポーズをしたのだった。

2人とも、頷いてしまつた。

結局は、歩美に弱いのである。

光彦は、惚れた弱み。

コナンは、かわいい妹のおねだりとして。

そして、そのまま、コナン達3人は、サッカー部のいるグラウンドへ行き、サッカー部に、明日の昼休みに、試合をすること、内容として、

？人数は、キーパー込みで4人（交代は自由）

？試合時間は15分

？試合時間内に、先に3点取れば、その場で試合終了

？探偵団が勝てば、今後一切の勧誘行為は禁止

？サッカー部が勝てば、コナンと光彦は入部する

との条件で、試合の約束を取り付け、教室へと戻つていった。

3人がサッカー部の話しをしている頃、哀はとくと、料理部のいる、調理実習室に来ていた。

！

「こらにちは。部長さん。再三の勧誘のお返事にきました。」
と、哀が無表情でいふと、部長と呼ばれた3年の梶井は、満面の笑顔で歓迎した。

「いらっしゃい、灰原さん。良いお返事を持つて来てくれたのね！」

「喜んでいるところ申し訳ないんですけど、私、入部しませんよ。習うべきこともありますし、部活は、皆と新しく立ち上げますの

で、これ以上の勧誘は止めていただけますか？はつきり申し上げて、迷惑極まりないです。」

と、一息で言い切り、呆然と立ち尽くす部員達をそのままに、調理実習室を後にした。

そして、科学部のいる科学実験室へと向かい、ドアをノックした。

「コンコン

「失礼します。」

「どうぞ。ようこそ…つて、灰原さん！…まさか、入部！？」

入ってきた哀を見て、3年で部長の山縣は、喋りながら近づいてきた。

「いえ、これ以上の勧誘は」遠慮願おつと思いまして、正式に断りました。」

「何故！？何がダメなんですか？」

「強いて言わせていただくなら、レベルですね。私の研究論文を読んだんですね？100%理解できましたか？無理ですよね？高校や大学では習わないようなことも書きましたし。」

「たつ、確かに、僕達には理解できなかつたけど、有名大学の教授達が、挙つて讃めてたじやないか！…そんな人が、何で科学部に入らないなんて言える？」

「理由は先ほど申し上げたでしよう？科学部で、私の研究を進めることは出来ないし、そもそも、理解していない人間と共同で実験しようとは思いませんから。実験のチームは、同レベルの人間が多数いることで、前に進めるのであって、1人が抜きん出ていたら、そのチームは、教える人と教わる人に分かれてしまう？私には、教える気はないので、この関係は成り立ちません。今言つたことは理解できましたよね？」

哀の勢いに、啞然とする山縣と部員達。とりあえず、

「あ、ああ…。」

と頷いた。

「では、一度と勧誘などをして、私の前には現れないでいただけますね？」

無表情で念を押す哀に、

「はい、すみませんでした。」

と、元気なく応えた。

すると、哀は笑顔で、

「では、失礼しました。」

と言つて、実験室を出て、教室へと向かつた。

この後、哀への勧誘は一切なくなつたのはいつまでもないだらう。

30分程で戻つてきた哀と、コナン達は合流し、帰路についた。

帰り途中、3人は哀に、サッカー部とは、明日の休みに試合をする」とや、歩美も試合にでることを話した。

擊退へ文化部編へ（後書き）

ご指摘いただきました、青ハル様、ありがとうございました。

以後、気付けてます。

撃退／作戦会議編／（前書き）

「めんなさい。だいぶ更新が遅れた上に、サッカーの試合まで行き着きませんでした。

撃退／作戦会議編

翌朝、いつもの交差点で、いつものように挨拶を交わした5人は、今日の昼休みのサッカー部との試合について話し合い始めた。元太には、昨晩、「ナンがメールをして、基本ルールの説明はしてある。

「とりあえず、位置の確認からしておきましょ。」

光彦は、鞄からノートとシャーペンを取り出しながら切り出した。

「ゴールキーパーには、元太。」

「おお！任せとけ！！」

「センターが俺で、右サイドに歩美ちゃん。」

「私が右サイドね！」

「ああ、で、光彦が左サイド。」

「いつも通りですね。」

「哀は、監督な。相手の分析を頼む。」

「ええ。分かつたわ。」

「歩美ちゃん、相手のスタメンは予想できるか？」

「ナンの問いに、ちょっとと考えてから、

「3年でキヤプテンの荒木先輩は確実だと思う。ゴールキーパーも、3年の梶井先輩のはず。あとは、3年の日比野先輩と、2年で、元帝丹中サッカー部キヤプテンの牛島先輩かな。」

「げつ！牛島先輩！？」

「ヤバいですね。先輩は、僕たちのプレーを知つてますからねえ。」

「でもよお、俺と歩美のことは知らねえだろ？」「

「まあ、それはそうか。サッカー部では、俺、本気出してねえしな。」

「そうよ。それに、向こうのデータなら、過去の試合をネットで検

索して、大体揃えたわよ。」

「ああ、昨日遅くまで調べてたのはそれだつたのか。」

「あら。気付いてたの?」

「バー口オ、俺が気付かないわけないだろ。いつでもオメエのことを見てるんだからよ。」

少し照れながら見つめ合つコナンと哀に、

「ちょっと2人とも!…いい加減話戻してよね。」

と、呆れたように歩美が言つた。

はつとして哀は、

「あら、じめんなさい。大体のプレー傾向ね。荒木キヤブテンは、技術的には中の下つて感じかしら。バスは右サイドに回すことが多いわね。キヤブテンなだけあって、視野が広いから、敵味方両方の動きをよく見てるわ。今回は確實にセンターで来るはずよ。1対1は苦手。コナンなら楽にボールを奪えるわ。」

「中の下ねえ。バスさえ回させなきゃ取れるってことか。ティフェンスについては何かあるか?」

コナンは情報を整理しながら、哀に聞く。

「そうね…。ボールを奪つてるとこは見たこと無いわね。ああ、持久力は有るわ。ボールは奪われなくとも、マークは外せないかもしない。」

コレには、光彦が、

「うーん、少し厄介ですね。でも、コナン君のボールコントロールは秀逸ですかね。大丈夫でしょう。」

そこで元太が口を開いた。

「なあ灰原、シユートは何か、決まったコースとかないのか?」

「シユートは、殆ど外れるから。狙いとしては、いつも向かつて右上。」

「そつか。まあ、とりあえず、いつでも右に跳べるようにしておくか。」

「

「でも、あくまで参考だから。頭に入れておくだけにしなさい。」「わかつた。」

と、そこで5人は高校に到着し、いつたん教室に荷物を置いて、屋上へと向かった。

歩美が話の続きを促すために、

「次は、ゴールキーパーの梶井先輩ね。」「

と言い、哀が、「梶井先輩は、動態視力には優れているけど、瞬発力がそれに追いついてないわね。だから、近いところからのショートに弱いわ。あと、足下を狙つたシューートも止め辛いみたい。」

「じゃあ、なるべく近くから、足下を狙えば私でもショート出来るかなあ？」

と聞いてくる歩美に、微笑みながら、

「そうね。いけるかもしれないわ。チャンスがあつたら、思いっきり蹴つてみなさい。」

と哀は優しく言つた。

「3年の日比野先輩は、たぶん歩美ちゃんの相手になるわ。」

「そうでしょうね。間違いなく、牛島先輩を僕に当てるのはずですから。」

と光彦が少ししかめ面で言つと、

「まあ、その方が、光彦もやりやすいだろ？先輩の癖は分かってるし。オメエだつて、先輩達がいる時は遠慮して本気出してなかつたじやねえか。」

「あはは、気付いてたんですね。遠慮してたの。」

「ああ、いつもの動きと違つてたからな。」

「コナン君には適いませんね。」

と、コナンと光彦が話していると、

「説明続けていいかしら？」

哀はジト目で2人を見る。

「す、すみません。」

「あ、悪かったな。」

と2人は慌てて謝った。

「日比野先輩は、瞬発力に優れているわ。気を付けてないとマークを外されるかもしれない。でも、コントロールは悪いから、歩美ちゃんのスピードがあれば、ボールは奪えるかも。ショートは、キーパーから遠いところを狙う傾向にあるわね。」

「俺は真ん中にいていつでも動けるようにしようと。」

「私は見失わないようマークしないとだね。で、取れればボール取るよ！」

「歩美ちゃん、無理はしないで下さいね。」

「分かってるよお。光彦君ったら、心配性なんだから。」

歩美と光彦ははにかんで見つめ合っていた。

「いい感じのところリィけどよお、そろそろ予鈴なるぞ。」

と元太が言つたので、5人は教室へと戻つた。

次の休み時間は、教室で作戦会議を進めていた。

「牛島先輩は、知つての通り、持久力は無いわ。でも、今回は持久力関係ないのよね。とりあえず、注意するとすれば、技術力ね。特に得点力に関しては、他の2人とは比べものにならないわ。」

「ああ、でも、光彦なら止められるはずだ。」

「牛島先輩はテクニックは凄いんですけど、ゴールまでのコースを考える時間がありますからね。そこを狙えばいいける気がします。」

「考てる時は足下疎かになるもんなあ。あの人。」

「ふふつ。そこは円谷君に任せると。」

「とりあえず、そんな感じかなあ？こっちの作戦は？」

5人は、急に真面目な顔になつた。

「コナンを中心に左右へパスを回して、各自シユートのタイミング

を計つて。ただそれだけで平氣よ。コナン、あまり本氣は出さないよに。円谷君、あなたは本氣出して。歩美ちゃんは瞬發力に自信を持つて頑張つて。小嶋君、ゴールはあなたに任せるわよ。絶対に入れさせないで。

「よし！徹底的に叩きのめすぞ。でも、歩美ちゃんは、無理するなよ。怪我をしちゃあ、元も子もないからな。」

「うん。無理はしないよ。でも、一点は入れるんだから……。」

「俺は、一点も入れさせねえから、安心して攻めろよな！」

「では、僕は先輩に実力の差を見せつけてあげましょ。」

「その意気ね。昼休みが楽しみだわ。情報の修正は任せて。弱点探

すから。」

「よし。後は、昼休みを待つだけだな。」

そうして、昼休みまでの残りの授業に集中するのだった。

撃退／作戦会議編／（後書き）

次話こそ試合です！

撃退～サッカー部編～（前書き）

やつと書けました。
サッカー好きな方、寛大な心で読んで下さい。

撃退／サッカー部編

昼休み。

5人は、早めに昼食をすませ、ジャージに着替えてグラウンドへと向かつた。

アップのため、ゴールにいる元太に向かつてシュートの練習や、パス回しの練習をする。

大体体が慣れてきた頃、サッカー部が現れた。

歩美の予想通りのメンバーが来ていた。

5分ほどサッカー部にアップの時間を与え、試合を始めることになつた。

「先輩、正々堂々と勝負しましょう。僕たちは負けませんから！！」コナンは、4人の先輩達に宣戦布告をした。

荒木キャプテンは、ニヤッと笑い、

「ああ、こっちも負けるわけにいかないからな。」

と言つて握手を交わした。

コインストスの結果、キックオフは探偵団からになつた。

サッカー部は、荒木キャプテンを中心に右サイドに日比野先輩、左サイドに牛島先輩、そして、ゴールキーパーは梶井先輩だ。

『ピ――――!』

試合開始のホイッスルが鳴つた。

まずは光彦がコナンへボールを送り、攻撃開始！

光彦は左サイドをゴール方面に駆け出した。

その空いたスペースにコナンはボールを蹴りながら向かい、逆サイドの歩美は一度センターラインギリギリまで下がる。そこへ、牛島をかわして光彦が右サイドに走る。

コナンは光彦へバスをし、すかさず空いた左サイドをゴールへと向かう。

歩美は田比野を置き去りに真ん中へ走り込み、光彦からバスを受け、そのまま蹴り進めてゴールキーパーの左足から少し離れたところに思い切りシュートを打ち込んだ。

思いの外速い球に反応が遅れた梶井は、歩美の蹴った球を止められず、開始早々で1失点をしてしまった。

それが、しかも、年下の女子にである。ショックを受けたのは言つまでもない。

「きやー！決まっちゃった 哀ちゃん見た！？先制点だよーーー！」
とハシャぐ歩美。

哀は、笑顔で拍手し、

「歩美ちゃん、その調子よ。頑張つてーーー！」
と声をかけた。

「俺たちも負けてらんねえな。」

「はい、頑張りましょう！次はティフェンスですよ。」
と、コナンと光彦の士気も上がる。

ショックから立ち直りきれていらない梶井は、とりあえず、荒木にパスを出した。

「よし！今の1点を取り返すぞーーー！」

と声をかけながら、荒木はボールを蹴つてセンターラインまで来た。コナンは荒木をピタリとマークする。ここで、歩美が、田比野に振

り切られ、真ん中に向かって走り込む日比野にボールが渡った。何とか追いついた歩美だが、やはり、コンパスの差か、すぐに振り切られてしまった。

そのまま、日比野は元太から遠い、右上角を狙つてシュートを撃つ。しかし、それを読んでいた元太にセーブされてしまった。

「くそっ！」

悔しそうな声がした。

「みんな上がれ！！」

元太は叫びながら、左サイドに上がっていた光彦に思い切りパスをした。

難なく受け止めた光彦は、牛島と1対1でゴールを目指す。コナン仕込みのボールコントロールで、巧みに牛島を翻弄する。それをみたコナンは、邪魔をしないように右サイドに寄つて場所を空けた。歩美もセンターライン付近で待機している。

流石に、加勢には行けないことを分かつているのか、荒木も、日比野も動けないでいた。

牛島は思つた。

『あれ？ 円谷つて、こんなに上手かつたか？ これじゃあまるで、中学時代の江戸川みたいじゃないか！ 円谷は、ちょっと上手いけど、周りに埋もれるタイプじゃなかつたか？ ここまで個人プレーで抜きん出てる奴じやなかつたはずだ。』

光彦は、それに気付いて、不敵に笑つて、

「先輩、僕の実力は、あの頃とは違いますよ。今が、全力です。」と言つて、用は済んだと言わんばかりに、牛島を抜き、ゴールへと向かつた。

牛島は、『しまつた！』と思い、必死で追いかけ、スライディングで足下のボール目掛けて滑り込むが、楽にかわされた上に、シュートを撃たれてしまった。

光彦の蹴つた球は、左に寄つて待ち構えていたキーパーの右上を通り抜け、ゴールネットを揺らしたのだった。

「よつし！…2点目！」

とコナンは光彦とハイタッチをする。

歩美は光彦に抱きついて喜んだ。

「光彦君スゴイ！」

「あ、歩美ちゃん、皆さん気が見てますよ！…」

「お～い、ティフェンスに戻るぞ。」

冷静なコナンの声に、赤面しながら光彦が返事をする。

「はっ、はい！歩美ちゃん、戻りますよ。」

「うん。」

そんな3人を微笑みながら見守っていた哀だが、急に険しい顔になり、牛島に鋭い視線を向けた。

『マズいわ。牛島先輩のあの目。不穏な気配がする。マークを変えさせようかしら。』

と考えていると、「コナンと曰があつた。

コナンも牛島の不穏な気配に気付いたらしい。
哀に向かつて頷いてみせるコナンに、哀も頷く。

すると、「コナンは光彦に向かつて行き、「光彦、荒木先輩についてくれ。何だか、悪い予感がするんだ。」と言つた。

「え？ はあ、いいですけど。」

と答え、荒木先輩へと向かつて駆けていった。

荒木は、今度は牛島にバスを出した。

「なあ、江戸川。お前は中学の時、全然本氣出してなかつたよな？」

円谷もなのか？」

と田が完全に据わり、睨みつけるように聞いてきた。

「はい。俺は、本気なんか出しませんよ。昔も…今もね。光彦は、先輩達を立てるのに、力を抜いてただけですよ。」
と、仕方無さそうに説明した。

少し考え込む牛島の足は、ほぼ止まっていた。

その隙をついてコナンはボールを奪いつつ、

「先輩、あなたがそんなだから、光彦が本気を出せなかつたんですね
よ。」

と言つて、そのまま、ゴールへと一直線に向かつ。

それに気付いた光彦と歩美は、フォローのため直走る。

ディフェンス陣は完全に出遅れてしまつた。

そして、キック力増強シユーズが無くても、充分に強くなつた脚力で、キーパーの真正面、足の間を狙つてシユートを撃ち込んだ。
あまりのスピード、そしてパワーに微動だに出来なかつたキーパーの後ろで、ゴールネットが揺れた。

開始から、12分後の出来事だった。

当初のルール通り、時間内に3点先取したので、試合は終了になつた。

「先輩方、約束です。今後一切、サッカー部への勧誘は止めてくださいね。」

とコナンは、荒木キャプテンに握手を求めながら言った。

「ああ、約束だ。それは守るう。みんなにも言っておく。」

「ありがとうございます。」

「牛島先輩、今まで、本気を出さずにいてすみませんでした。」

光彦は、牛島に向かつて頭を下げる。

「いや、江戸川に言われて目が覚めたよ。俺達が弱すぎたんだな。氣を使わせて悪かった。」

「いえ。では、先輩は、これからもサッカーを頑張つて下さい。僕たちは、探偵を頑張りますから。」

先ほどの不穏な気配はすっかりと消え、晴れ晴れとした笑顔になっていた。

最後、お互に、

「ありがとうございました。」

と頭を下げて、試合は終了したのである。

その日以降、探偵団への部活の勧誘は無くなつた。

撃退／サッカー部編（後書き）

なんか、サッカーのルールとか無視で「めんなさい。

私にはコレが限界でした。

次は探偵部の活動内容が明らかに！？

探偵部（前書き）

探偵部、いよいよ発足！

誤字が有ったので、修正しました。

2011/11/04編集

部活動勧誘も落ち着きを見せ始めたある日。

サッカー部との試合が、他の部にも噂になつて聞こえ、探偵団への勧誘はすっかり影を潜めていた。

「なあ、そろそろ部活申請しないと始めらんないぞ？」

と、5人が屋上でお弁当を食べているときに、「ナンは話し始めた。

「そうですね。まずは、申請内容を決めませんと。」

と光彦が応える。

「活動内容だよね。どうしようか？」

と歩美が訊いた。

「基本的には、『コナンに掛かってくる警察からの応援要請に応える』でいいんじゃないかな。」

と哀が提案すると、

「ああ、そうだな。あとは、事件がない日だけじ、その時は、『各自、探偵に必要な知識を身につけるための勉強をする』でどうだ？」

コナンは、前から考えていたことを言ってみた。

「うん！いいかも。私達、事件に遭遇しても、解決するのは大体、コナン君と哀ちゃんだもんね。私は情報収集位しかできなかつたし。良い機会かも。」

と、歩美は前向きに考えていた。

「僕も、良いと思います。コナン君や灰原さんに比べると、僕の知識は全然、足元にも及びませんからね。将来のことを考えても、勉強しておきたいです。」

光彦もコナンの意見に賛成だ。

「俺は、大体、柔道部の方に出てるから、何も出来ねえけど、良い

と思つぜ！！」

と、元太も頷いた。

「私も、まだまだ調べたいことがあるし、折角だから、医学だけじゃなくて法学とか、経営学も勉強したいわ。」
と哀も前向きだ。

「じゃあ、今日の放課後にでも、申請書作るか。」

「うん。歩美、後で申請用紙貰つてくれるね。」

「僕も行きますよ。歩美ちゃん。」

「じゃあ、頼んだわね。2人とも。」

「あっ！俺の兼部の問題はどうすんだ？」

思い出したように元太は訊いてきた。

「ああ、それは、今日の放課後にでも、担任に聞いてみるか。ちょうど柔道部の顧問だしな。」

「そうね。アレなら、言いくるめ… いえ、説得できそうよね。」

「じゃあ、ワリーけど頼むな。俺は今日も部活だから。」

「ああ、任せとけ。」

などと話していたら、昼休みの終了を告げるチャイムが鳴った。

そして、放課後。

ショートホームルームが終わり、担任教師が教室を後にしようとしたとき。

「先生！阪東先生！…少しお話があるんですが、お時間いただけますか？」

と「ナンは哀と共に、担任の阪東先生に声を掛けた。

「ん？なんだ？江戸川に灰原。今すぐか？」

と不思議そうな顔で聞き返してきた。

「部活動の新規発足についてなんですが、教室にいるので、後で来ていただいても大丈夫ですか？」

と 哀が尋ねた。

「おう、じゃあ、荷物置いて、日誌に田を通してからでも良いか？30分しないで戻つてくるから。」

と阪東先生は聞き返した。

「ナンと哀は、笑顔で、

「はい、では、お待ちします。」

と言つて、軽く頭を下げて、机へと戻つていった。

「ナンたちと入れ替わりで、歩美と光彦が、

「じゃあ、申請用紙取つてくるね。」

「行つてきます。」

と言つて教室を出て行つた。

「確か、申請用紙とかは、教員室を入つて右側の棚にまとめて置いてあつたよね？」

「はい。そのはずですよ。大丈夫です。すぐ見つかりますよ。」

など、会話をしながら、教員室へと向かつていた。

教員室に着くと、すぐに用紙を3枚ほど取つて、教室へと戻つて行つた。

「あれ？歩美ちゃん、3枚も持つて来たんですか？」

と光彦は歩きながら尋ねた。

「うん、だつて、書き損じるかもしれないでしょ？予備でね。」

「ああ、そういうことでしたか。」

「大丈夫だと思つけど、一応ね。」

「ちょっと見せて貰えますか？」

「うん。はい、どうぞ。」

と、歩美は持つて来た内の1枚を光彦に差し出した。

「ありがとうございます。」

光彦は、それを受け取り、立ち止まって内容の確認をする。

「えーと、まず、部活名で、次に部員の学年・クラス・名前と、合計人数、それから活動内容で、最後に顧問になる先生の名前と承認印ですか。」

と光彦が呟くと、

「あっ！顧問…。」

と歩美がはつとして呟いた。

「とりあえず、口ナン君と灰原さんに相談しましちゃ。」「そうだね！行こう。」

と、急ぎ足で教室へと戻つていった。

71

「おかえり。二人とも。」

「わざわざ悪かつたな。」

と、「ナン」と哀は2人に言つた。

「まだ先生戻つて来てないんだよ。」

「先に申請用紙書いておきましょ。」

と言われた2人は、席に着きながら、申請用紙を渡した。

「ねえ、2人とも、口…。」

と、顧問記入欄を指差しながら、歩美が呟いた。

「ああ、そうだな。誰かにお願いしないといけねえんだよな。」

と「ナン」が応えた。

「そうね、誰かいなかしら？どここの顧問もやつてない先生いるかしら？歩美ちゃん、調べられる？」

と哀が歩美に訊くと、

「うん。去年の卒業アルバム見れば大体分かるはず。あとは、それ

を元に先生たちに聞き込みしてみるよ。」「

「じゃあ、僕も一緒にします。コナン君たちは、先生と話していくください。」「

「ああ、わかつた。頼むな。」「

「こつちは任せて。」「

歩美と光彦は、再び教室を後にし、図書室へと向かった。

そのすぐ後、担任の阪東が教室に戻ってきた。

「江戸川に灰原、待たせて悪かったな。」「

と言いながらコナンたちの座っている席まで来た。

「いえ、こつちが無理をお願いしているんですから、気にしないでください。」「

とコナンが笑顔で言うと、

「そうか？じゃあ、わたくしの話だが…。」「

と話を切り出した。

「はい。先生は、柔道部の顧問をしていらっしゃいますよね？」「

「ああ。」「

「では、少しお願ひがあるんですが。」「

「何だ？」

「僕たち、新しく『探偵部』を立ち上げようと思つてゐるんです。」「

阪東が口を挟む前に、哀が言を継ぐ。

「それで、部員は私達と円谷君、吉田さんなんですけどね？部になるにはあと一人、足りないでしょ？」「

そのまま、阪東には口を挟ませずに、コナンと哀が、交互に話を進めていく。

「小嶋元太も、部員に入れたいんです。本人も最初から入る気満々ですし。」「

「でも、彼は柔道推薦で来てるでしょ？」

「柔道部を疎かにしようとは思つてないんです。」

「ただ、探偵団の一員として、探偵部には参加したいといつのが、本人の意向なんです。」

「メインでやるのは、勿論、柔道部です。ただ、俺達にとつても、元太…、いえ、小嶋は必要な存在なんです。」

「どうか、探偵部にも部員登録させて貰えませんか?」「

と、2人は深々と頭を下げた。

そんな2人に圧倒された板東は、無意識の内に頷いてしまった。

「あ…、ああ。分かつた。」

それを訊いた2人は、満面の笑みを浮かべ、

「「ありがとうございます。」」

と再び頭を下げた。

「じゃあ、遅くならないうちに帰るんだぞ。」

と言つて教室を出て行つた。

「は」。ありがとうございました。」

「さよなら。」

と、2人も立つて応えて、先生を見送つた。

「何とかなつたな。」

「ええ。やつぱり簡単だつたわね。」

「ああ。犯人追いつめるより遙かに楽だな。」

「ふふつ、比べるものじゃないわよ。」

と、哀は微笑みながら、コナンの肩に頭を持たせ掛けた。

「ははつ。そうだな。」

と応えながら、コナンは哀の腰に手を回して、引き寄せた。

そのまま、しばらくそうしていたが、廊下の方から足音が聞こえて

きた。

パツと2人が離れた瞬間、勢い良くドアが開いた。

「ただいま。」

「お待たせしました。」

と言つて、歩美と光彦が入つてきた。

「おう、どうだつた?」

「何か収穫あつた?」

とコナンと哀は口々に訊く。

すると、歩美がにつこり笑つて

「うん!見つけてきたよ。」

と言つた。

「あら、やつぱり2人は優秀ね。こっちも、OK貰つたわよ。」

と哀が言つと、

「本當ですか!?さすがお一人ですね。」

「まあな。で、そつちは、結局誰がいたんだ?」

「あつ、うん。あのね、1・Bの担任の、大友先生。新任で、まだ何も担当してないんだって。」

「話をしてみたら、顧問になつていただけるそうですよ!」

「おつ!でかした。2人とも。じゃあ、さつさと記入しちまおつ。」

と言つて、コナンは、新規部活動申請用紙にペンを走らせた。

? 部活名 探偵部

? 部員

部長:1・A江戸川コナン

副部長:1・A灰原哀

部員

1・A円谷光彦

1・A吉田歩美

1 - A 小嶋元太

以上、5名

?活動内容

- 1・警察からの応援要請に応え、事件解決に尽力する。
- 2・警察からの要請が無い時は、各自、探偵として必要な知識を身につけるため、勉強する。

例：法学、医学、薬学、経営学、語学など。

?顧問

1 - B 担任 大友永嗣

「口まで書いて、コナンはペンを置いた。

「あとは、顧問の承認印だな。」

「ええ。まだいるかしら？」

「いるはずですよ。」

「大丈夫！待つててくれるって言つてたもん。」

と話ながら、四人は教員室へと向かつた。

「失礼します。1 - Bの大友先生いらっしゃいますか？」とコナンがドアを開けて訪ねると、

「はい。」

と声が返ってきた。

「おっ！探偵部だな。待つてたぞ！」

と言いながら大股で近づいてきた。

「お待たせしてすみません。これが、申請用紙です。内容の確認をお願いします。」

と、コナンが紙を差し出す。

「ああ。……ん？」この小嶋つて、柔道部の有力株か？兼部させて大丈夫なのか？」

「あ、それは、柔道部の顧問で私達の担任の阪東先生に了承を得ました。」

と、哀が説明する。

「そうか、ならいいが。ん？」この、警察からの要請って、どういうことだ？警察が高校生に事件解決を頼むわけ無いだろ？

「先生、この辺の人じゃないんですか？僕達、すでに小学生の時分から、警察と事件を解決してきてるんですよ。」

「帝丹小（帝丹中）少年探偵団って言えば、この辺りじゃ、結構有名なんですよ！」

と、光彦と歩美は自慢気に言った。

「あ…ああ、そうなのか？じゃあ、それもいとしよう。あとは、問題ないな。よし、ちょっと待ってる。」

少し後退り気味で応え、用紙を持って机に向かつた。そして、判を押してコナンに返しに来た。

「ありがとうございます。後は、生徒会に提出して、承認を貰えば、活動開始だな。」コナンは、先生にお礼を言い、振り返つて皆に話しかけた。

「はい！じゃあ、早速生徒会に提出に行きましょう。」

「5時まではいるらしいよ。」

「まだ間に合うわね。行きましょう。」

と話して、四人は教員室を後にした。

そして、生徒会室へ着き、ドアをノックする。

「失礼します。すいません、1-Aの江戸川と申しますが、会長はいらっしゃいますか？」

すると、奥から1人の女生徒が近寄ってきた。

「はい？会長は私ですか？何ですか？」

と、スラッシュした長身で、髪を短く切りそろえている女生徒が名乗

り出た。

「あ、沢村会長ですね？今、お時間よろしいですか？新規部活動申請用紙を記入して来たんですが、目を通していただけますか？」

と言つて、コナンは申請用紙を差し出す。

会長は一囗りと笑つて、

「ええ、大丈夫ですよ。じゃあ、拝見しますね。」
と言つて、書類に目を通す。

4人は、ドキドキして会長の言葉を待つていた。

「はい、探偵部ですね。部員は5名、活動内容も特に問題ないわね。
いいでしょ。承認します。木村君、ハンコ取つて。」

会長は、コナンたちに向かつて笑顔で言つて、後ろを振り向いて、
副会長の木村に話しかけた。

木村は、承認印を渡しながら、

「はい。どうぞ。」

と声を掛ける

「ありがとうございます。では、探偵部の活動を、本日付けて承認します。但
し、くれぐれも怪我などしないように活動してください。」

木村に礼を言い、4人に向き直つて言つた。

4人は、満面の笑みで、

「――はい。」「――」

と返事をし、

「ありがとうございました。失礼します。」
と頭を下げて退出した。

「やつたね！」「で探偵団、活動再開だよ！」「
いや～、ちょっとドキドキしましたね。でも、良かったで
す！」

「本当、良かったわ。活動は明日からで良いわね？」

「ああ、俺も、警部たちに連絡したこと。応援要請来なくなつちまうな。」

そう、入学から今まで、一度も警察から連絡がないのは、コナンが警部たちに、落ち着くまで、応援要請は待つておひつよひつ話をしていたからだ。

新一の時とは違い、授業中の呼び出しもやめておひつよひつしている。

「どうあえず、今日はもう帰るか。」

「そうね。お夕飯の買い物もあるし。」

「そつか。じや、帰ろ。」

「一旦教室に戻つて鞄取つてこないといけませんね。」

「ああ、じゃ、行こう。」

と言つて、四人は鞄を取りに行き、仲良く帰つて行つた。

探偵部（後書き）

「指摘いただきました、青ハル様、ありがとうございました。」

以後、気を引き締めて、頑張りますので宜しくお願ひします。

報告（前書き）

お待たせしました。
短いです。

探偵部が発足したその日、コナンは、自宅の電話から田暮警部に電話をかけた。

「プルルル、プルルル、プルッ

『はい、田暮。』

『あ、もしもし？ 田暮警部ですか？』

『そつ、その声は！ – 工藤君かつ！ – やつぱり生れて… – – –』

『あの、すみません、江戸川コナンです…。』

『あつ、ああ、コナン君か。いや、勘違いしてすまなかつたね。』

『いえ。気にしないでください。ところで、僕と新一お兄さんの声つてそんなに似てますか？』

コナンは、本人なんだから、当たり前と言えば当たり前のことを訊いてみる。

『ああ、そうだね。よく似ているよ。声だけじゃなく、顔も、頭脳もな。』

田暮は電話の向こうでしみじみと呟く。

『……そうですか。』

『だがな、コナン君、君の方が工藤君より、視野が広い気がするよ。やっぱり、仲間がいると違うのかね？ そう言えば、探偵団の子たちは元気かい？』

『あつ、今日はそのことで電話したんですね！』

『ん？ 高校には慣れたかな？』

『はい。それで、今日なんですが、探偵部を発足したので、授業中以外でしたら、捜査協力が出来るようになつたんです。』

『本當かい！？ 部活にしたのか。じゃあ、こちらからも学校側に話をした方がいいかな？』

『いえ、その辺は、活動内容にて、警察からの協力要請に尽力すると

明記して、活動許可を取つたので、問題はないはずです。」

『おお、そうか。じゃあ、事件が起きたら、すぐに電話じよ。』

「はい、では、何かありましたら。これからも宜しくお願ひします。』

「コナンは電話口で頭を下げた。

『ひからこそ、よろしく頼むな。じゃあ、コナン君、また。』

「はい。失礼します。』

と言つてお互いに電話を切つた。

コナンが電話を切ると、

「電話、終わつた？ 警部さん、何か言つてた？」

と、Hプロン姿の哀が近づいて來た。

その腰をさらう様に引き寄せて、

「ん？ ああ、新一と間違われたよ。』

肩をすくめて、優しい笑顔で言つ「コナンへ、元気にな。

「そう…。』

少し俯いて小さな声で返す哀。

そんな哀を抱きしめて、

「哀、まだ気にしてんのか？ コレで良かつたんだよ。』

「…つでも！』

涙目になりながら言い返そうとした哀に、

「哀？ 僕は愛するお前と人生を歩んでいくてるんだ。これ以上幸せなことはない。な？』

真剣な瞳で見つめ、流れる哀の涙を唇ですくつた。

「だから、もう泣かないでくれ。いつもの優しい笑顔を見せて？」

コナンの言葉に、哀は涙を拭いながら微笑んだ。

「ありがとう。私も愛してる。とっても幸せよ。』

「ああ、誰よりも愛してるよ。よし！ じゃあ、夕飯にするか？」

「ふふつ、そうね。今日はオムライスよ。』

2人は肩を寄せ合いながらリビングへ行き、夕飯を食べるのだった。

報告（後書き）

田暮警部の喋り方がいまいちつかめない……。
次回は何か起きるかな？

教師と刑事

田暮警部に報告の電話をしてから、早数日。警察からの応援要請もなく、平和な日々を過ごしていた。

「ねえ、みんなーもうすぐゴールデンウィークだよーー」「歩美がワクワクした顔で話し掛けた。

「そうですね。今年はどうしましようか？元太君は柔道部で合宿があるって言ってましたけど。」

光彦は少し残念そうに応えた。

「あ、そう言えば、博士が、奥多摩の方に友人のコテージがあるって言つてたわよ。」

哀は思い出したように言つた。

「ああ、そう言えば言つてたな。どうする？今年は4人で行くか？」

コナンは哀に頷きながら、みんなに訊いた。

「うーん…あつ…良いこと思いつっちゃった」「

歩美が何かを閃いた。

「なんですか？歩美ちゃん。」「

「？？？」

「あのね、私たちも、合宿にしてやおつよ！」

「ええ？合宿ですか？」

「うん、もちろん、先生の許可を取つてからだけね。」「

まあ、そりゃそうだな。」

「でも、合宿つて、何するの？学校に居たんじゃ、事件は起きないわよ？」「

「つて、哀、なんかそれじゃ、『出掛けると事件が起る』みたいな言い方だぞ？」

「あながち間違いではないんじゃないですか？コナン君。」

「そうだよ。皆でどこかに出掛けると、いつも事件起きるし。」

「そうよね。誰かさんが事件吸引体質だから。ねえ?名探偵さん?」

「俺かあ?」

「はい。」

「うん……」

「他に誰が居るかしら?」

「ははは……、はあ~。」

「ふふふ。まあ、そんなことよつ、やるなら、先生に許可取らないと。」

「そうだね!合宿内容きめひやおひ。」

「まずは日時ですね。」

光彦は机からノートを取り出し、何も書いていないページを開いた。
「あ~、じゃあ、5月2日~4日とか?一泊三日ぐらいでいいんじやないか?」

「そうね。だれか、予定がある人居る?」

「大丈夫だよ。」

「僕も大丈夫です。」

「じゃあ、日にちは決まりね。場所は……。」

「博士の友人の『テージでいいんじゃないか?』

「うん、そうだね。学校じゃ何も起きそうにないもんね。」

「では、5月2日~4日で、奥多摩の『テージ…つと。』

光彦は確認しながらノートに書いていった。

「内容はどうする?」

「とりあえず、オーソドックスに親睦を深めるとか?」

苦笑しながら光彦は、

「それは、既にだいぶ深いかと……。」

「そうね。まあ、事件が起きない限りは、各自勉強かしらね?解らないところは、お互いに訊けばいいし。」

と哀がフォローした。

「それが妥当だろうな。」

「ナンも、哀の意見に賛同した。」

「じゃあ、それで行きましょう。えーと、事件が起きない限りは、各自勉強する…ですね。」

光彦はノートに書き込み、満足そうな顔をした。

「じゃあ、先生に許可取りに行こう」と、4人は教員室へと向かつた。

探偵部の4人が合宿の相談をしていた頃。

教員室には、3人の男女が訪ねてきていた。

「すみません、探偵部の顧問をしている先生はいらっしゃいますか？」

一番年の若い男性が話し掛ける。

「あつ！はい、私ですが。どう言つたゞ用件でしょつか？」

探偵部顧問の大友は、見知らぬ3人の男女を警戒しつつ、用件をきいた。

「あ、突然申し訳ございません。私、こういうものでございます。」

と言つて、年配の男性は、懐から警察手帳を出し開いて見せた。

それに倣い、年若い2人の男女も、手帳を取り出し、開いて見せた。

「警視庁捜査一課の日暮と申します。」

「同じく、佐藤です。」

「高木です。」

と名乗つた3人に、

「あつ、え、探偵部顧問の大友と申します。」

とあわてて名乗り返した。

「今日は、どう言つたご用件で？探偵部の子たちが何かしでかした

んでしょうか？」

少し青ざめた様子で、訊いてくる大友に、「ああ、いや、違うんです。あの子たちは、警察に迷惑を掛けるような人間じゃありませんから。」

高木は、苦笑しながら言い返した。

「では…？」

安心した大友だが、そうなると用件が気になつた。

「ええ、今日は、探偵部の子たちを度々借りることになるので、ご挨拶に伺つたんですよ。」

佐藤は、笑顔で言った。

「いや、コナン君には、ちゃんと許可は取つてあるから大丈夫だと言われたんですが、それはそれ、一応、ご挨拶だけはと伺つた次第で。」

と、田暮が苦笑しながら付け足した。

「えつ！？じゃあ、彼らが、度々事件を解決してゐるって言つのは本当のことなんですか？」

「おや、知らなかつたんですね？彼らには、小学生の頃から、協力してもらつてるんですよ。」

「えつ！？」

「新聞に載つたこともありましたよ。地元では、結構有名ですし。「最近では、あの工藤新一の再来かと言つてゐるくらいです。特にコナン君が、工藤君とそっくりでね。」

「まさか…、本当だつたなんて。」

「ん？どうかしましたかな？」

「彼らは、とても優秀な子たちですよ。私たち警察や、大人が相手でも、一歩も引かず、事件の全容を素早く組み立てて、推理し、犯人を見つけだす。卒業したら、すぐにでも警察に欲しい人材ですよ。」

「いや…、そんな、高校生になつたばかりの子供に対しても、買いかぶり過ぎじゃないですか？」

「何を言つてるんですか！？あれほど優秀な子たちはそいつ居ませんよ。工藤君以来…、いや、それ以上かもしません。」

「そつそんなにですか？」

驚きを隠せずにいる大友に対し、3人は大きく頷いた。

「貴方も、これから、あの子たちと行動を共にすれば嫌でもわかりますよ。彼らがどれほど優秀か。」

「彼らは、手掛けた事件は、確実に解決してくれるので、また、協力をお願いしますが、授業中は避けるので、安心して下さい。」

「は…はい。」

大友は、既に聞いた話だけで、頭がいっぱいになつていて、頷きはするものの、気はそぞろだつた。

3人は、挨拶をすませると、呆然と佇む大友をそのままに、颯爽と教員室を後にした。

教師と刑事（後書き）

次回は、「ゴールデン・ウイーク」の話です。

四三三（前略）

おまかでござりまへぬといふ事はござりません。

5月2日 午前7時50分

探偵部の5人は帝丹高校の正門前にいた。

4人は私服に、1人は学校指定のジャージに身を包んでいた。

「おう！おまえら、俺はこのまま柔道部に行くけど、気を付けて行けよ。何かあつたらメールしろよな！！」

元太は大きな声で言った。

「ああ、おめーも怪我しないようにな。」

「お土産買つてくるからね。」

「柔道部、頑張つて下さい。」

「貴方は何も心配せずに柔道に集中しなさい。じゃないと、怪我するわよ。」

コナン、歩美、光彦、哀と、それぞれが元太に声を掛けた。

「おめーらも、怪我しないようにな。休み明け、どんな事件が起きたか教えるよ。じゃあな！」

元太は言つだけ言つと、校内に向かつて走つて行つてしまつた。

「…はは。アイツまで何か起きるつて確信してやがる。」

コナンは、半ば諦めたような顔で呟いた。

「起きるでしょ？」

「起きますよね。」

「起きるわね。」

「おじおい…。」

3人に断定され、コナンは、がっくりと肩を落としてうなだれた。

その時、

「みんな、おはよう。全員揃つてるな？」
と、顧問の大友がやってきた。

「 「 「 「 おはよう」やります。」 「 「 「

「はい。大丈夫です。行きましょう。」

「じゃあ、出発!といいで、何が起きるんだ?」

大友は、駅に向かって歩き出しながら訊いた。

「え?」

「さつき、起きるつて言つてただろ?」

「ああ、それはですね、何らかの事件が起きるつて話してたんですよ。」

「はあ?そんなもん、そつそつあるわけ無いだろ?」

「何言つてるんですけど、起きますよ!絶対に。だって、コナン君が居るんだもん!!!」

「いや...、歩美ちゃん、そんなに力説されても。」

「先生、この合宿中に、私達のこと、少しほ分かるんじやないかしら?」

「この合宿の目的は、先生に俺たちのことを知つてもいいことなんですよ。」

「ん? そうなのか?」

「ええ、先生、顧問なのに私達のこと、何も知らないでしょ?」

「いや、少しくらいなら知つてるね。」

～～回想～～～～～

警察の人たちが帰ったあと、俺は、しばらく呆然と立ち尽くしていた。

そこに、探偵部の4人はやってきた。

「あつ！大友先生！」

「良かつたです、ちょうど居て下をついて。少しのお話よろしいですか？」

吉田と円谷が、にこやかに話し掛けってきた。

俺は、その声で、やつと正気に戻った。

「え？あ、ああ…。どうした？」

2人の後ろでは、江戸川と灰原が少し訝しげな顔をしている。

「先生こそ、どうかなさいましたか？」

江戸川が探るような目で訊いてきた。

鋭いな。だが、警察の人たちが来たことは言わない方がいいだろう。

「いや？別に何でもないぞ。そっちの用は何だ？」

「ごまかしきれてはいないだろうが、まあ、良いだろう。

「あ、はい。ゴールデンウィークのことなんですが、親睦を深める

ために、合宿をしませんか？」

「先生に何の予定もなければですけど。」

吉田が上目遣いで聞いてくる。仕方ないなあつて気になるのは何故だろう？

「特に予定はないが、いつだい？」

「5月2日～4日。奥多摩に、私の保護者の友人が持つてゐるゴルデンがあるから、そこで。」

灰原は、的確に用件だけを言う子だな。

「分かった。許可しよう。当田は電車で移動だな。朝8時に正門に集合しよう。小嶋は無理だよな？」

「はい、彼は、ゴールデンウィーク中ずっと、柔道部の合宿がありますから。4人だけです。」

「そうか。分かった。じゃあ、今日はもう良いか？ちょっと調べ物をしないといけないんだ。」

探偵団について、少しでも調べていかなければ！

「そうですか。では、僕達も、警察からの呼び出しもないみたいなので、帰ります。失礼しました。」

「おう。気を付けて帰れよ。」

「はい！失礼します。」

よし、みんな帰つたな。

取りあえず、彼らの担任に訊いてみるか。

「阪東先生、ちょっとお聞きしたいんですが。」

「何ですか？大友先生。」

「先生のクラスの江戸川、灰原、円谷、吉田、小嶋の5人なんですが、彼らが、探偵部を立ち上げたのは知つてますよね？」

「ああ。小嶋の件で相談もされましたから。」

「元々、少年探偵団として活動をしてたって聞いたんですが、何か知つてますか？」

すると、阪東先生は目を見開き、

「えっ！？彼らを知らないんですか？」

「そんなん有名なんですか？」

「ええ、それはもう！！特に江戸川です。彼は、工藤新一の遠い親戚らしいんですが、彼譲りの推理力は、警察ですら舌を巻くほどですよ。それに、中学に入るまで、あの、眠りの小五郎の下に身を寄せたつて話です。」

阪東先生は、いつになく饒舌になつてゐる。

「へえ、あの眠りの小五郎のねえ。そこで経験を積んだんですね。」

「そうです！それに、灰原！！彼女も凄いんですよ。大人すらも知らないような、薬学・医学の知識で、江戸川の良きパートナーになつてるんです。あの2人は、他の3人とは、比べものにならないくらい、知識が豊富なんですよ。きっと、あの2人みたいのを天才つて言つんでしようね。」

しみじみと言う阪東先生。

「それは…。」

もう、言葉すら出なくなつてきた。

「円谷と吉田も、頭の回転が速く、行動力もあるんですが、やはり、あの2人と一緒にいると、目立たなくなるんですよね。小嶋は、あ

の中では、異質な感じですね。頭はあまり良くないが、行動力はあるんですよ。それに、柔道を始めてからは、犯人の確保で活躍するよくなつたとか。」

俺は、最後の言葉に度肝を抜かれて、つい、大きな声を出してしまつた。

「犯人！？確保！？えつ？彼らは、今までどんな事件に遭つてきましたか？」

「あ～、挙げたらキリがなさそなんで、簡単に言いますが…、殺人、強盗、放火、誘拐、監禁等ですかね。」

阪東先生は苦笑してるが、俺には笑えない…。

「そつそつですか…。ネットとかで調べれば出てきますかね？」

「出ますよ。帝丹／少年探偵団で調べれば一発です。」

「そうですか。帰つて調べてみますよ。」

その後、俺は、家のパソコンで調べてみたんだ。
分かったのは、彼らは尋常じやないほど、事件に出くわしているつこと。それに、全てをちゃんと解決に導いている。
事件の詳細や、解決方法が、細かく載つてているわけではなかつたが、彼らがその場について、後に警察から表彰を受けているという事実は載つていた。

「これは…、俺、大丈夫か？まあ、しばらくは様子を見るしかないな。合宿中に彼らを観察して、今後の対応を決めるか。」

（～回想終～）

「先生？何をボーッとしてるんですか？電車、出ちやいますよ。」「あつ？え？ああ、すまんすまん。」

数日前のことを見出していた大友は、慌てて電車に乗り込んだ。

「それで？先生、何をボーッとしてたんですか？」

「いや、何でもない。」

「何でもないわけ無いですよね？僕達のことでしょう？」

「…ああ。まあな。顧問なんだから、お前たちのことを少しは知っておかないとと思って、調べたんだ。」「おかしいですね。この前まで、全然気にしてなかつたと思いましたけど。」

「何か、調べようと思つたキッカケでも？」

「いや、別に。」

明後日の方向を見ながら言う大友に、

「警部たちが挨拶にでも来たんじゃないんですか？それで、興味を持った。」

呆れたような顔で「ナンは言つた。

「そうね。きっと、合宿の許可を取つたあの日ね。あの時から様子がおかしかつたもの。」

哀は、コナンに頷きながら言つた。

「でも先生、どうせ、調べたつていつても、誰かに聞いたとか、ネットで調べたくらいでしょ？」

「それじゃあ、僕達を知つたことにはなりませんよ。今日からの3日間、よく見ていて下さい。」

歩美と光彦は、意味ありげに言つて、笑顔を見せた。

「おい、それはどういう意味」

「あつ！次ですよ。降りるの。皆さん、準備して下さい！」

光彦は、大友が言い切らぬ内に言葉を発し、降りる準備を促した。

「コラッ！俺の話が途中だぞ！」

大友は怒るが、

「先生、そのうち分かるわよ。それまで待つてなさい。」

「ああ、先生は、俺達を見てるだけでいいんだ。」

「いや、静かに言った。

「ああ、先生は、俺達を見てるだけでいいんだ。」

コナンは真剣な様子で咳く。

「江戸川？」

「降りますよ。先生。後、バスで15分位です。」

「おい？さつきのはじうごうことだ？見てるだけって……。」
話を逸らしたコナンだが、思いの外食い下がる大友に、ため息混じりで、

「言葉の通りですよ。夜にでも、哀と3人で話しましょう。」「そうね。今後のこといろいろとね。」

「あ……、ああ。分かった。」

そんな会話をしていると、バスが来た。

「さあ、これで、15分行つたんですよ！乗りましょう。」

光彦が先頭でバスに乗り込んでいく。

バスには、地元の人らしいおじいさんやおばあさんが、数人乗っていた。

5人は、邪魔にならないように、一番後ろに一列に並んで座ることにした。

運転席側から、大友、コナン、哀、歩美、光彦の順番だ。

他愛のない会話をしながら、バスが動き出すのを待っていると、優先席に座っていたおばあさんが、急に胸を押されて苦しみだした。

「うううっ！…」

「はっ！…哀！」

「ええ。」

それを目に留めたコナンは哀に合図をして立ち上がり、駆けつけた。

「もしもし？どうなさいました？苦しいのは胸ですか？」

哀は、おばあさんの横に膝立ちになり、背中をさすりながら話し掛ける。

「あ……ああ……」

おばあさんは、うめきながらも、何とか頷いた。

「どなたか、この女性とお知り合いの方はいらっしゃいませんか？」

コナンは、周りの人たちを見回しながら、話し掛けた。

「は、はい。友人です。」

「この方は、何か持病でもありますか？何か普段から薬を飲んでるとか。」

「はい。心臓があまり丈夫じゃないと言つてましたが。」

「ありがとうございます。哀、荷物に薬が入ってないか？」

哀は、コナンに言われて、カバンに手を入れた。

「カバン、ちょっと失礼しますね。……あつ、あつたわ。」

コナンは振り向き、

「光彦、歩美ちゃん、水持つてないか？」

「あるよ。待つてて。」

歩美は、急いで鞄から、ペットボトルに入った水を取り出して、コナンに渡した。

「サンキュー！哀。」

「ありがと。」

哀は、水を受け取ると、おばあさんを支えながら薬と水を飲ませた。
「さあ、お薬です。慌てなくて大丈夫ですよ。ゆっくり、ゆっくり。
：大丈夫ですか？ゆっくり呼吸して下さい。」

哀は、おばあさんに優しく声を掛けながら、落ち着かせた。
少しすると、呼吸が楽になったようで、弱々しいながらも笑顔で、
「すみません。ありがとうございます。」

とお礼をした。

「いえ。お気になさらずに。」

「大丈夫ですか？」

「おばあちゃん、手を貸すから、ゆっくりでいいんで、椅子に座りましょ。」

「さあ、手を。」

歩美と光彦は、おばあさんを両側から支えて、ゆっくりと椅子に座らせた。

「何から今まで、すみませんねえ。」

「いえ。お役に立てて何よりです。」

コナンが笑顔で言つと、

「でも、心配なので、近い内に病院に行つて下さい。

と、哀も控えめな笑顔で話し掛けた。

「ええ。本当にありがとうございます。」

「どういたしまして。では、僕達は、次で降りるので、失礼します。

お大事に。」

と言つて、コナンたちは、自分たちのシートに荷物を取りに戻つた。それを、一部始終、無言で見守つていた大友は、4人の的確な対応に戸惑つていた。

周りにいた大人たちも、驚いてる様子だつた。

「先生、降りますよ。」

声を掛けられ、ハツとして荷物をつかみ、バスから降りていく。

その時、3人は、先ほどのおばあさんに軽く会釈をしながら降りていつた。

しかし、コナンだけは、おばあさんの知り合いだという女性に、「あの、申し訳ないんですが、まだ、本調子には戻れないと思うので、家まで送つてあげてもらえますか?」と聞き、女性が、

「あ、はい。分かりました。」

と答えると、

「じゃあ、すみませんが、お願いします。」

と言いながら、頭を下げ、バスを降りていつた。

そして、5人はコテージへと向かつた。

合宿～一日目（後書き）

合宿編、まだまだ続きます。

合宿～一日目～顧問の苦悩～（前書き）

まだまだ事件は起ります。
今回も、顧問が悩みます。

「テージに着いて、一休みした後、お皿までは、各自、自由行動になつた。

コナンは、最近、哀に借りて読むよつになつた、薬学の本を読み始めた。

哀は、工藤邸の書斎から拝借した経営学の本を読んでいる。何故、哀が経営学の本を読んでいるかといふと、

～回想～～～～～

ある日、哀とコナンは書斎にいた。

哀は、ある本を持ちながら、

「ねえ？この本、借りてもいいかしら？」

と言つた。コナンは、頷きながら、

「ん？ 経営学？ いけど、急にどうした？」

と問い合わせた。

「この先、必要になるかと思つて。」

「え？ あ、ああ。そうか？」

「貴方、高校を卒業したら、大学に進むでしょ？ 法学部のある。その後、探偵事務所を開く予定だし。」

「ああ、そうだな。哀は、また、医学か薬学に進むのか？」

「いいえ、私は、それは十分だわ。だから、経済学部があるといふに行こうと思うの。」

「経済？ 灰原哀で、博士号は取らない氣なのか？」

「ええ。必要無いわ。知識だけあれば、あなたの役には立てるでしょ？」

「それはただけど……。」

「それに、経済学部なら、貴方の探偵事務所を少しは手伝えるわ。

経営を私がやれば、貴方は事件と推理に集中できるでしょ？」

「哀…。ありがとう。そこまで考えていてくれて。」

「当然のことよ。私は、貴方なしでは生きられないもの。」

「俺も、オメエのいない人生は考えられないさ。」

コナンと哀は、お互いの愛の深さに感動し、どちらからともなく歩み寄り、抱きしめ合つた。

「哀、大学を卒業するまでは、待つつもりだつたんだけど…、高校を卒業したら、結婚しないか？」

「コナン！？……本当？いいの？私で。」

「哀、お前以外はあり得ない。」

「嬉しい！！」

哀は、コナンを抱きしめていた腕に、さらに力を込めた。コナンも、哀をぎゅっと一層強く抱きしめた。

（～回想終～）

と言つことがあつたのだ。

それからと言つもの、哀は、書斎に置いてある経営関係の本を度々読むようになった。

光彦と歩美は、大友が何かを考え込んでいるのが気になり、「せ～んせつ！何考へてるの？」

と歩美が話しかけた。

大友は、驚いて顔を上げた。

「えつ！？な、何だ？」

「いえ、先生が何か考へ事をしていらっしゃるようなので話しかけてみただけなんですが。」

驚く大友に対し、光彦は冷静に答える。

「どうしたの？先生。」

歩美は小首を傾げながら訊いた。

「ああ、さつきのことを思い出していたんだ。」

「さつき？つてバスのおばあさんのこと？」

「ああ、おばあさんを心配なさつてたんですね。」

光彦は、納得したように頷きながら言った。

しかし、大友は首を横に振りながら、

「いや、違う。お前たちのことだ。」

と言い切った。

「え？私達？？」

「何か、おかしなことでもありましたか？当然の対応をしただけですぐ。」

光彦も、歩美も、訳が分からぬといった様子で聞き返す。

「いや、対応は素晴らしいかった。俺が考えていたのは…、あの時、おばあさんの周りには何人が大人もいただろ？だが、一番早く、しかも迅速に動いたのは、江戸川と灰原だった。他の人、円谷、吉田、お前たちや俺を含めて数人は、反応すら出来ずに事態を見守っていた。…何故、あの二人は直ぐに反応出来たのか？その原動力は何なのか？それを考えていたんだ。」

大友は、考えていたことを、一気に吐き出した。すると、少し不満そうに、

「先生、それは間違ってるよ！私と光彦君は、反応できなかつたんじゃないもん。動く必要がなかつただけだもん。」

と、歩美は頬を膨らませながら言つた。

「そうですよ。あの時は、コナン君と灰原さんが先に動いたので、僕達が出る幕は無かつたんです。あの二人は、僕達より、遙かに色々な状況に対処できる知識を持つているんですから。」

光彦も、大友に言い聞かせるように話しお出した。

「だから、コナン君は、お水が必要になつたときに私達に声を掛け

たんだよ。あの中で、事の成り行きを見ているだけじゃなくて、すぐ動ける用に待機してたのが、私達だけだったから。」

と歩美が説明すると

「あ…、確かに、あの状況で水を求められても、反応できた人はいなかつたな。だが、あの一人の冷静さはどこから来るんだ？」

大友は、少し納得したが、まだ疑問が残っていた。

「あれは、経験に因るものじゃないですかね？」

「あと、探偵として、困ってる人とか、苦しんでる人をほつとけないんじゃない？ほら、死体を見逃せないようにさ。」

歩美が笑顔で言い放つた最後の一言に、大友は、がっくりとし、

「いや、死体は見逃したいだろ…。」

と呟いた。

「何を言つてるんですか、見逃したら、僕達の活動意義が無くなります。」

と、光彦は胸を張つて言つた。

大友は、あまりの価値観の違いに戸惑い、話を逸らすことにした。

「あ…、いや、そつそれよりも、今まで遭遇した事件のことを教えてくれないか？ネットの情報だけじゃ、ダメなんだろ？？」

光彦と歩美は少し視線を交わし、頷き合つた。

「今までのと言われましても、沢山ありますまして、何を話せばいいやら…。」

光彦は、少し困ったように言つたが、歩美は、楽しそうに、

「先生はどんなのを聞きたい？殺人事件？放火犯捕まえた話？誘拐事件？それとも、危なかつた話？」

と訊くと、大友は、顔をひきつらせながら、

「一番印象に残つてるのはどんな事件だ？」

と訊いてみた。

すると、そこで、

「ねえ、そろそろお昼じゃないかしら？」

と哀が本を置いて呼びに来た。

「話は、昼飯食いながらでもいいだろ?」

「ナンも、哀と一緒に立っている。」

「そうですね。まずは、お昼の準備ですね。」

光彦は賛同した。

「うん!じゃ、作ろ!」哀ちゃん。」

歩美は笑顔全開で哀に言つ。

「ええ。作りましょうか。コナン、貴方はテーブルセッティングよ。円谷君は料理できるなら手伝つて頂戴。先生は座つていいわ。」

哀は皆に指示を出した。

「ああ、わあつてるよ。」

「はい、お手伝いします。」

「ああ。分かつた。」

コナンは少しふてくされ、光彦は張り切り、大友はぼんやりと返事を返した。

そして、テーブルには、形の綺麗なオムライス、スープ、サラダが並んだ。

「さあ、食べましょう。」

と哀が言つと、

「「「頂きます。」」」

と一斉に言つて食べ出した。

少し食べ進めたところで、

「さつきの話だが、何が一番印象深かったんだ?」

と大友が切り出した。

「そうですねえ。やっぱり、ツインタワービル爆破事件じゃないですか?」

「うーん、そうだね!あつ、古城の事件も命がけだったよ!」

「哀が転校してきてすぐに偽札事件もあったな。」

「スキーに行こうとしたら、バスジャックにあったわよね。」

「先生、どれがいい？それとも、全部？」

「え？あ～、じゃあ、簡単な概要だけ全部聞くかな。」

大友は、何ともいえないような顔で答えた。

その後、途中でお茶休憩をしながら、延々5時間ほど事件について語り続けた。

コナンと哀は、当時、事件の概要が理解できていなかつた歩美と光彦にも分かるように、解決した経緯や、必要とした知識などを補足していくつた。

そんな4人の話を聞きながら、一言もしゃべらずにいた大友だったが、最後に一つだけ訊いた。

「なあ、お前たち、それは、いつの話だ？」

至極当然の質問だった。

「全部、小1の時だよ。」

歩美はこととなげに答える。

「はあ！？小1？あり得ないだろ？！なんで高校で習う物理や、薬物にそんなに詳しいんだ？」

大友は目を見開きながら大きな声を出した。

「はあ。そうよね。普通の大人はそう思つわよね。」

哀はため息をつきながら呟いた。

「ああ、俺たちの周りにはいなかつたけどな。俺たちも誤魔化してたし。」

「先生、その答えは後で教えるわ。」

と哀が大友に向けて言った直後、隣にいる哀にしか聞こえないくらいの声で、「コナンが、

「真実かどうかは別として…な。」

と呟いた。

それには気づかず、大友は、

「ああ、じゃあ、夕飯の支度にかかるつか。」

と、皆を促した。

哀と歩美、光彦はキッキンぐ、コナンは風呂掃除とベッドメイクを

しにリビングを出ていった。

残された大友は、「ナン」と哀の異質さに疑問を持つていた。

「江戸川と灰原…、あの一人は何なんだ？時々だが、俺より年上の
ような雰囲気を醸すときがある。それに、俺に対して年下に言い聞
かせるような物言い…。他の一人を見守るあの目は、友達と言うよ
り、子供や弟妹に向けるようじゃないか？あの一人が、俺に見てる
だけでいいって言った意味は？はあ…、俺、どうすりやいいんだよ
…。」

大友の独り言は、誰に届くこともなく、リビングに消えていった。

合宿？～1日目～顧問の苦悩～（後書き）

次はコナンと哀と大友先生の会話になるでしょう。
次話も宜しくお願ひします。

合宿？一日目～生い立ち～（前書き）

今回は、コナン、哀、先生の3人で話をします。
真実か嘘か…。

合宿？一日目～生い立ち

夕飯も食べ終わり、各自、お風呂にも入って、後は寝るだけ。部屋割りは、勿論、女子部屋と男子部屋に別れました。

先生は、コナンと光彦と同じ部屋で寝ることに。

軽く雑談を交わしていた5人だったが、既に夜11時になっていた。

「そろそろ部屋に引き上げるか？」

とコナンが提案すると、

「うん。眠くなつて来ちゃつた。」

と歩美が田をこすりながら応えた。

「そうですね。明日もありますし、そろそろ寝ましょー。」

光彦も頷きながら言つた。

「じゃあ、コナンと先生は、ちょっと残つてくれるかしら？」

哀は、大友を見ながら言つた。

「ああ、今後の相談だつたな。」

大友は頷きながら応える。

「よし！じゃあ、光彦と歩美ちゃんは先に寝てくれな。おやすみ。

」

コナンが挨拶をすると、

「おやすみなさい。」

と一人は言しながらリビングを後にした。

「さて。何から話しましようか？」

歩美と光彦が完全にリビングから遠ざかつたのを気配で確認してから、哀は話しつけた。

「何からって…、とりあえず、なんでお前たち2人は、小1の時点

で物理や薬物、法律とか、詳しかったんだ？明らかにおかしいだろ
う？」

大友は、最初の質問を投げかけた。

「ふう、そうですね。先生は、僕達のことを不審に思いますよね。」

コナンは、ため息をつきながら呟いた。

「それは、私たちの生き立ちに関係してるわ。」

哀とコナンは、あらかじめ決めていたシナリオで話し始めた。

「俺の本当の両親は、アメリカに住んでいたんです。けど、仕事の都合で俺だけ日本の親戚に預けられることになつたんです。でも、当てにしていた親戚は、高校生の息子を残し渡米していた。」

「それが、工藤夫妻か？」

「はい。で、仕方なかつたので、しばらくは工藤新一のもとへ身を寄せていたんですが、如何せん、彼は事件好きだった。あの当時小1だつた俺の面倒など見てる暇はなく、隣に住んでいる発明家に頼んでいたんです。」

「その発明家が、私の養父よ。」

「ああ、確か阿笠さんとか…。」

「ええ。当時、俺は単身来日していたんで、学校も決まつてなかつたんです。そういうのも全て阿笠博士が手配してくれたんですけど、彼は、研究をしていると寝食を忘れることがあり、仕方なかつたので、新一が懇意にしていた幼なじみの毛利家でお世話になつて、色々な事件に遭遇していつたんです。まあ、それまでにも、新一が遭つた事件の話を聞いたり、工藤邸の書斎の本を勝手に読んだりしていたんですが。」

「あら？ アメリカでの話が抜けてなかつた？」

「ああ、忘れてた。俺と哀の両親は、同じ研究施設で働いてたんです。実は、最近になつて分かつたんですが、俺と哀は、赤ん坊の頃に会つてるんですよ。…じゃなくて、俺たちは、親が研究者だったんで、小さい頃から本に囲まれて育つたんです。」

「自然と、本を読んで理解できるようになつたわ。分からぬいこ

とは、聞けば教えてくれたし。そう言つて面では、教育には熱心な親だつたのね。まあ、私がほんの小さい頃に亡くなつたから、あまり覚えてないけどね。」

「あ…、すまない。辛いことを思ひ出させたな。」

淡々と言つ哀とは対照的に、申し訳無さそう顔をしながら大友は謝つた。

「大丈夫よ。今はコナンがいるし、博士もみんなもいるから。」

優しい笑顔で言つた哀に、大友はほつとして、

「そうか…。」

と言つたが、次の哀の言葉で、また憐れみの表情になつた。

「それに、顔もあまり覚えてない両親より、私を可愛がつてくれてた姉を亡くした時の方がよほど辛かつたわ。」

「哀…、ゴメンな。助けられなくてゴメン。」

俯いた哀の頭を胸に抱き寄せながら、コナンは謝つた。

「コナン……、あなたのせいじゃないわ。」

「お~い? 何の話か分からぬが、ちょっとといいかあ?」

コナンと哀が自分の存在をすっかり忘れて一人の世界に入つてしまい、大友は呆れながらも、話し掛けたみた。

「あつ、すみません。」

「忘れてたわ。どこまで話したかしら?」

少し慌てた様子で2人は離れながら言つた。

「えーと、両親が教育熱心だつたここまでだ。」

「ああ、そうだった。それで、俺も哀も、小さい頃に刷り込みみたいに記憶に入れていつたんですよ。だから、俺たちが、他の子たちよりも知識があるのは、そんな理由です。」

「貴方は、医学、薬学の他に、優作さんの蔵書も読みあさつたみたいだし? それは、工藤君と同じように推理オタクにもなるわよね。」

「おい…。オタクって。哀は、両親の様に研究者になるはずだつたんだよな。」

「ええ。だから、薬学の勉強をしていたの。私たちが他の子たちと

違うのは、そう言つ訳なのよ。」

「そうか…、お前たちも苦労してきたんだな。」

「いえ、良かったと思っていることもあるんですよ。英語も喋れるし、授業は聞いてなくても平氣だから。」

「いや、おい、授業は聞いてくれよ。」

大友は呆れながら言った。

「ははは…。あとは、何を聞きたいでですか？」

コナンは乾いた笑いで返し、眞面目な顔に戻った。

「あ…、じゃあ、お前たちの行動力というか、動くための原動力は何なんだ？」

「それは、好奇心と正義感…ですかね。」

「そうね、事件については、知的好奇心を満たし、尚且つ悪を許さない正義感ね。人助けは、人として当たり前のことだけど。」

「人として当たり前…か。確かに。でも、そう分かつてはいても、行動できないのが人間じゃないか？」

「そう言う人が多いのは事実ですが、その場合は、何をしていいのか分からないうち言つるのが主な原因じゃないですか？」

「私たちには、知識もあるし、様々な修羅場も結構潜ってきたから、体が反応するのもしれないわね。まあ、私の場合、人助けは罪滅ぼしみたいなものだけ…。」

「哀…！お前、まだそんなことを思つてるのか？お前は悪くない。お前には何の罪もないんだ。いい加減、自分を責めるのはやめてくれ。」

「あ…、「ごめんなさい。でも、記憶がある限り私は自分を許せそうがないの…。」

「わかった。俺はそんなお前を全て受け入れるさ。お前が自分を許せないなら、俺がお前を許すよ。何度も言つてやる。お前は悪くないってな。」

「コナン、ありがとう。」

再び大友の存在を忘れて一人の世界に入つて、抱き合つていた。

「お前らさあ、そう度々俺を忘れるなよ。次の質問して良いか？」

呆れながら言う大友に、

「いや、つい…。」

「「めんなさいね。ビウル。」

と言つと、

「じゃあ、二人は、何故他の三人を見る時、子供や弟妹を見る様な目をするんだ？」

と大友が訊いてきた。

ハツとして、二人はお互に顔を見合わせた。

「私たち、そんな目をしてました？」

「確かに、あの三人は、昔から無邪氣で子供らしい子供だったから。特殊な事情で親元を離れ、自立へ踏み出すのが早かつた俺たちにしてみれば、弟妹みたいに感じるのも仕方がないのかもしれませんね。」

「そうね。皆、裏表のない真っ直ぐな子達だものね。私達みたいに、歪んでないわよね。」

「歪んでるつて…おいおい、自分でそれはないだろ？」「

大友は哀の言葉にツッコミを入れた。

「普通は歪むものよ。親兄弟を亡くして、常に危険と隣り合わせ。そんな日常、耐えられる？」

「哀、お前には俺たちがいただろ？」

「そうだぞ。養父も、友達も、恋人だつているんだろ？」

「ふふつ、そうね。私はまだマシな方よね。一人とも、ありがとう。」

一生懸命フォローする二人にクスッと笑い、礼を言つ哀。

「後は、一人が時々、俺よりも年上みたいな物言いをすることがあるが…？」

大友は探るように訊く。

「態度がデカいだけです。」

キッパリと言いきるコナン。

「私、養父にもこんな口調だから。」

哀もハツキリと語る。

「そうか、それだけか。じゃあ、最後に、江戸川が言った、『見てるだけでいい』って言うのは？」

「言葉の通りですよ。顧問として、俺たちを見守るだけでいいんです。いずれ、指導者であることが、俺たちの邪魔になるときが来ます。」

「邪魔？」

「ええ。私達は、警察に協力して、時には非情な犯罪者と対峙するときがあるのよ。そんな時、指導者という立場の人間は止めるわよね？」

「ああ、生徒を危険な目に遭わせるわけにはいかないからな。」

「ですよね。でも、それが、俺たちには邪魔なんです。事件を解決するために、多少の危険は免れない。」

「そう。だから、私達は私達で、先生に責めがいかないように手を打つわ。」

「まあ、ほとんどの場合、先生はその場にいないはずだから、事後報告になると思いますが。」

「おい、じゃあ、俺は何をしていればいいんだ？」

「言つたように、全てを見守るだけです。活動内容についての口出しは一切無用です。」

「あと、1つ忠告。あまり、私達と行動を共にしようと思わないことね。」

「何故だ？俺は顧問だぞ？」

「危ないですから。俺たちといると、十中八九事件が起こります。しかも殺人事件。先生、推理小説にあまり興味ないでしょ？そういう人には耐えられませんよ。」

「ああ、確かに、興味はないが…。」

「無いなら尚のこと、あまり関わるべきじゃないわ。私達は今までの経験があるから良いけど、命がいくつあっても足りないわよ。」

「そんなに危険なのか？確かに、昼間聞いただけでも、爆弾あり拳銃ありで相当ヤバいと思ったが…。」

「俺も哀も拳銃で撃たれたことがあるしなあ。幸い致命傷にはならなかつたけど。」

「そうね。銃の痕は消えないしね。だから、悪いことは言わないわ。名前だけの顧問になるか、ちゃんとやる気でも見守るだけにしておきなさい。」「苦労をかけると思いますので、心労で倒れないためには、なるべく関わらないことです。」

真面目な顔で言う一人に、

「わかった。忠告、肝に銘じよ。」「

と、神妙な顔で頷いた。

「あの三人は、私達で正しい方向へ導いていくわ。」

「警察も側にいるんだし、間違つた道は歩ませないと約束しましょう。」

と自信満々で言い切る一人に、大友は、頷くしかなかつた。とりあえずで訊きたいことを訊いたので、三人は、就寝する事にした。

「片づけはやるから、二人は先に寝なさい。」

と大友は言い、二人をリビングから追い出した。

一人になつて、

「とりあえずの、謎は解けたが、些か腑に落ちない気がする…。だが、あの一人とまともに話しても、今みたいにかわされるのが落ちだろうな。俺じゃあ、あの一人を言い負かせないだろうし。あいつらの言うとおり、見てるだけにするか。今更、一度引き受けた顧問を辞めるわけにもいかないだろうし。よし！あまり関わらないようにしよう。俺だつて命は惜しい。…さて、片づけて寝るか。」

と一人、呟いていた大友だった。

まさか、ドアのすぐ横でコナンたちが反応を伺つてゐるとはつゆ知らず。

合宿～一日目～生ご立ち～（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

嘘はつき続ければ、いずれ真実になるのでしょうか。

次回は合宿～一日目になります。

合宿～2日目～事件～（記書き）

初事件です！

期待はしないで読み進めて下さい。

合宿？2日目～事件～

合宿二日目。

この日は、近くのキャンプ場でバーべキューをする事になった。
朝、8時に起床した5人は、早々に朝食を済ませ、材料の買い出し
にいくことにした。

歩美と光彦は飲み物の買い出しに。

哀とコナンは食べ物の買い出しに。

大友は、一足先にキャンプ場に行き、場所の確保とセッティングを
する事になった。

4人は、歩いて15分ほどの所にあるスーパーに行くことにした。
昨日、マテージに行く途中で見つけてあつたのだ。

歩美と光彦が前を歩きながら、

「飲み物何がいいかね？」

「元太君がいないので、量は少なくて平氣ですよね。」

「そうだね！いつも、1人で2㍑のペットボトル飲んでたもんね。」

「4人ですし、2本もあれば大丈夫ですね。」

などの会話をしていた。

少し離れたところで、

「ねえ？昨日の先生の言葉…どう思う？」

「ああ、納得はしてねえみたいだな。かといって、眞実を話すわけ
にもいかないだろ？」

「それは… ただけど。」

「大丈夫だつて。戸籍については、FBIがアメリカ国籍で作つて
くれたんだから。調べられても問題ねえさ。」

「そうね、問題はないわ。でも、この先も、あんな風に私達を不審
に思つ人が出てくるわよね。」

「仕方ないさ。確かに俺達は異質だからな。」

「真っ白な子供たちに混ざった黒ですものね。」

「哀？お前は黒くなんかないだろ？むしろ、あの組織の中で黒に染まらなかつた唯一人だ。」

「そんなこと…私は命じられるままに行動してきたのよ？」

「明美さん…お姉さんのためだろ？だから、心までは染まつてなかつたんだ。哀は真っ白だよ。」

「ありがとう、コナン。さあ、2人が待つてるわね。行きましょう。」

俯きかけていた顔を上げ、哀はコナンの手を取つて歩き出した。コナンは、そんな哀の手をぎゅっと握り返して、後ろ姿に微笑んだ。

買い物を終えた4人は、大友の待つキャンプ場へと向かつた。

4人が買い出しに行つてゐる間、大友は、キャンプ場に行き、事務所で鉄板などのレンタルをすませて、セッティングしていた。

他にやることがなかつたので、4人が来る前に、事務所で見た釣り竿を借りに行くことにし、その帰り道で4人と合流した。

「あー！先生！！それ釣り竿！？」

歩美が大きな声で呼びかけた。

「ん？ああ、事務所で貸してくれたんだ。やるだろ？」

大友は人数分の釣り竿を持つて、言葉を返した。

「はい、やります！でも、釣りは元太君が得意なんですね。」

楽しそうに笑いながら光彦が言った。

「あら、じゃあ、お昼に魚は食べれないかしらね。」

哀は、微かに笑いながら言つた。

「ははは、何とかなんじゃねえか？」

笑いながら言つたコナンに、

「まあ、楽しめればいいんじゃないのか？」

と、大友は大人な発言をした。

バーベキュー場に着くと、そこには2～3組がいた。

1組は家族連れ、1組は大学生らしいグループ、もう1組は会社員らしいグループだった。

コナン達は、一通りの準備をし、釣り竿を持つて上流の方へと向かつていった。

大きめの岩がたくさん現れ始め、先に進むのが困難になってきたので、5人は、その場で釣りを楽しむことにした。

糸を垂らして、魚が掛かるのをのんびりと待っていたところ、

「キヤーーーーー！」

突如、女性の悲鳴が聞こえてきた。

4人は、反射的に釣り竿を陸に上げ、悲鳴がした方に走り出した。それに少し遅れて、大友が付いていった。

現場に着くと、そこには、頭から血を流して倒れている大学生位の男性がいた。

その側に、先ほど悲鳴をあげたらしい女性が、真っ青な顔を手で覆いながら座り込んでいた。

コナンは、

「先生！…それ以上こっちに来ない方がいいですよ。どこか別の所で休んでて下さい。」

「え？あ…ああ、わかった。」

まずは付いて來ていた大友を遠ざけてから、みんなに指示を出した。「歩美ちゃん、その人に付き添つて、落ち着いたら、発見時の状況を聞いて。」

「うん、分かった。お姉さん、大丈夫？ちょっと向こうに行きましょ？」

と言つて、気遣いながら歩かせ始めた。

それを確認し、

「光彦、警察に連絡！」

「はい！状況は？」

「哀、確認できるか？」

「ええ。…脈拍・呼吸共になし、…瞳孔も開いてるわね。亡くなつてるわ。」

「光彦、10代後半～20代前半の男性が一名、頭を強打して亡くなつてている」と。

「分かりました。…もしもし？警察ですか？私、帝丹高校1年の円谷と言いますが、東京都多摩市の東千キャンプ場で、10代後半～20代前半の男性が一名、頭を強打して亡くなっています。」

光彦が電話をしている内に、小声で、

「哀、ここは頼んだ。」

「ええ。調べておくわ。」

と会話してから、周りに向かつて大きな声で、

「皆さん、それ以上こちら側には来ないで下さい。どなたか、被害男性とお知り合いの方はいらっしゃいませんか？」

とコナンは、現場保存と被害者の友人に事情を聞き始めた。

「上山！？え！？死んでるのか？嘘だろ…。」

一人の男性が、その場に膝をついた。

「あの、被害者の方のお知り合いですか？」

「コナンは、その男性の元に近寄つていった。

「あ？ああ、アイツは、上山尚人。俺と同じ帝丹大学の学生だ。」

「年ど、貴方のお名前もお教え願えますか？」

「ああ、大学3年で20歳だった。俺は水原翔。」

「では、水原さん、今日は、何人でここに？」

「サークル仲間と6人で。」

「他の方たちは？」

「さつき、悲鳴を上げた、上山の彼女だつた花井と、あつちで固まつてゐる3人…。」

水原は、遺体を挟んで反対側にいる三人を指さした。

「向かつて左から、岩瀬、谷本、木塚。」

「ありがとうございます。では、上山さんと何かトラブルがあつた方をご存じですか？」

「トラブル…、そうだな。花井は上山と別れたがつてたし、谷本は上山に振られたらしいし、岩瀬とは花井を取り合つてたな。木塚と俺は、上山に金を貸してる。」

コナンは、そこまでを聞いて、少し考え込むように、額に手を当てながら立っていた。

そして、後ろを振り向き、

「哀、死亡推定時刻はわかるか？」

「そうね、発見時、まだ温かかったことを考へると、死後一時間経つてないんじゃないかしら？」

「そうか。ありがとうございます。」

「では、水原さん、1時間前から遺体が発見されるまでの間、何をしてましたか？」

「何つて…、あの森に行つてたけど。」

「それを証明できる人は？」

「いや、1人だつたから、いないかな。」

「そうですか。ありがとうございます。」

水原から事情を聞き終わったコナンは、哀の元へ戻つた。

「何かわかつた？」

「いや、被害者と一緒にいたのは、計5人。全員に動機有りつてとこだな。」

「そう…、あ、凶器はたぶんアレよ。」

哀は遺体の側に落ちていた20センチほどの、血の付いた石を指した。

「そうだな。まだ警察は到着しないのか？」

とコナンが言つた矢先、パトカーのサイレンが聞こえてきて、

「おお！ コナン君達じゃないか！ 通報したのは君達か。」

と田暮警部がやってきた。

「あ…、田暮警部。はい。被害者は、上山尚人さん、帝丹大学の3年。今日は、あちらにいる大学のサークル仲間とキャンプに来ていたそうです。第一発見者は、被害者の恋人・花井さんで、歩美ちゃんが付き添つて向こうで落ち着かせてます。」

コナンが指を指しながら説明すると、

「ふむ。いつも通り完璧な現場保存に、初動捜査だな。被害者に近寄った人は？」

田暮警部が目を瞑つて頷きながら訊く。

「俺と哀、後は第一発見者の花井さんですね。」

「発見したのは、午前10時32分、その後、脈拍・呼吸・瞳孔で死亡を確認したわ。その時点で、体温が残っていたから、死後1時間以内と思われるわ。」

「おお、哀君、ありがとう。で、何か分かつたことはあるかい？」

「まだ全員には話を聞いてないんですが、5人共に動機はあるようです。あとは、光彦と歩美ちゃんが事情を聞いてるんでその報告待ちです。」

「後頭部を右側からあの石で殴られたようね。一発で致命傷になつてているし、斜め上から振り下ろされたことを考えると、被害者が立つていたなら、身長165センチ位だから、犯人は、170センチ以上じゃないかしら。座ついたら、誰にでも可能だわ。」

「立つていた場合の該当者は、水原さんと木塚さんだな。水原さんによると、共に被害者にお金を貸していたそうです。座つてないとすると全員か…。」

と、そこで、他の3人に事情を聞いていた光彦が戻ってきた。

「あの3人の内、谷本さんと木塚さんには、事件当時、明確なアリバイはなしですね。岩瀬さんは、花井さんと一緒に居たと言つてします。あ、田暮警部、おはようございます。ご苦労様です。」

光彦はコナンに報告し、田暮に挨拶をした。

「ああ、光彦君、おはよう。」

「そうか、あとは、花井さんだが…。」

そこに歩美が走って戻ってきた。

「口ナン君！花井さん落ち着いたよ。だから、高木刑事に任せた。あつ！警部さん、おはよーい」
「歩美君、おはよーい。」

「花井さんから、何か聞けたか？」

「うん。えーと、花井さんは、岩瀬さんと一緒にテントの側にいたらしいんだけど、被害者の上山さんにメールで呼び出されたんだって。10時半に待ってるって。で、時間になつたから、ここに来たら、上山さんが血を流して倒れてて、ビックリして悲鳴を上げたらしいよ。そのまま腰を抜かして座り込んだみたい。だから、被害者には触つてないってわ。」

「そうか、メールも確認した？」

「うん。9時46分に受信してた。内容は、『話があるんだ。何なら、岩瀬が一緒でも構わない。昨日の場所で待つてる。でも、まだ整理が出来ないから、10時半頃に来ててくれ。』って書いてあつたよ。」

「つてことは、花井さん、岩瀬さんはアリバイ有りだな。」

「光彦、谷本さんと木塚さんは、どこに居たつて？」

「あつ、はい、えー、谷本さんは川の下流で写真を取るポイントを探していたそうです。趣味が写真らしく、一眼レフのカメラを持っています。写真も数枚撮っていたみたいですね。日付と時間も確認しましたので、偽装でない限り間違いないかと。」

「写真…か。木塚さんは？」

「はい、木塚さんは、水原さんに話があつたらしく、後を追つて森に行つたそうですが、見つけられなかつたそうです。」

「そうか…。田暮警部、事情聴取なら、水原さんを先にお願いできますか？ちょっと、他の人たちに確認したいことがあるんで。」

それまで、黙つて探偵団の話を聞いていた田暮は、

「うむ、分かつた。」

と頷いた。

「探偵団」と、探偵部の4人は、岩瀬、谷本、木塚の元へと向かった。

「あの、ちょっとお話良いですか？」

とコナンが聞くと、

「え？ あ、ああ。何だ？」

と木塚が応えた。

「木塚さんは、被害者の上山さんにお金を貸していたと聞いたんですけど……。」

「は？ いつの話だよ。もう、返してもらつたよ。アレは、花井の誕生日パーティーを奮発しすぎて、ピンチだったから貸したんだ。5万ほどな。でも、翌月のバイト代で返してくれたよ。」

「そうだったんですねか。では、水原さんが上山さんにお金を貸していたことは？」

「いや、なかつたと思うけど。なあ？」

「そうね、そんな話はしてなかつたわよ。」

「俺も聞いたことないな。」

3人は、首を傾げながら答えた。

「では、水原さんと上山さんは、仲が良かつたんですか？」

「ああ、俺たちの中でも、一番仲良かつたよな？」

「そうね。よく一緒にいたわ。」

「ん？ 一時期微妙な時がなかつたか？」

「あ～、あれは、谷本が上山に振られたときだな。」

「ちょっと！ 思い出させないでよ！」

「あ、わりい。確かに、あの時は、水原が一方的にツッカカつてたんじゃなかつたか？」

と岩瀬がいうと、事情を知っているらしい木塚が話しだした。

「あれは、上山が谷本を振ったから…。水原、谷本が好きなんだよ。だから、谷本が悲しむ姿を見たくなかつたんだって。でも、その後、

自分にもチャンスがあるんじゃないかと思い直して、仲直り。」

「ああ、そう言うことか。それで、今回、花井と上山が別れるつて知つて、沈んでたわけだ。」

「そうだったんだ…、私、美奈が別れるつて聞いて、喜んじゃつたのよね。チャンス到来！みたいに…。」

「それで、沈んでた水原さんを慰めに探しに行つたんですか？」

「3人の話が纏まつたところで、コナンは口を挟んだ。」

「ああ、でも、見つけられなくて、その内、花井の悲鳴が聞こえて、急いでここに来たんだ。」

「そうでしたか。すみません、ありがとうございました。」

4人は、大友の下に向かつた。

「先生、はい、水。」

歩美はペットボトルの水を渡しながら話しかけた。

「大丈夫ですか？」

光彦は心配そうな目で、責ざめている大友を見る。

「事件現場は初めてだつたのね？」

憐れんだ目で哀が言うと、コナンはすまなそうに言った。

「ちょっと止めるのが遅かつたみたいですね。すみません。」

青ざめながらも、何とか笑顔で水を受け取りつつ、

「すまない。こんなことは初めてで。お前たちはスゴいな。周りに指示を出したり、警察に連絡したり、話を聞いて回つたり…。もういいのか？」

「あ、いえ。これは慣れですよ。」

と苦笑しながら光彦が言った。

「もう、犯人も動機も分かつたんで。物証も出るはず。だから、とりあえず、先生の様子を見に来ただけです。」

「えー！？コナン君、また一人で分かつた顔して…！」

「そうですよ。何なんですか？物証つて。」

「それは…、そのうち分かるさ。」

責める歩美と光彦を不敵な笑みでかわし、

「じゃあ、先生、ちょっと解決してくるんで、ここで休んでいて下さい。」

と大友に一声かけて、4人は警部の下へと歩いていった。

「田暮警部、関係者を集めていただけますか？」

「おお、コナン君！分かったのかね？」「はい、分かりましたよ。

あ、高木刑事、佐藤刑事、こんにちは。」

「やあ、こんにちは。皆。」

「こんにちは。早いわね～。私まだ何もしないわ…。」

「高木刑事、佐藤刑事、こんにちは。」

「こんにちは。」

「どうも。まあ、私達の方が動くのが早かつたから。それに、単純な事件だし…ね？」コナン。

「ああ、まあな。」

「じゃあ、探偵部による初推理ショーグの始まりね」

歩美が楽しそうに言ったところで、警部に呼ばれ、関係者の5人が集まつた。

「では、今回の事件の動機から説明しましょう。」

コナンは一步前に出て話しかけた。

「事の始まりは、被害者の上山さんが谷本さんを振り、花井さんと付き合いだしたことです。それまでは、良かつたが、花井さんが、上山さんと別れたがっていた。上山さんは、昨夜、別れる決意をし、今日の10時半に花井さんを呼び出し、別れ話の返事をしようとしていました。しかし、それでは、都合の悪い人が居た。その人は、

谷本さんに好意を寄せていたからです。上山さんがフリーになると言つことは、谷本さんにもチャンスがあると言つこと。それでは困る。しかし、上山さんの意志は変わらなかつた。仕方がないので、1人外に出た上山さんの後を追い、森に行くと言つてテントを出て、上山さんを尾行、周りに人がいないのを確認し、上山さんがメールをし終わったのを見届けてから犯行を行つた。」

コナンは事件概要の説明をした。

「犯行は、計画的なものではなく、衝動的なものだつたわ。だから、その辺に落ちていた大きめな石を使つた。倒れ方を見る限り、被害者は立つていた筈だわ。そこに斜め後ろから、後頭部目掛けて石を振り下ろした。それが出来るのは、身長的にみて水原さん、木塚さん、あなた達だけ。」

哀は犯行時の説明をした。

「しかし、その時間は、2人とも、森にいたと証言しています。木塚さんは、水原さんを追つて森に入つたと証言しました。しかし、そう広くもない森です。見つかならなかつたはずはありません。が、木塚さんは、水原さんを見つけることが出来ませんでした。さて、どちらが嘘をついているのでしょうか？」

光彦はその時間の二人のアリバイについて話をした。

「そして、被害者発見時、森にいたと言いながらも、森とは反対側に立つていた人がいました。そう、第一発見者の花井さんのすぐ側に。同じように森から悲鳴を聞いて急ぎ駆けつけた人は、少し遅れて森側にいた2人と合流しています。」

歩美が発見時の状況説明をした。

「ここまで言えばおわかりでしょう？犯人は……、あなたです！」

コナンはある人を指さした。

「水原翔さん。」

「おっ、俺！？なつ、な何をいきなり！？…証拠！証拠はあるのか！？」

水原は焦つて、どもりながら否定した。

「残念ながら、眞実です。貴方、犯行時、素手で石を持つたでしょう？」

「その時、凶器の石にはあなたの指紋が付いたわ。それに気づいたあなたは、その袖で拭いたんじやないかしら？」

「コナンの言を継いで哀は水原の右手を指して言つ。

「その時、凶器についた被害者の血を少し擦つてしまつた。気づいてましたか？凶器の石の血が付いた部分の一部が擦れていることに……。」

コナンが話している間に、光彦が水原に近寄り、右手をつかんで袖を捲つた。

すると、そこには、赤黒く乾燥した血液が付着していた。

「その血が誰の血で、いつ付いたのか、説明できますか？」

「血液に関しては、DNA鑑定で個人を識別できるわよ。」

「被害者の水原さんが、頭部の致命傷以外に怪我をしていた形跡はないよ。」

「何があつたのか、話していただけますね？」

光彦は、水原の右手を持ったまま訊いた。

水原は、その場に座り込み、うなだれて咳きだした。

「あいつが……上山がいけないんだ。花井と別れるなんて言つから……。もう少しで、谷本さんがアイツを忘れられるところだつたのに……！だから……だから、アイツが邪魔だつたんだ！！！」

最後の方は、興奮したのか、光彦の手を振り払い両手の拳で地面を何度も何度も叩いていた。

高木刑事が近寄り、

「水原翔さん、上山尚人さん殺害容疑で逮捕します。」

と言つて、水原に手錠をかけて連行していく。

合宿？2日目～事件～（後書き）

次話は事件解決後の先生と探偵団です。

合宿～2日目～理解と決意～（前書き）

事件解決直後です。

合宿？～2日目～ 理解と決意

高木刑事に連行されていく水原を見送りながら、コナン達は日暮警部に礼を言っていた。

「いや～、流石は探偵団！早期解決、見事だな。」

「いえ、そんな難しいものではなかつたので…。」

と光彦は至極平然と答える。

「事情聴取が必要でしたら、いつでも言って下さーいね。」

歩美も笑顔で言つた。

「じゃあ、私達は、これで。先生の様子も気になりますし。」

と哀が言つと、

「ん？先生？一緒なのかい？」

と日暮警部が訊いてきた。

「はい、今日は、探偵部の合宿で来ているので。元太は柔道部の合宿で来れませんでしたが。」

とコナンが説明した。

「そうか。確か、大友先生と言つたね。顔色が良くないようだが、どうかされたのかい？」

うつかり失言をしたのに気付かない日暮警部。

「ああ、あれは、事件現場に遭遇したのが初めてだつたらしくて。」

「と・こ・ろ・で！日暮警部？先生に会いに学校に行きましたね？」歩美は、コナンが説明し終わると、ずいと前に出て、少し低い声を出した。

「え？いや？コナン君に挨拶はしなくて良いと言つてたから、会いになんて行つてないよ？」

日暮警部は、慌てて否定したが、

「警部ともあうつものが、嘘はいけませんね。」

と光彦に言われた。

「警部さん、私達、あなたの前では、一度も『大友先生』とは呼ん

でないわよ。いつ名前が分かつたのかしら?」

哀はトドメと言わんばかりに言い募る。

「答えは簡単、田暮警部、あなたは、俺との電話の数日後、学校にきて大友先生と話したからです。先生のその後の挙動不審な様子も併せて、間違いありません。」

コナンは言い切った。

田暮警部は、ため息を付き、

「はあ、君達には嘘もごまかしも通用しない…か。ああ、行つたよ。

一応、君達に依頼する手前、責任者に挨拶はすべきかと思ってな。」

「まあ、そうですよね。でも、これまでの事件のこととかを調べられて騒がれると、こちらの活動にも支障が出るかと思つて止めたんですよ。」

「結果的には、こうして活動をしてるからいいんだけどね。」

「ナン」と哀が言つと、

「そうだったのか…。すまないことをしたね。」

と田暮警部は謝つた。

「いえ、何とかしたので大丈夫です。」

「じゃあ、話はそれだけだから。失礼します。」

と哀が挨拶をすると、他の3人も目礼し、大友の下へと走つていった。

「先生、お待たせ!大丈夫?」

一番に駆け寄つた歩美が、大友に声を掛ける。

「ああ。もう、大丈夫だ。すまなかつたな。」

と大友が片手を上げながら言つと、哀はその手を取り、脈を測り始めた。

1分後、哀は見ていた腕時計から目をはずし、大友の手を離して、

「大丈夫なようね。」

と、安心したように呟いた。

「ありがとう。それで？事件は解決したのか？」

哀にお礼を言い、事件について訊いた。

「はい、まあ、簡単に話しますと、被害者男性に好意を寄せていた女性に好意を寄せていた犯人が、被害者男性が邪魔になり、殺害したと言う感じですかね。」

光彦がザックリと説明した。

「光彦君…、それは、本当に要点だけだね。」

歩美が呆れたように言うと、

「えっ！？ダメでしたか？えーと、じゃあ…。」

「被害者は交際相手から別れを告げられ、それに承諾の返事を返そうとしていた。だが、犯人は、被害者が恋人と別れるに困る。何故なら、自分の好きな人が、被害者に以前振られていたが、今なお、被害者への好意を捨てきれないから。万が一、その女性が、被害者に再度告白し付き合うことになつたら…、そう考えた犯人は、被害者を殺害した。突発的な犯行だったため、凶器は落ちていた石。しかし、自分の指紋を消すために拭った袖口で、凶器に付いていた血を少し擦つてしまい、それが証拠になり、逮捕に至つた次第です。」

光彦に代わり、コナンが事件の動機から犯行、逮捕の決め手まで説明した。

「そうだつたのか…。何だか、自分勝手な犯人だな。告白しなかつた自分が悪いんじゃないのか？」

大友は、事件の概要を聞いて、思つたことを口に出した。

「なんだよね。振られた彼女を慰めながら、アピールして、告白すれば良かつたのに。」

歩美は納得いかないような声を出した。

「でも、その女性が、まだ被害者への気持ちを無くせていなかつたのなら、告白する勇気は出せないかもしません。」

光彦は、被害者のフォローをした。

「そうかもしれないわね。けど、人間、どんなに一人の人を想つても、気持ちがブレるときだってあるわ。」

「そうだな。ある日気付くんだ。『好き』と『愛してる』の違いにな。ずっと一人を想い続けるなんて、そういうできるものじゃないさ。」

哀もコナンも、まるで自分の辛い過去でも語るように、重苦しく呟いた。

「？…何だか、空気が重いぞ？」

不思議に思った大友が明るめの声で言った。

「あ…、ああ、そうだ、光彦、元太に報告してやれよ。今頃は昼飯だろ？」

「はい！ そうですね。ちょっと電話してみます。」

「哀、歩美ちゃんとバーベキューの準備してくれ。」

「ええ。吉田さん、行きましょう。」

「うん！」

「先生は、歩けますか？」

「あ？ ああ。大丈夫だ。」

「では、先生は俺と、置いてきた釣り竿の回収に行きましょう。」

「あっ！ そうだったな。行こう。」

と、コナンは次々に指示を出し、話題を一気に変えた。

コナンと大友が釣り竿を回収し、事務所に返しに行き、皆の下に戻ると、光彦も、ちょうど元太との電話を終えたところだった。

「あっ！ コナン君、お帰りなさい。元太君に、羨ましがられちゃいました。」

光彦は苦笑しながらコナンに話しかけた。

「ただいま。羨ましい？」

コナンは、首を傾げながら聞き返した。

「はい、探偵部を発足して初めての事件じゃないですか。何で俺が

いない時に！―つて騒いでましたよ。」

「ああ、はは、そういうことな。他には何か言つてたか？」

コナンは光彦の話に苦笑いして、他に無いか訊いた。

「あ、先生の様子を心配してましたよ。初めての現場だから、大丈夫だつたか？」と。元太君らしいですよね。」

「そうだな。ちゃんと気遣いも忘れてねえ。元太らしいな。」

光彦とコナンは、親友の豪快な笑顔を思い出し、自然と顔が緩んでいた。

「2人共！お肉焼けるよ。」

歩美の大きな声で、ふと我に返つた二人は、笑いながら、

「ああ、今行く！」

「はい！今行きます！！」

と答えながら走つていった。

4人は、バーベキューをしながら、大友の質問に答えていた。

「なあ、悲鳴が聞こえたとき、真っ先に釣り竿を陸に上げて走つていつたよな？咄嗟の時つて、釣り竿、投げ出しちゃわないか。」

「何を言つてるんですか。借り物ですよ？無くしたら弁償じゃないですか。」

「いや、そなんだがな…。」

「先生、探偵たるもの、いつでも冷静に行動すべし…だよ…」

「だからなのか？？？」

「まあ、どちらかというと、慣れよね。」

「ははは…、身も蓋もねえな。」

「じゃあ、現場に着いた後の、江戸川の冷静な状況判断と的確な指示も慣れなのかな？」

「そうですね。慣れです。」

「うーん、その後の各自の行動も？吉田は第一発見者らしい女性に

付き添つて話し聞いていただろう?」

「うん。女性だったから、光彦君より私の方が適任でしょ?落ち着かせて、発見時の状況と、被害者との関係、それから、それまでの行動とその証明になるものを見せてもらつただけだよ。で、刑事さんが来たから、簡単な事情を話して、みんなの所に報告しに戻つたの。」

「へえー。あの指示だけでそこまでやつたのか…。」

「当たり前でしょ?コナン君が言つてたもん。落ち着かせて、話を聞いてつて。今日は関係者が少なかつたから、他の人は光彦君に任せられたし。」

「ふーん、その円谷は、警察に電話した後は、関係者に事情を訊いてたのか。」

「はい、僕は、コナン君に警察への通報を頼まれましたので、後は、関係者に話を聞いてただけです。事件当時の行動と証明になるものを簡単にですけど。必要な情報はとりあえず聞き出しましたよ。それから、報告しに戻つたんです。」

「そうか…、で灰原は、遺体の近くにずっといたよな?」

「私は、荒らさないように、死体の状態を確認し、凶器の発見、被害者と周りの状況分析をしていたわ。」

「ほー、それで、凶器の異変や、死亡推定時刻が分かつたのか。江戸川は、指示を出した後は?」

「俺は、現場の保存と近くにいた関係者に、被害者の事や、人間関係、その人のアリバイを聞いて、みんなからの報告を待ちつつ、警部の相手をしてました。」「それぞれ役目があるんだな。」

大友は、納得したように頷きながら言った。

「その後は、皆からの報告を聞いて、矛盾点や疑問を解消しに、再び聞き込みをして、犯人を特定つてどこですかね。」

「犯人特定の決め手は?」

「ああ、それは、1人だけ嘘の証言をしていたので。分かり易かつたんですけど、証拠は偶然でしょうね。あれは、犯人が、ハンカチ

やタオルを持つていなかつたから、起こつたことですし。」

「そうか…、お前たち、凄いな。俺なんて、血を流して倒れてる人を見ただけで、動搖して気分を悪くしてたのに…。俺に探偵部の顧問なんて務まるかな…？」

俯き加減でボソボソとしゃべる大友に、

「昨日、言つたじやない。先生は、何もしなくて良いって。」

哀は優しい目で言つた。

哀の言葉で顔を上げた大友に、

「先生は、俺たちの活動を容認してくれればいいんだ。」

コナンはしつかりと目を見つめながら言つ。

「そうだよ！先生は、何も言わずに見守つてて。」

歩美も満面の笑顔で言つた。

「僕たちは、大丈夫ですから。だいたい、警察が一緒なんです。心配するようなことは、そんなに起こりませんよ。」

光彦は、諭すように言つた。

「どうか？じゃあ、俺、顧問続けるよ。でも、活動報告を読むだけだからな。くれぐれも現場になんか連れて行くなよ！」

大友は4人に對して言い含めるように、声を少し大きくした。

「あははは。大丈夫だよ。先生が一緒なのは、合宿とか、校内だけだから。そんなに事件起きないよ！」

歩美は笑いながら言つた。

「そうですよ。少なくとも、校内では起きないはずです！」

光彦は自信を持って言つ。

「そうね。合宿では起きると思つけど。」

哀は苦笑気味で言つ。

「何はともあれ、問題はありませんから。安心して下さい。」

コナンは大友にキッパリと言つた。

「そうか、そうだよな。そんなに事件になんて遭わないよな…！」

大友は笑いながら言つたが、

「まあ、遭わないことはないんだけどね。コナンがいるし。何かし

ら起きるけど。」

と哀の放った言葉で笑顔のまま硬直し、頬をひきつらせていた。

「あ～い～？ 何てこと言つんだ！ 折角纏まりかけてたのに…」

コナンはジト目で哀を見た。

「あら、『ごめんなさい？ 先生、大丈夫よ。 私達がちゃんと解決させるから。』

ワザとだと言わんばかりの哀の笑みに、

「は～…、ま、先生、俺達なら、大丈夫です。 先生は、気にしないのが一番ですよ。」

とコナンは、溜め息をついてから言った。

「そ… そうだよな。俺は心の平穏を守るぞ！ お願いだから、心配はかけるなよ。」

と、ひきつりながらも、自分の決意をしつかりと持った大友だった。

合宿～2日目～理解と決意～（後書き）

これで合宿一回は終了です。
次は三田田で帰る日になります。

金剛～三日月～早朝のひと壁～（前書き）

事件を振り返るバランスと哀です。

合宿～3日目～早朝のひと時～

合宿最終日。

この日、哀はいつもより早く起きていた。
何故なら、美容と健康に気を使う女の子・歩美により、いつもより
数段健康的な生活をさせられていたからである。

“12時前には就寝”

これが、歩美のいつもの生活。

しかし、哀は、本を読んだり、調べ物をしたりで何だかんだ、1時・
2時になっていた。

そんな生活を続けていた哀の身体は、いつものサイクルで5～6時
間経つと起きてしまう。

12時に寝ると、起床は5時くらい。勿論、歩美はまだ夢の中。
仕方なしに、リビングでコーヒーでも飲もうかと起きたした。

しかし、リビングに行くと、鼻孔を擦るのは、コーヒーの芳しい匂
い。

そう、すでに起きている人物が居たのだ。

「よお、早いな。哀。」

コナンは、片手に「コーヒー」カップを持ち、キッチンに立っていた。

「おはよう。あなたも早いのね。私にもコーヒーくれる?」

哀は、挨拶をし、「コーヒー」をねだつた。

「ああ、丁度、2人分淹れといったんだ。哀も起きてくる気がしてな。

「コナンは微笑みながら、手早く「コーヒー」を淹れ、哀に手渡した。

「ありがとう。あら~どうして?」

「コーヒーを受け取りながら、聞き返す。

「ん?ああ、俺が、哀と2人きりで散歩したいと思ったから。それ

に、歩美ちゃんに付き合つて寝たなら、いつもの睡眠時間から考へると、このくらいの時間に目を覚ますはずだからな。」

コナンは、ウインクしながら、答えた。

「ふふつ。そう。流石ね、探偵さん。じゃあ、コーヒー飲み終えたら、少し歩きましょうか？」

哀は、少し頬を染め、微笑んで言つた。

「ああ。たまに清々しい空氣でも吸つて、英気を養わないとな。」

コナンはそう言つと、コーヒーを啜つた。

哀も、頷いて、コーヒーを飲み始めた。

コーヒーを飲み終わった2人は、他の3人を起こさないようになつて、他の3人を起こさないように支度し、静かに外へ出た。

少し歩いて、木が沢山ある道へと入つていった。

この道は、もう少し行くと、小さな泉がある。

2人は、その泉へと足を向けた。

泉に着くと、2人は、腰を下ろし、黙つて風に揺れる梢の音を聞いていた。

しばらくそうしていたが、不意に哀が話しかけた。

「ねえ、昨日の犯人、皆は自業自得だつて言つてたけど…、私、言えなかつた気持ちも解るのよね。」

「え？」

何故?と首を傾げるコナンに、

「他人の気持ちなんて分からぬものよ?私だって、出会つて直ぐに貴方に惹かれたわ。でも、貴方の心にはずっと蘭さんがいた。それに、2人を引き裂いたのは、私が作った薬のせいよ。どうして気持ちを伝えることができる?無理だと諦めようとしていたの。なのに、貴方は私を好きだと、愛してると言つてくれたわ。蘭さんも、私に正直になれと…。人の気持ちは変わるわ。不变ではない。そん

な事、経験してもなかなか信じられないのも事実よ。だから、一途に被害者を想い続けている女性に、犯人が何も言えなかつたのも無理はないと思うの。」

哀は俯きながら、ほつりほつりと語つていった。

「そんな哀の肩を抱き寄せ、コナンは言った。

「そう……だな。中には一途に想い続けている人もいるだろう。俺みたいに、自分の気持ちが分かつてない奴もいると思う。俺の場合は、哀がいたからこそ気付けただけどな。想いを伝えられなかつたのは、犯人に勇気がなかつたせいだろう。でも、被害者を殺すことが出来たのなら、女性に告白する事もできたろうに……」

憂いを帯びた目で言うコナンに、

「ごめんなさい。こんな話……。もう起きてしまつたことなのにな。哀はコナンに申し訳なさそうな顔で言つた。

「いや、いいんだ。俺も思つていたから。犯人は、ただ一途だつた、そして臆病だつた。自分が間違つてることにも気付かないほど思い詰めていたんだな。」

「もう少し……、もう少し早く木塚さんが声を掛けていれば、思いとどまつたのかしれないわね。」

「ああ、悲しい誤差だな。」

「ええ。でも、きっと、気付くわよね？自分の選択が最悪なものだつたつてことに。」

「そうだな。たぶん、気付かせてくれると想つ。木塚さんが、彼ら、罪を犯した友人を見捨てたりしないだろう。」

「同じ時は一度と来ないから。その時々で最良の選択をしないとね。」

「

「俺達は、最良の選択をしたものな。時は戻つたけど……。」

「時は戻つたけど、決して同じ時は過ごさなかつたわ。私は今の方が幸せよ。多少の恐怖は味わつたけど。だって、自分の歩む道を自分で決められるんだもの。」

「哀……、俺も、時の流れに逆らつてよかつたと思う。でないと、氣

付かないこともあった。あのまま生きていたら、多分、俺は蘭と結婚してただろうな。間違いとも気が付かずに。哀と出会って、いろんな感情を知った気がする。」

「え？」

コナンの言葉に首を傾げる哀に、慈しむような笑顔で、

「お前に出会って、目の前が真っ暗になるような怒りを知った。子供の恋愛とは違う、慈しむ愛を知った。失うことの恐ろしさを知った。子供相手に嫉妬までしたしな。哀、お前に出会って、お前を愛したからこそ、今の俺がいる。工藤新一とは違う、江戸川コナンという人間が、哀のおかげで出来上がったんだ。お前が俺の前に現れてくれて良かった。」

哀は、コナンの言葉に涙を流し、

「コナン…。私も、貴方に出会えて、感情を取り戻せたわ。宮野志保の時には流せなかつた涙が、今はこんなにも溢れてくる…。貴方を愛して、自分の醜い心を知つた。私の中に、誰かを愛せる心があることも知つたわ。貴方を失いそうになつた時、恐怖で目の前が真っ暗になつたわ。貴方が笑つていいだけで、心が暖かくなるの。こんなにまで貴方を愛せる私がいる。全部、コナン… 貴方のおかげよ？」

止めどなく流れる涙をそのままに、哀は語る。

コナンは、語り終えた哀を抱きしめ、指で涙を掬うと、微笑んだ。どちらからともなく瞳を閉じ、口付けを交わした。

しばらく2人は何も言わずに抱きしめ合つていた。

2人の周りは、心地よくそよぐ風、風に揺れる梢、湧き出る水の音。どこまでも透明な、澄んだ空氣に包まれていた。

金宿～三日町～早朝のひと時～（後書き）

ちょっと恋人らしい雰囲気も出してみました。
いかがでしたでしょうか？
ご感想、お待ちしています。

テスト前の一波乱（前書き）

探偵部のもとに事件が舞い込みます。

テスト前の一波乱

ゴールデンウィークの合宿以来、目立った事件もなく、普通の高校生のような生活を送っていた探偵部の5人。

(まあ、下校途中に引ったくりを捕まえたり、たまたま寄ったコンビニで強盗を捕まえたりはしていたが……。)

中間考査を一週間後に控えたある日のこと。

放課後、久しぶりに5人が揃っていた。

何故なら、テストの一週間前から、部活動は全て活動停止になるからである。

そして、教室に残つて勉強会をしていた。

光彦と歩美は、それぞれ自分のテスト勉強を。

コナンと哀は、元太に勉強を教えていた。

「だからな、元太、ここは、さつきやつた公式を当てはめればいいんだよ。コレな。」

と言いながら、元太の教科書を指さし、教えているコナン。

哀は、その隣で、テストにでそうな問題を予測し、練習問題を作っていた。

「え？ あつ！ これかあ。分かつたぞ。」

と、元太は教科書を見ながら公式をノートに書き込んで計算を始めた。

そんな様子を、やれやれといった風に見守るコナン。

光彦は自分の席で、英語の書き取りをやつている。

歩美も自分の席で、化学の復習をしていた。

コナンは、元太が問題を解き終わったのを確認すると、

「じゃあ、次はこの公式な。これは、」

ブーブー…ブーブー…

コナンの携帯が鳴り出した。

「あつ！ わりい、ちょっと待つてる……」

と元太に言い、電話に出た。

「はい、お待たせしました。江戸川です。」

『おつ！ コナン君かい？ 目暮だが。』

「目暮警部、こんにちは。どうなさいました？」

“目暮警部”と言つたのを聞いた他の4人は、コナンの方を振り向いた。

『ああ、こんにちは。今、大丈夫かい？ ちょっと事件が暗礁に乗り上げててね……。応援に来てもらえないかと思つてな。』

「事件ですか。ちょっと待つて下さい。」

と言つと、通話口を手で押さえながら皆を振り返り、

「事件だ。どうする？」

と訊いた。

「私はどちらでも平気よ。」

「私も大丈夫だよ！」

「僕も大丈夫です。」

「行こうぜ！ 勉強は、明日からやればいいだろ？」

と、哀、歩美、光彦、元太の順で応えた。

コナンは一つ頷くと、

「もしもし、お待たせしてすみません。大丈夫です。行きます。現場はどこですか？」

と携帯で話し始めた。

『おお！ そうか。良かった。少し遠いから、高木君と佐藤君を迎えて行かせるよ。10分位で着くと思うから、正門で待つてくれ。事件の詳細は、道すがら聞いてくれ。』

「わかりました。では、待つてますので。失礼します。」

と言つて電話を切つた。

「警部さん、何だつて？」

哀がコナンに近寄り訊く。

「ああ、10分位で迎えが来るつて。正門で待つてるように言われ

た。

コナンが答えると、

「じゃあ、片付けましょ。」

と光彦が言い、出していた教科書やノートを仕舞い始めた。

「うん。あつ、事件の詳細は？」

歩美は片付けをしながら訊いた。

「ああ、道すがら、高木刑事と佐藤刑事に聞くよつて言われたよ。」

とコナンが答えると、

「やつと、大きな事件だな。」

と、不謹慎ながらも嬉しそうな元太がいた。

皆が支度を終えると、揃つて教室を後にした。

そして、正門前で車を待っていると、先に佐藤刑事の車が到着した。

「皆、こんにちは。待たせてごめんなさいね。」

と佐藤刑事が挨拶をしてきた。

「――――こんにちは。」

5人は揃つて挨拶を返し、

「あれ？ 高木刑事は？」

と歩美が訊いた。

「え？ まだ追いついてない？」

と佐藤は後ろを振り向いた。

「また、黄色信号でぶつちぎったんじゃねえか？」

と元太が呆れたように言つと、

「あら？ そうだったかしら。遅いわねえ、高木君つたら！」

と半ば誤魔化すように怒つていると、高木刑事の車が到着した。

「みんな、こんにちは。待たせてごめんね？ 酷いですよ、佐藤さん！ 何で黄色でスピード上げるんですか！？」

高木は、探偵部の5人に申し訳なさそうに謝罪をし、佐藤へと向き直ると、拗ねたように言った。

「はあ～、やつぱりね。ま、いいけど、早く現場に行きましょう？」

高木と佐藤の様子に溜息をつきながら、哀は促した。

「あっ！ そうね。行きましょう。コナン君と哀ちゃんは私のに乗つて。高木君は、歩美ちゃん、光彦君、元太君をお願い。まだ何も話してないから、事件の概要を話しながら来て。」

はじめたように佐藤がキビキビと指示を出す。

「はい！」

高木は、返事をし、後部座席へ歩美と光彦を、助手席へ元太を促した。

佐藤は「ナン」と哀を後部座席へと促し、出発した。

それぞれの車で、高木・佐藤は事件の説明を始めた。

「事件は、ある芸能プロダクションで起きたのよ。その社長が何者かに刺殺されたの。発見者は、来日していたアメリカのある女優なんだけどね、発見時の状況は、ドアも窓も鍵は開いていて、そのドアから入り、社長室に行つたところ、被害者がソファの上で仰向けの状態で、胸にナイフが刺さったまま亡くなつていたと証言しているわ。死亡推定時刻は、昨夜の9時半～翌1時半。その間、ビルに出入りしたのは、正面玄関から2名、裏口からも2名で、外に非常階段はなし。容疑者としては、その4名ね。」

「容疑者については？」

と説明を聞き終わった、コナンと歩美がそれぞれ訊いた。

「ええ、まず、昨夜9時45分に正面玄関から入つたのが、上林鈴【かんばやしすず】さんと言つて、芸能プロダクションの下の階のオフィスに勤めている〇」。被害者とは、たまにエレベーター一緒になると、食事に誘われる位の関係ね。」

「特に男女の関係ではなかつたと？」

「本人はそう言つてるわ。でも、数回、食事には行つてるみたいね。」

「

「ふむ。次は？」

「昨夜10時20分頃、裏口から入ったのが、右田一雄【みぎたかずお】さんと書いて、被害者の大学時代の友人だそうよ。10時に約束をしていたけど、待ち合わせ場所に現れなかつたから、今日は仕事だと聞いていたこともあって、会社に迎えに来たらしいの。でも、会社まで行つたけど、真つ暗で、呼んでも返事がなかつたから、入れ違いになつたと思い、待ち合わせ場所に戻つたつて言つてるわ。でも、そこでも会えなかつたから、今日の約束はまた日を改めてにしようど、メールをしたらしいわ。そのメールは、被害者の携帯に未読のまま残つてたわ。」

「そうですか。次は？」

「次は、昨夜10時25分に、正面玄関から入つたのが、坂下みづほ【さかした】さん。この人は知つてゐるかしら？一昨年亡くなつた女優の坂下恵美【さかしためぐみ】の娘で、駆け出しの女優よ。現場となつたプロダクションに所属しているの。翌日に控えた、アメリカの一世女優との対談についての最終打ち合わせに呼ばれていたらしいわ。約束は11時だつたけど、スケジュールに余裕があり、早めに着いたみたい。体力作りのために階段で四階まで登つていくと、見知らぬ男性が、事務所のドアのところで、社長を呼んでて、怖かつたから、いなくなるまで待つてたらしいわ。その人が、諦めて帰つたのを見送つて、事務所に行つたら、真つ暗で、誰もいなかつたから、不思議に思いながらも、電気を点けて11時過ぎまでそこで待つてたらしいわ。でも、時間になつても社長は現れなかつたから、置き手紙をして帰つたつて証言してるわ。置き手紙は、事務所のテーブルの上に置いてあつたわ。」

「11時…か。最後は？」

「昨夜12時10分過ぎに裏口から入つたのが、左門燿【さもんよう】さんと書いて、プロダクションの敏腕マネージャーらしいわ。仕事が終わつたから、日報を書くのに寄つたと言つてるわ。いつも、人がいるのが当たり前だから、電気を点けて、日報を書いて帰つ

たみたい。夜、鍵はあまり閉めないみたいね。日報を書きに寄るマネージャー達のために開けてあるそうよ。盗まれて困る物は、鍵の閉まる社長室で、金庫に入れて管理しているらしいわ。」「それで全てですか？」

「コナンが訊くと、佐藤は、言いにくそつ、「あ～、もう一つあるんだけど…。」

と言つた。

「何？私たちにだけ話したかったんでしょう？」

「そのために俺たちをこっちに乗せたんでしょう？」

哀とコナンは、言い淀む佐藤を促す。

「ええ…。実は、その、第一発見者がね、貴方たち2人に会わせろつて言うのよ。」

「え？ アメリカの女優が？ 俺たちに…つて、まさか…？ ベルバシッ…」「むぐっ」

危うくコードネームを言い掛けたコナンの口を、哀は手で押さえた。

「わ…わりい、シャ」

「ドゴッ…」「ぐわつ」

またも、違う名前を言いそつになつたコナンの脇に肘鉄を喰らわす哀。

「じ…じゃなくて、俺たちを知つていて、尚且つ、アメリカで女優をやつてているのは、クリス・ヴィンヤード。彼女しかいないな？」

「そうね。彼女しかいないわ。」

コナンと哀のやりとりを聞いて、佐藤は、

「あ～、良かつた。知り合いなのね？」

安心したように言つた。

「で？ そのクリスが何で日本に？」

哀は怪訝そうな顔で佐藤に訊いた。

「ああ、さつき話した、一世女優同士での対談の相手がクリス・ヴィンヤードなのよ。それに併せて来日したらしいわ。」

「俺たちに会いたがる理由は？」

「それは言わなかつたわ。連れてきてつて言つたきり、一言も話そ
うとしないのよ。」

「ふう、仕方のない人ね。今更、何の用かしら。」

「ああ、まあ、クリスだしなあ。行けば分かるだろ?それより、被
害者について教えてもらえますか?」

コナンは哀の方を見て、肩をすくめると、佐藤の方に向き直り、尋
ねた。

「ええ。そうだつたわね。被害者は、芸能プロダクションの社長で
中林公紀【なかばやしきみのり】36歳。未婚で、特定の恋人もな
し。テキトウに遊んでるみたいね。あと、仕事で儲けたお金で、友
人や知人に金貸しみたいなことをしていただいたみたいね。取り立ては厳
しくないものの、返済が遅れると、その分利息が増すらしくて、返
せないでいる人も多いみたい。」

「高利貸し…ね。敵が多そうね。」

「容疑者の中でお金を借りていた人は?」

佐藤は、一瞬考えるようにして、

「全員ね。でも、坂下さんと左門さんは、給料からの天引きと言つ
たかたちで返済していたらしいわ。」

「そうですか…。」

それだけ言つと、コナンは、右手を顎に当てて考へに沈んでいった。
そんなコナンを哀は微笑んで見つめていた。

少しすると、現場に到着した。

直ぐ後ろをついてきていた、高木の車も、今度は引き離されずに一
緒に到着していた。

現場に入ると、日暮警部が迎えてくれた。

「いやー、悪かつたね、皆。話は聞いたかい?」

と言つと、

「いえ、気にしないで下さい。はい、道すがら説明していただきました。」

「じゃあ、早速で悪いが、捜査に移つてくれるかい？」

「はい！」

皆で返事をした。

そして、コナンが皆に指示を出し始めた。

「光彦は歩美と、容疑者に事情聴取を。矛盾していることがあるはずだ。拾い出してくれ。元太！おめえは、被害者の周辺の人に聞き込みを。まずは、社内の人間だな。頼んだ。哀、遺体の確認を。凶器の特徴や、致命傷の詳細を。ノートパソコンは持つてきてたな？出来るだけ調べてくれ。」

それだけ指示を出すと、コナンは、応接室のソファに悠然と座つている一人の人物へと視線を向けた。

視線を向けられた本人は、サングラスを左手で外しながら、笑顔で手を振り、

「Hi ! Cool guy ! How are you ?」

ワザと英語で挨拶をした。

「はあ～、クリス、何してんだよ？」

「あら？久しぶりに会つた第一声がそれ？酷いんじゃない？一緒に死線を乗り越えた仲でしょ？」

「おいっ！」

クリスの言葉に、焦つて周りを見回すコナン。丁度、周りに人はいなかつた。

「いやあねえ、大丈夫よ。私が周りも確認せずにそんなこと言つわけないじゃない。」

「クリス…、ちょっとマジ勘弁してくれよ。で？俺と哀をここに呼んだわけは？」

あざ笑うようなクリスに対し、コナンは、ガックリと脱力していた。

「それは…、後で話すわ。先ずは、事件を解決しちゃいなさい。」

クリスは、不敵に笑うと、コナンを捜査へと戻させた。

そして、コナンは、防犯カメラの映像や、裏口、エレベーターに階段と、容疑者の通ったところを全て確認して回った。

探偵部の5人は、殺害現場となつた社長室に集まり、それぞれの収穫を報告しあつた。

「まずは、僕と歩美ちゃんと調べた件ですが、えー、左門さんの借金は既に返し終わつてゐるそうです。そして、坂下さんと右田さんの証言ですが、不審な点があります。」

「坂下さんは、対談の打ち合わせを10時からする約束だつたつて言つてるけど、右田さんは、9時に飲みに行く約束をしてたつて言つてるの。10時には仕事が入つてゐるのに、その前に飲みになんて行くものかな?」

「そうだな。どちらかが嘘をついているんだろう。」

「上林さんは、最初、4階には来ていないと言つてましたが、借金のことを言及すると、昨夜は、被害者にお金の返済を待つてもらえるように頼みに來たと証言しました。」

「その時、被害者は生きていたと?」

「うん。そう。それで、返済を3日延ばしてもらえたつて。」

「そうか。元太、周りから見た被害者の人なりは?」

「被害者は、人当たりもよくて、挨拶もきちんとする、立派な人つていう証言が多いな。プロダクションの人達にも、厳しくないけど、礼儀作法だけはつるさかつたと言つてゐる。近所で立ち寄りそうな、コンビニや弁当屋、ファミレスまで聞き込んだけど、店員のミスにも寛大で温厚な人だつたつて証言ばかりだな。」

「元々の性格か。金貸としての評判は?」

「ああ、少ない金でも貸してくれて、最初に約束した返済日までは、一切、利子は付けないらしい。ただ、連絡もなしに返済が遅れた場

合は、1日5%ずつ上乗せしていくことになつてるとか。分割での返済もOKで、返済が遅れそうなときは、連絡すれば、利子はつけていてくれると、金貸しとしては、凄く優しい部類らしいぞ？今まで、お金のことでトラブルが起きたことはないってさ。

「じゃあ、借金絡みじゃないのか…？女性関係は？」

「それは、誰も知らないみたいだつたぞ。」

「僕たちの方も、特には何も…。」

「あら…、ちょっと、これ見て！！」

「僕たちは、特には何も…。」

哀が、パソコンを皆の方に向けた。

その画面には、数年前に起きた、ある女性の自殺記事が載っていた。その記事の中に、中林公紀の名が書かれていた。しかも、自殺の原因になつたかもしれないとまで書いてある。

しかし、その後に出された記事には、中林氏は、関係なかつたとかかれていた。

だが、先の記事を見た自殺女性の関係者はどう思つたか。

この瞬間、探偵部の5人は犯人を悟つた。

後は、証拠が必要だつた。

そこで、コナンは哀に訊いた。

「遺体で気になつた点は？」

「そうね、刺し傷だけど、座つている人間を、無理矢理押さえつけて、まっすぐ振り下ろしたみたいよ。その時押されたらしい左肩が少し青くなつてるわ。片手で振り下ろした割には、深くまで刺さつてるわね。」

「左肩？」

コナンは怪訝そうに聞き返した。

「ええ。左。」

哀は淡々と答えた。

その2人の様子に、光彦は少し首を傾げた後、はつとして言つた。

「あつ…！ そうか、そう言うことですね！」

光彦の言葉に頷くコナンと哀。

歩美と元太は首を傾げ、

「え？ 何？」

「何だ？」

と聞いてきた。

その問いに、コナンが光彦をソファに座らせて実演した。

「こういうことだよ。被害者は、ソファに座っていた。そこに犯人が、被害者に馬乗りになるように襲いかかる。被害者には、強く押さえつけられた痣が残っていた。左肩にな。つまり、犯人は右手で被害者を押さえつけ、左手にナイフを持っていたことになる。」「あつ！ 犯人は左利きってことね！」

「ええ。 そうです。」

「容疑者の中で左利きの奴なんていたか？」

元太は、不思議そうに訊いた。

「ええ、1人だけ。動機もありますね。どうします？ 決定的な証拠はありませんよ？」

「ああ…。せめて、ナイフの入手経路が分かればな…。 訊いてみるか。」

と言い、「コナンは、社長室から出て、目暮警部に話しかけた。

「目暮警部、ナイフの入手経路はまだ分かりませんか？」

「ん？ ああ、今、高木君が近所で該当する店に防犯カメラの映像を見に行つてるが…。連絡がまだ来なくてな。」

と目暮が言った直後、ドアが開いて、高木があわてた様子で入ってきた。

「警部！！ ありました！ 容疑者の1人がナイフを買っている様子が映つてます！」

「何つ！？」

目を見開き高木を見る目暮に対し、コナンは、

「それは、……さんじやないですか？」

と冷静な声で訊いた。

「えつ？な…何でそれを？」

高木は驚いて聞き返した。

「よしー皆、推理シヨーを始めるぞー哀は、さつきの開いといてくれ。」

と高木の質問を無視して後ろを振り向き、探偵部の4人に声をかけた。

「おう！」

「うん！」

「はい！」

「ええ。分かったわ。」

と四人はそれぞれ返事を返した。

「目暮警部、犯人が分かりました。容疑者を集めて下さい。」

コナンは、目暮警部に向き直り、言つた。

「ああ、分かつた。高木君、みんなを集めてくれ。」

「はい！」

テスト前の一波乱（後書き）

探偵部による推理ショーは、次話です。
これからも宜しくお願いします。

テスト前の一波乱→解決（前書き）

前話の解決編です。

テスト前の一波乱の解決

コナンに言われ、殺害現場である社長室に、容疑者が集められた。

探偵部の5人と向き合つて、左端には日暮警部が。その右隣から順に上林、左門、坂下、右田と並び、少し離れた所で壁に寄り掛かって立っているのが、第一発見者のクリスだ。

高木と佐藤は、唯一の出入り口である、ドアの前に立っている。

「さて、皆さん、これから、この事件の真相を解き明かしていくま
す。」

コナンが、始めに話し始めた。

「…」

「周囲の人からの評判は、温厚で優しく、礼儀正しい良い人だとい
うものが多数を占めていた。そして、金貸しとしての評判も、決し
て悪いものではなく、むしろ、借りている側からすれば、ちゃんと
約束さえ守れば、これ以上に借りやすい所は無いくらいだ。」

「この様に、周りからの評判の良い人でした。それならば、何故殺害されたか？物取りの犯行というのではありません。この犯人は、予めナイフを用意して被害者のもとへと訪ねてきています。そう、殺害することを目的として。ここで、皆さんについてですが…。」元太の説明に補足をしつつ、話を進めたコナンは、次に、光彦と歩美に視線を向けた。

「まず、上林さん。貴女は、借金の返済期日を延ばしてもらうために、被害者のもとを訪れました。それは、社長室の鍵が閉まる机の引き出しに、借用書がありましたので、それで確認しました。確か

に、被害者本人の筆跡で三日後に変更がされていました。つまり、上林さん、貴方は、容疑者から外されます。

歩美は、聞きましたことと、事実を告げる。

「そして、左門さん、貴方の借金も既に返済済みとなつていました。被害者との関係も良好で特に、動機となるようなこともないとなると、貴方も容疑者から外されます。」

光彦が、左門に向き、説明する。

「坂下さん、貴女は、10時に打ち合わせの約束をしていたと証言しました。この件については、貴女のマネージャーさんに確認を取りましたところ、間違いないことが分かりました。その話をしているのを聞いていた人も、社内にいました。それから、借金についても、生活に支障が出ない程度に、毎月給料から天引きされますね。これについて、問題が起きていたこともないようですので、貴女も容疑者から外されます。」

歩美が坂下を見ながら言った。

「最後に、右田さん。貴方は、9時に被害者と待ち合わせをしていたと証言しました。しかし、10時には仕事を控えている被害者が、その前に出かけるでしょうか？被害者のスケジュール帳にも、そのような予定は書かれていません。借金につきましては、分割で問題なく返してきます。しかし、貴方には一つだけ、動機がありました。」

光彦がそこまで言つと、哀はノートパソコンを皆の方に向けながら、「これよ。数年前、ある女性が自殺をした。その原因と曰されたのが、当時、その女性と深い関係にあつたと思われる、被害者・中林公紀氏。けど、この記事の数日後、訂正記事が出されているわ。でも、この記事を読んだ女性の遺族はどう思つたかしらね？この女性、名前は天野玲子【あまのれいこ】、旧姓は右田。つまり、右田一雄さん、貴方の妹さんね？」

と、淡々と言つた。

「動機は妹の復讐。それに、被害者が犯人に押さえつけられたとき

に残った左肩の痣、ナイフの刺し位置を見ても、犯人は、左利きであることは間違いない。」

と言つて、コナン、光彦、歩美、元太は、それぞれ4人の容疑者に向かつて、持つていだ探偵団バッジを投げた。

上林、左門、坂下は、反射的に右手で、しかし、右田だけは、左手でキャッチした。

「ほら、右田さん、貴方だけが左利きですよ。それに、貴方がナイフを購入するところが、店の防犯カメラに映つてますよ。言い逃れは出来ません。」

と、コナンが、決定的な証拠を提示し、犯人である右田を追いつめた。

その間に、光彦と歩美と元太は、探偵団バッジを回収しつつ、右田から、他の3人を遠ざけた。

「は……は……は……。そうだよ。俺だよ。俺が中林を殺したんだ。あんな奴、死んで当然さ。俺の妹を……玲子を不倫させたあげく、旦那にバレそうになつたからポイだと……。いきなり捨てられ、旦那には責められ、行き場の無くなつた玲子は、追い詰められて、死を選んだんだ。俺に何の相談もなくな!! 何故? そんな事は簡単だ。奴が、俺の友人だつたからだよ!! だから、俺にも相談出来ず、あいつは自殺したんだ。遺書も残さずにな。それを知つたのは、ごく最近だ。あの記事を、俺は信じていなかつたからな。だが、あいつの旦那に久しぶりに会つて、聞いたんだ。あいつが中林と不倫していたと。自分が気付いた途端、玲子は捨てられたらしいとな。まさかとは思つたさ。でもな、それが真実だつたんだよ。俺は自分の不甲斐なさに憤つた。その内、全ては中林の所為だと思うようになつた。何で、玲子は死んでしまつたのに、奴はのうのうと生きている? そんなことを考えていた。俺には、奴に復讐する権利がある。そう思つたんだ。だから殺した。」

右田は、暗い顔で全てを語つていつた。

語り終えた右田に、高木が近づき、手錠をかけて、ドアから出て行つた。

パチパチパチパチ

場違いな拍手が社長室に響いた。

「流石ね、COOL guy。」

拍手をしながらそう言つたのは、それまで壁に寄りかかりながら見ていたクリスだった。

「クリス…。」

コナンは、溜め息混じりにクリスの名を呴いた。哀も溜め息をついている。

そんな一人の様子と、クリスに目を留めた歩美は、「ねえ、あの人、コナン君と哀ちゃんの知り合いなの?」と訊いてきた。

「え?ええ。そうね…。古い知り合いよ。」

哀は少し困ったような顔で答えた。

「よし、じゃあ、俺達も帰るか?」

コナンは、話題を変えるため、みんなを振り返り、笑顔で言つた。

「はい。帰つて勉強しなきゃいけませんしね。」

と光彦が言つと、元太は、

「おつおうー。そうだな。勉強だな…。」

と少しテンションを落として言つた。

「元太、今日教えたとこだけでも、復習しどけよ?明日、問題出すからな。」

と、コナンは、少し真面目な顔で言つて、

「じゃあ、佐藤刑事、申し訳ないんですが、歩美ちゃんと光彦と元太を送つてやつて下さい。」

と、ドアの所に立つていた佐藤に話しかける。

「ええ。分かつたわ。貴方たちは?」

と訊かれると、今度は哀が、

「私とコナンは、クリスと話があるのよ。だから、別で。どうせ一台じゃ乗りきらないしね。」

と答えた。

「クリス、今日の対談は、延期か? だつたら、家で話そつ。とコナンが、クリスに話しかける。

クリスは、チラツと坂下を見ると、

「ええ。そうね。時間も時間だし。」

と答えた。その会話を聞いていた坂下も頷いている。

「と言うことで、悪いんですけど、車をもう一台」

「私の車で行くわよ。」

コナンが日暮に向いて声をかけている途中で、クリスは話しが遮つた。

「あ? 車なのか? ジヤあ、日暮警部、俺達の分の車は大丈夫です。と、クリスに確認した後、日暮に向かつて言つた。

「おお。 そういうかい? ジヤあ、今日はご苦労だったね。ありがとう。また、何かあつたら電話するよ。クリスさんも、ご協力ありがとうございました。」

と日暮は、探偵部とクリスに挨拶をし、部屋を後にした。

「歩美ちゃん、光彦君、元太君、送つていいくわよ。」

佐藤に呼ばれ、3人は、

「あ! ジヤあ、また明日ね。」

「では、お先に失礼します。」

「また、明日な!」

と挨拶をすると、佐藤を追いかけて部屋を後にした。

「さて、哀、クリス。俺達も帰るぞ。」

「ええ。車を回してくるわ。表で待つてて。」

「ええ。分かったわ。」

と会話を交わすと、コナンと哀は共に、クリスは車を取りに出て行

つ
た。

テスト前の一波乱→解決（後書き）

矛盾は無かつたと思いますが、いかがでしたか？
感想や、アドバイス等、「ございましたら、コメントいただけます」と幸
いです。

また、次話も宜しくお願ひします。

理由（前書き）

「ナン」と表す、そしてクリスの会話です。

理由

クリスの車を待つため、ビルの前に立っているコナンと哀。あまり自覚はないが、どこから見ても美男美女。故に、道行く入たちは、皆振り返ったり、コソコソ話しながら通り通りしている。

そんな事には全く気付かず、コナンは、「あ、ちょっと飲み物買ってくる。ここで待っててくれ。」と言い、自動販売機の方へと走つていってしまった。哀は、仕方ないので、クリスの車を待ちつつ、コナンの方を見ていた。

「ねえ、君、一人？暇なら、俺達と遊びに行かない？」と見知らぬ男の二人組に声をかけられた。

しかし、哀はそっちを見もせずに、「今、忙しいの。人を待ってるし。」と無表情で応えた。

「え？ 待ってるのって女の子？ だったら、その子も一緒にさあ。」と尚も引き下がらない男たちに、

「はあ。言つたでしょ？忙しいって。……あつ。」

哀は面倒くさそうに言つて、コナンが来るのに気付き、声を上げた。それに反応して、男たちは、

「え？ 何？ 友達来たの？」

と言いながら哀の視線の方を振り向いた。

そこには、缶コーヒーを3つ持ちながら歩いてくる、制服姿の男がいた。

男たちは一目で気付いた。

『勝てない…。』

と、そして、早々にその場を立ち去つていった。

「哀？ 今の奴らは？」

と哀のもとに辿り着き、コーヒーを渡しながらコナンは訊いた。

「ああ、ただのナンパよ。貴方を見ただけで逃げていったわ。」

哀は、コーヒーを受け取りながら答えた。

「そつか。大丈夫だったか？」

少し心配そうな声で言つていたら、

「ピッパーーーーッ」

車道からクラクションが聞こえてきた。

左ハンドルの外車なので、窓から顔を出し、

「C o o l g u y ! 哀！ 乗りなさい。」

とクリスが声をかけてきた。

コナンと哀は車に走り寄り、後部座席へと乗り込んだ。

コナンからコーヒーを受け取つたクリスは、車を走らせ始めた。

少しの間、無言が続いたが、意を決したように、

「なあ、クリス…いや、シャロンと呼ぶべきか？」

とコナンが口を開いた。

「ふふふ。クリスにして頂戴。貴方たちと一緒に、私も生まれ変わつたのよ。だから、今はクリス・ヴィンヤードよ。」

とクリスが返した。

「そうだったわ…。新しい名前で罪を償つて生きていく約束だったわね。」

哀は少し悲しみを帯びた目をしていた。

「哀…。仕方なかつたんだ。クリスは、ベルモットとして、組織の命令には背けず、何人かの命をその手で奪つてしまつたんだから。」

とコナンは哀を諭すように言つた。

「そうよ、哀。貴女とは違うわ。貴女は、薬を開発していただけだも。それを勝手に使つたのはジンよ。貴女に咎はないわ。私は自分の命と他人の命を秤に掛けた。そして、自分の命を取つたのよ。」

だから、今があるの。でも、今私がこうしていられるのは貴女たちのおかげよ。」

クリスは、バックミラーで哀を見ながら言った。

「コナン、クリス…。ありがとう。」

哀は、目尻に涙を浮かべながら礼を述べた。

「ところで、クリスは何で俺達を呼んだんだ？」

コナンは、ずっと気になっていたことを訊いた。

「家に着いたら話すわ。」

「そうか。この時間じゃ、夕飯食べながらが良いな。」

「そうね。じゃあ、悪いけど、スーパーに寄つてもらえるかしら？
流石に3人分の食材は無いわ。」

「あら、悪いわね。分かったわ。道案内してもらえるかしら？」

「ええ。」

などと話しをしながら、スーパーに寄り、工藤邸へと向かった。

工藤邸に着き、哀は早速夕食作りに取り掛かった。

今日は、クリスもいるので、和食にする事にした。久しぶりの日本。そう、あの時…組織を壊滅に追いやり、罪を償うべく、FBIと共にアメリカへと帰つていつた以来の筈だ。

と言つても、家庭料理しか出来ないが…。

メニューは、鰯の塩焼き、ほうれん草の胡麻和え、高野豆腐と根菜の煮物、ごはん、漬け物、茸の味噌汁である。

最初、クリスも手伝おうとしたが、哀が、

「クリスはお客様なんだから、座つて待つていて。今、コナンがコーヒーを淹れるから。」

と言い、「コナンも頷きながら、」コーヒーを淹れ、座るよう促した。

「分かつた。大人しくしてやるわ。」

と言い、クリスは、リビングの椅子で待つことにした。

時刻は7時を少し過ぎたところ。

リビングのテーブルに夕食が並んだ。

三人は、揃って食べ始めた。

少し食べ進めた頃、コナンが本題を切り出した。

「で? ク里斯は、何で日本に来て、俺らを呼び出したんだ?」

「日本に来たのは、女優としての仕事よ。聞いたでしょ? 一世女優

同士での対談。」

「いや、だから、何でそんな仕事受けたんだよ? シャロンもオメエ
じゃねえか。」

「ふふふ。そうね。だけど、一応向こうではシャロンの娘として女
優をしてるの。シャロンのことば、誰よりもよく知ってるしね。受
けても問題はないでしょ?」

「確かに、貴女自身なんだから、おかしな受け答えにはならないで
しちゃうね。でも、それだけの理由なの?」

「…まあ、オファーが来たとき、一瞬迷ったのは事実よ。受けたの
は、そこが日本で、しかも貴方たちがいる米花町から近かったから。

」

「え?」

「会いたかったのよ。貴方たちに。ただそれだけ。」

「俺達に会つため…?」

「じゃあ、私たちを呼びだしたのは、事件が起きたからじゃないの
?」

「そう。貴方たちが理由。たまたま事件が起きたから、警察に呼び
出させただけよ。事件が無かつたら、直接ここに来てたわ。」

「そうだったのか。何で俺達に?」

「貴方たちの様子は、有希子から聞いていたの。あれからずっとね。

有希子は、私が犯罪者でも、変わらずに接してくれるわ。シャロンの時そのままに…ね。

「有希子さんらしいわね。」

「ええ。有希子のおかげで、私は救われたわ。」

「ふつ。母さん…、シャロンを尊敬してたからな。組織の一員だつて分かつたとき、悲しんだり怒つたりするより先に心配してたし。それほどまでに、母さんにとつてシャロンは大事な存在だったんだ。だから…クリス、オメエのことも大事なんだよ。」

「そうね。私も有希子のこと、大事よ。大切なたつた一人の親友。」

「喜ぶわね。それ聞いたら。」

「ああ。その言葉、母さんに言つてやつてくれな?」

「ええ。…それで、今回、日本からのオファーが来て、丁度いい機会だと思つたのよ。久しぶりに貴方たちの顔を見て、幸せでいるか、この田で確かめたかったの。それに、報告したいこともあつたしね。」

「クリス、私達は幸せよ。元の姿に戻れなくても、理解者はいるし、周りにも恵まれていてるわ。私はここで、かけがえのない友人たち、第二の父親、そして愛する人を見つけられたもの。」

「俺も、新一の時には得られなかつた、大切な仲間、良きライバル、愛する人を手に入れた。俺達の今は、昔より、数倍も良い環境だぜ? 幸せじゃないわけ無いだろ。」

「良かったわ。それを聞けて安心した。特に哀、貴女は、亡くなつたご両親、そして明美の分も幸せにならないといけないのよ。それが、貴女の償いなんだから。貴女が幸せになることが、薬を飲んでも生き残つた私やコナンへの罪滅ぼしよ。」

「そうだぞ、哀。オメエは、俺の隣で幸せになるんだ。オメエが幸せなら俺も幸せなんだからよ。」

「クリス…「ナン…、私、罪を償えてる? 貴方たちの未来を変えてしまつた罪を…。私、今でも充分幸せよ。コナンと共に人生を歩んでいくてるもの。これから先も、死が一人を分かつ時まで、私は、

「コナンの隣に居続けるわ。」

「それでいいのよ。私達が望むのは、貴女の幸せただ一つなんだから。」

「ああ。…ところでクリス、報告つて何だ？」

「そういえば、そうね。何かあったの？」

「あ…ええ、私、FBIに入ることにしたのよ。あの時、私、組織壊滅の為に手を貸したでしょ？その時、罪を償つた後に、FBIに入らないか？って言われてたの。」

「FBIに？大丈夫なのか？ジョーディ先生だつているんだろう？それに、赤井さんだつて…。」

「大丈夫よ。ジョーディに關しては、ちゃんと罪を償つたし、せざるを得ない状況だつたことも理解してくれたわ。赤井は、昔のこと何て気にしてないわ。彼の心にずっと残つていられるのは、明美くらいよ。」

「そう…、彼、お姉ちゃんのことを、今でも想つてくれてるのね。でも、そろそろ解放されるべきだわ。お姉ちゃんならきっと、彼が幸せになることを願つてゐるはず。例え、自分のことを忘れられてもね。」

「そうだな。明美さんはそういう人だよな。クリス、赤井さんにそう伝言してくれるか？」

「ええ。明美のためにもね。志保からの伝言、ちゃんと伝えるわ。哀は、クリスに微笑み、少し考えるようにしてから、口を開いた。

「クリス、貴女も今、幸せ？」

クリスは、一瞬、目を見張つたが、次には破顔して、

「ええ。私も幸せよ。シャロンの人生に引けは取らないわ。私を心配してくれる親友がいるし、やりがいのある仕事もできるわ。それに、貴方たち一人が幸せそうに笑つてゐる。それだけで、私は幸せよ。」

それを聞いたコナンと哀は、満面の笑みで、

「「よかつた。」」

と言い、

「俺達の結婚式には、招待状出すから。絶対来てくれな？」

「私達の幸せを、貴女にも祝つてもらわないとね。」

と言つた。

「ええ、勿論よ！何があつても駆けつけるわ。」

こうして工藤邸の夜は更けていった。

その日、クリスは、工藤邸に泊まり、翌日は仕事の為、二人が起きるより早くに出て行つた。

コナンと哀宛に、

『コナン・哀

ありがとう。

貴方たちが幸せで凄く嬉しいわ。

あまり会いには来れないけど、いつでも一人の幸せを願つてる。
結婚式、楽しみにしてるわね。

じゃあ、また。

クリス・ヴィンヤード』

と書つ置き手紙だけが残されていた。

理由（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。
次回も宜しくお願いします。

謎（前書き）

今回は、歩美・光彦・元太が、コナンと哀の謎に迫ります。

事件の翌日。

歩美と光彦と元太は、テスト勉強そっちのけで、あることを話し合つていた。

発端は、昨日の話。

コナンと哀が、第一発見者である、アメリカの女優クリス・ヴァインヤードと何やら知り合いらしいということ。

小1の時から、ずっと行動を共にしているが、自分たちは、クリスに会った記憶がない。

ならば、いつ、どこで知り合つたのか？

そもそも、コナンも哀も、自分たちに対し秘密が多い。

よく、2人だけでヒソヒソ話していたし。

昔は、いつの間にか2人だけで事件を解決してたことが多かつた。小1の時から、大人さえ知らないような知識も持つていた。

あの2人は何者なのか？

今更ながら、そんな疑問が浮かんだ。

元来、気になることをスルーできる質じやない3人は、意を決して聞くこととした。

今日も5人揃つて、テスト対策の勉強会。

哀は、3人のために、テストに出そうなのをピックアップし、問題集を作つてきていた。

それを3人に渡し、哀とコナンは、元太の為に練習問題を作つていた。

3人は、コソソリと視線を交わすと、ペンを置いた。
そして、光彦が、

「あの…、コナン君、灰原さん、ちょっと良いですか？」

改まつて話しかけてきた。コナンと哀は、不思議そうに振り返り、

「何だ？」

「何かしら？」

と応えた。

「昨日のことなんだけど…。」

歩美がおずおずと話し出した。

「2人は、あのクリス・ヴィンヤードと知り合いなの？那人、アメリカの女優さんでしょ？」

「ええ。古い知り合いよ。」

「古い？いつ知り合つたの？私達に会つ前？」

「初めて会つたのは…、いや、えーと、クリスの母親は知つてるか？女優のシャロン・ヴィンヤード。彼女と、俺や哀の両親が知り合つたんだ。」

コナンは、昨夜決めたばかりの設定を話し始めた。

「『ご両親というと、本当の…？』

光彦は少し抑えめの声で訊いた。

「ああ、俺も哀も、ここに来る前はアメリカにいたからな。その時の知り合いだ。」

「こっちに来てからも、私達を心配して、様子を見に来てくれたこともあつたのよ。」

「へえ、そだつたのか！」

「工藤の『ご両親も知つてるんですか？』

「そういえば、コナン君のお母さんは、昔、女優さんだつたよね！」

「え？ ああ、母さんとシャロンが友人だつたんだ。まあ、平たく言

えば変装仲間だな。今は、クリスと仲良くしてるみたいだけだ。

「こ」しばらくは様子見に来なかつたんだけだね。最後に会つたのは小2の時かしら。最近は、有希子さんに私たちのことを訊いていたみたいよ。」

「へえ、じゃあ、2人が昔から英語とか喋れてたのは、帰国子女だから？」

「え？ （急に話変わつたか？） ああ。まあな。」

「そういえば、お二人は昔からいろんな知識をお持ちでしたよね。それこそ、大人さえも知らないようなことまで…。」

「円谷君…？」

「この前、大友先生が言つてたでしょ？ あり得ないって。私達、全然不思議に思つてなかつたんだけどね。」

「俺達、何でも知つてるお前等のこと、スゲーって思つてるだけだつたし。」

「でも、昨日のクリスさんことで、ふと疑問に思つたんです。あの頃は、幼すぎて何も分かつていませんでしたが、今思えば、お二人には不審な点が多すぎました。」

「「え…？」

三人からの突然の言葉に、コナンも哀も鳩が豆鉄砲をくらつたような顔をした。

「まずは、お2人の知識量です。一体、いつどこで勉強をしたのか…。実際、テスト勉強なんてしたことありませんよね？ 受験勉強も。いつも、僕たちに教えてくれてたじゃないですか。」

「それは、授業を聞いてれば何の問題もないから。予習も復習もする必要ないでしょ。」

「それは…！… そかもしれないけど…。でも、受験は…？」

「受験も、今まで留つたことしかないだろ？」

「そんなこと言つてもよお、普通忘れちまうもんじゃねえか？」

「それは、記憶力の差よ。それに、貴方たちに教えることで、私たち自身の復習にもなるのよ。」

「そつか。そうだよね！ 2人は、人より記憶力がいいんだね！」「ああ、そうだな。」

「では、事件現場での、薬や物理の知識、車やボートの運転はどうなんですか？ どれも、小学生ができる」とじゅありませんよ？」

光彦は、2人に真剣な顔で詰め寄つた。

「うつ…、それは、どれも本とかでな！」

「本！？」小学生が？

「ええ、アメリカの家には、医学書や薬学書、科学に物理学。いろんな本が置いてあつたわ。両親共に研究者だったからね。」

「そんな本を、ほんの子供の頃に？」

「ああ、他に無かつたからな。一年の大半を研究所で過ごす親たちが、俺達に買い与えたものなんて、何もなかつたんだよ。必然的に、そこにあるものを読んで、単語や文章を覚えた。テレビは、点けても、ニュースばかり。仕方ないだろ？ こんな風に育つちまつても。」「あ…、すみません。」

「わ、わりい。」

「ごめんなさい。」

寂しそうに語るコナンと哀に、三人は思わず謝つた。

「いいのよ。もう、昔のことだもの。いつに来て、博士や皆に会つて、今は充分幸せなんだから。」「

哀が微笑んで言つた。

「そうだな。俺も、こっちに来てからは、それまで知らなかつた、仲間つてものに出会えたしな。」

「ナンも、一カツと笑つて言つた。

「僕たちも、お二人に出会えて良かつたです！」

「うん！ 日本に来てくれてありがとうーー！」

「おめえ等がいなかつたら、探偵団はなかつたんだしな！」

こうして、この話は、終わったかに見えたが…。

光彦が、次の謎をぶつけてきた。

「では、よく2人だけで、シリアスな顔をしてヒソヒソ話していたのは何故ですか？」

「それは、まあ、何だ…。育つた境遇もあつたんだろうけど、俺たちは似たもの同士だったんだ。まだ子供だった俺達は、その体に見合わない知識を持っていた。対等に話せるのがお互いしかいなかつたんだ。」

「そう…、博士を除けばね。博士は、私達を理解して、受け入れてくれたわ。だから、安心して身を寄せていた。でも、それ以外に、素で話すことができたのは、コナンとだけだったの。」

「だから…だから、2人で話してたの…？ もう少し私たちを信用してくれても良かつたのに。」

「そうですよ！ ヒソヒソ話す必要があつたんですか！？」

「俺達の前でくらい、素でいれば良かつたじゃないか！！」

歩美は泣きそうになりながら、光彦と元太は、少し怒ったように、2人に詰め寄つた。

「信用するしないの問題じゃないのよ。話が合ひか合わないかな。意味の分からない話ほど、ツマらないものはないでしょ？」

「それに、俺達は、おめえ等のこと、信用してたさ。信用出来ない人間と連むほど、バカじゃない。」

「でも、私は、コソコソされるよりは、意味わからんくとも、一緒に話してたかったよ…！」

とうとう、歩美の目から涙がこぼれた。

「吉田さん…。ごめんなさい。楽しそうに話す貴方たちに、遠慮してたの。その笑顔を、小難しい話で曇らせたくなかつた。貴女の笑顔は、私に勇気を与えてくれたのよ？」

哀は、歩美を抱きしめながら言つた。

「哀ちゃん…？ 哀ちゃんは、昔、1年生の時、死のうとしたことがあつたでしょ？ 私が知つてるだけで2回。」

歩美は、涙を拭いながら、哀の瞳を真つ直ぐ捉えながら言った。

「吉田さん…、気付いていたの？」

「ううん。今思えば、アレは、死にたい人の行動だなって。」

「そひ…。あの時は、アレが最善だと思つたのよ。でも、2回とも阻止されたわね。」

「何で？どうして死のうとなんてしたの！？」

「だって、私には誰もいなくなってしまったんだもの。人に迷惑をかけて生きるくらいなら、死んでしまった方がいいと思つたのよ。」

ここで、ずっと黙つて聞いていたコナンが口を開いた。

「哀はもう、一度と死のうなんて思わねえよ。だから、歩美ちゃん、哀を許してやつてくれ。」

「本当？」

「ええ。私でも人を幸せに出来るつてわかつたから。一度とあんなまねはしないわ。約束する。」

と言い、哀は、歩美に向かつて小指を差し出した。

歩美は、哀の小指に自分の小指を絡ませ、

「指切りげんまだね！嘘ついたら友達やめるんだから…。」

と言つた。哀は苦笑して、

「それは困るわね。吉田さんは、私にとつてただ一人の大切な親友なんだから。」

と言つた。

「えへ。哀ちゃん大好き！でも！…哀ちゃん、いつの間にか吉田さんって呼んでる…。歩美って呼んでつて言つたのにい。」

「あつ…『ごめんなさい。歩美ちゃん。気を付けるわ。』

「うん！」

2人を見守っていた男子3人は、安心したように顔を見合させ、微笑んでいた。そして、また、光彦が現実へと目を引き戻す一言を発した。

「コナン君、灰原さん、僕、まだ不思議に思つてることがあるのですが。」

「あ？ 何だ？」

「出合つた頃、灰原さんも、服部さんも、コナン君の事を、工藤つて呼んでることがありましたよね？」

光彦は、真剣な目で言つた。

「… そうだったかしら？ 私は、ずっと江戸川君つて呼んでなかつた？」

哀は、無表情のまま、首を傾げつつ聞き返した。

「いえ、確かに、灰原さんは、僕達や大人たちの前では、ずっと江戸川君と呼んでました。けど、2人きりの時とか、博士や、服部さんといふ時は、工藤君と言つていたでしょ？」

「服部は、俺が新一さんに似ているから、工藤つて呼んでいたんだよ。俺や哀のことも理解してくれていたし。」

「私は…、彼が、工藤家に養子に行くことを知つてたのよ。」

「えつ！？ 何で？」

歩美は驚いて声を上げた。

「ああ、それはな、哀の両親も俺の両親も、同じ事故で亡くなつたんだ。頼つた先も、知り合いだつた、工藤家。俺は、本当の親戚だから、身寄りの無くなつた俺を養子にしたいという話が来てたんだ。哀のことも、養女に迎えたいって言つてたんだが、それは、哀自身が断つた。だから、工藤の両親は、哀を阿笠博士に預けることにしたんだ。俺も、江戸川と言う名を無くしたくなかつたから、断り続けてきた。でも、名前はそのまま良いから、自分たちの庇護下に入つてほしいと言われたんだ。この先の人生のためにもとな。」

「私も、博士にお世話をなつた当初は、養女なんて考えてもいなかつたわ。でも、一緒に暮らしていく中で、本当の父親になつてもらいたくなつたのよ。名実ともにね。そういうわけだから、私は、彼が工藤になると思つてたの。だから、慣れるために工藤君と呼んでいたんだけどね、彼が嫌がるものだから、2人きりの時や、このことを知つてゐる人の前だけで、呼んでたのよ。」

「そういうことだつたんですか。ずっと気になつっていた胸のつかえ

がとれました。」

「そう？ 良かつたわ。」

「もう、無いな？」

「うん、とりあえず、全部解決したよー。」

「良かつたわ。」

「もう、2人だけでコソコソするんじゃねえぞ！…」

「ああ。わあつたよ。」

「ええ。気を付けるわ。」

「じゃあ、テスト勉強再開しますか！…」

「うん…」

「おう…！」

と、2人に対する謎を解消させた3人は、気合いを入れて勉強を始めた。

そんな様子を、微笑んで、しかし、少し切なげな顔で見守るコナンと哀がいた。

謎（後書き）

表現というのはなかなか、難しいものですね。
何か、アドバイス等ありましたら、コメントいただけたと幸いです。
次話も宜しくお願ひします。

探偵部への復讐？（前書き）

お待たせしました。
やっと話が纏まりました。

探偵部への復讐？

中間考査も無事に終了し、普段の生活に戻った探偵部の5人。

今日は、張り出されている中間考査の結果を見ていた。

張り出されているのは、各学年の上位30名。

5人が見ている1年生の順位表には、1位が2人いた。言わずもがなだが、1位の2人とは、コナンと哀である。

3位と4位には、光彦、歩美と並んでいる。

残念なことに、元太の名前だけは、探しても見つからなかつたが。

そんな順位表を前に、浮き足立つ周りを余所に、探偵部の5人は、「流石ですね。コナン君と灰原さんは、満点じゃないですか！」

「いや、光彦と歩美ちゃんだつて、ほぼ満点じゃないか。」

「えへへ。頑張ったもん！」

「このままキープしていかなきやね。」

「ちえつ、俺だつて頑張ったのによお。」

「まあまあ、元太君だつて、赤点はなかつたんでしょ？」

「ん？ああ。ギリギリクリアしてたぜ！－！」

「良かつたじやねえか。」

「私達に感謝しなさいよ。」

「そうだよお。哀ちゃんとコナン君のおかげなんだよ。」

「分かつてるよ。2人には感謝してるつて！－！」

などと会話を交わしていくが、そこで、コナンの携帯が震えだした。

「お？ワリイ。電話だ。」

「ナンは、そう言つて携帯を取り出し、喧噪から遠ざかりながら、

「はい、江戸川です。」

『お～、コナン君か？目暮だが。今、ちょっとといいかな？』

「あ、目暮警部、大丈夫ですが、どうしました？」

『今朝、警視庁宛に、犯行声明が送られて来たんだが、どうも、君たちに関係があるらしくてな。』

「えつ！？それはどういうことですか？」

『ああ、その犯行声明の中に、【少年探偵団への復讐】と言つ言葉があるんだ。』

「それは…今までの事件の犯人からと考えた方が良さそうですね。僕達が関わった事件で、出所している犯人はいましたか？」

『ああ、今、それは調べてるところだが、まだ、声明文を解読できていないんだ。』

「では、哀のパソコンメールに、声明文の内容を送ってください。『分かつた。じゃあ、直ぐに送らせよ。授業が終わった頃に迎えをやうづ。』

「はい。では、それまでに解読を進めておきます。』

『よろしく頼んだよ。』

「失礼します。」

コナンが電話を切ると、

「警部さん、何て？」

「ああ、何か、犯行声明が届いたらしいんだが、どうも、俺達に恨みを持つ者の犯行みたいなんだ。」

「え？ それって、今まで捕まえてきた犯人ってこと？」

「それは今、警察が、過去の事件の犯人で、刑を終えて出所している犯人の洗い出しをしてくれてる。」

「そうですか、では、声明文の内容は？」

「ああ、哀のパソコンにメールしてもらえるように頼んでおいた。『じゃあ、早く教室に戻ろうぜ！』

「ああ。急ごう。放課後まで時間もあまり無いしな。」

「迎えに来るつて？」

「授業が終わつた頃にな。」

と、会話を交わし、5人は、急ぎ足で教室へと戻つていった。

哀がパソコンを起動させ、メールを開く。

「来てるわ。コレね。」

そのメールの内容は、

警察に告ぐ

来る6月23日、鳥が羽ばたく時。

少年探偵団への復讐の音色が響きわたる。

英知を集めて築き上げたはずのバベルの塔は、一瞬にして崩れ去り、人々は、光と音を同時に失うだろう。

アレクト

これが全文である。

「バベル塔……光と音……電波塔か？だとすると、東都タワーだな。」

「一瞬にして崩れ去ると言つことは、爆弾ですかね？」

「鳥が羽ばたく時つて？？？」

「鳥つて言つと、朝か？」

「それだと、時間が特定できないわ。もつと何か時間がわかるような…あつ！十一支じゃないかしら？」

「ああ、そうすると、午後6時だな。」

「と言つことは、6月23日の午後6時に東都タワーを爆破するということですね。」

「でも、この、アレクトってどういう意味なのかな？」

と、歩美が、パソコン画面を指さしながら言つた。

哀は、少し考えてから、

「…ギリシャ神話にそんな神がいたわ。復讐の女神だつたはず。」

「ああ。アレクト（aleクト）絶え間ない怒りの復讐神……だな。」

「やはり、僕達が関わった事件の犯人でしょうか？」

「復讐の女神つてことは、女が犯人か？」

「そもそも限らないかも。捜査の攪乱を狙つてる場合もあるからね。」

「そうだな。過去の事件からの容疑者の洗い出しが、警察に任せた方がいいだろう。」

「まずは、爆破を止めないと。23田は、明日よ。予告してきたつてことは、爆弾は、既に仕掛けられていると見て間違いないわ。」

「ええ。では、放課後は、迎えに来ていただいたその足で東都タワーに向かいましょう。」

「うん！だいたいの場所は予想できないかな？」

「ヒントは、崩れ去りと、光と音を同時に失うつてことだよな！」

「ああ、ただ、崩れ去りが、そのままの意味なのか…。光と音を同時に失うつについては、建物自体ではなく、電波の送受信をしている場所のような気もするんだよな。」

「そうね。捜索するなら、建物の基礎と、電波の送受信の場所を中心にするべきね。」

「爆弾を見つけて処理できても、犯人を捕まえないと、終わりは来ねえよな。」

「うん。多分、爆弾は見つけられるはず。でも、その間に犯人は次の場所に爆弾を仕掛けるんじゃないかな？」

「歩美ちゃんは、東都タワーの爆弾は囮だと？」

「違うかな？何か悪い予感がするの。」

「歩美ちゃんの予感は割と当たるのよね。」

「ああ。しかも、犯人は、俺達探偵部への復讐だと明言してるしな。」

「危ないとすると、俺達に関係のある場所か？」

「と言つことは、今、一番可能性があるのは、ココ…学校ですよね？」

「だが、近年、学校には、そつそつ部外者が立ち入れないようになつてる。」

「でも、他には思い当たるところないよ。」

「やっぱ、学校じゃねえか？俺達が帝丹高校に揃つて入学したのは、有名だぜ？」

「警戒する必要はあるな。元太は、今日は部活だろ？」

「おう。」

「じゃあ、部活終了後に、構内の見回りをしてから帰つてくれ。その時間にあわせて光彦は学校に戻つてくれるか？」

「はい。わかりました。不審物の搜索ですね。元太君、6時頃に部室前で待つてますから。忘れないでくださいね。」

「ああ。わかった。」

「歩美ちゃんと哀は俺と東都タワーに。今日中に見つけるぞ。」

「うん！」

「ええ。あ、そうだわ、先生にはいつ報告する？」

「あ～…、一応、学校への被害も考えられるからな。先に知らせる」と面倒なことになりそうだが…、言わないわけにもいかないよな。

「そうですね。では、僕が、戻つて来た時に居たら報告しておきますよ。」

「わりいな、光彦。頼んだ。」

こうして、授業中も、この後の段取りについて話し合ひを続けていた5人だった。

探偵部への復讐？（後書き）

ありがとうございました。
犯行声明文つて難しいですね。
次回も頑張ります。

探偵部への復讐？（前書き）

お待たせしました。
続きです。

探偵部への復讐？

放課後。

コナン、哀、光彦、歩美の4人は、ホームルームが終わると、急いで準備をし、

「じゃあな、元太！」

「部活頑張りなさい。」

「元太君、また明日ね！」

「では、元太君、また後で。」

と、それぞれ元太に声を掛け、

「おう！俺の分も頼むな！」

と元太の返事を聞き、走って教室を後にした。

正門に着くと、そこには2台の車がいた。

いつものように、高木と佐藤の2人が迎えに来ていた。

「ここにちは、みんな。さあ！乗つて。」

と佐藤は探偵部の4人に声を掛ける。

「はい！」

と揃つて返事をし、コナンと哀は佐藤の車に、光彦と歩美は高木の車にそれぞれ乗り込んだ。

そして、一旦、日暮の待つ警視庁へと向かつた。

道中、コナン達は、探偵団バッヂを使い、高木と佐藤の両方に、声明文の内容を話した。

「まず、日にちは6月23日で間違いない。そして、時間ですが、これは、鳥が羽ばたく時とあつたでしょう？鳥、つまり十一支の酉とし、時間に直す。すると、6月23日の午後6時が予告時間です。

「ああ！十一支か！！」

「はい。そして、場所は、バベルの塔、光と音と言ひヒントから、電波塔である、東都タワーではないかと思います。」

「そうね、そこに関しては、私達も同意見だわ。」

「凶器は爆弾。これは、崩れ去りと言つ表現をしていることから、推測できます。」

「助かつたわ。短時間でよく思いつくわね。流石だわ。」

「ただ……。」

褒められたことに喜びもせず、歩美は沈んだ顔で言い掛けた。

「歩美ちゃん？どうしたんだい？」

その様子をルームミラーで確認した高木が先を促す。

「僕達、これは、囮ではないかと思つてているんです。」

「囮ですか？」

「はい、犯人は、僕達への復讐だと明言しているでしょう。ですから、東都タワーの爆弾に掛かっている間に、高校内に爆弾を仕掛けると言う可能性を疑つてます。」

「高校に……、でも、そつと決まつたわけではないんだよね？あくまで可能性だよね？」

高木は、慎重に聞き返した。

「ええ。そうよ。あくまでも、可能性の話。日本警察が、物証や事件が起きないと動けないのは分かっているわ。」

「あ……いや、そういう訳じゃ……。」

淡々と返す哀に、高木は、顔をひきつらせながら言った。

そんな高木の様子が声だけでわかつた佐藤は、

「はあ、高木君、この子達は分かつてるわ。警察と言つ組織がどんな物なのか。」

「佐藤さん……。そうですな。もひ、10年近くも事件に関わり続けてますもんね。」

「それで、今までの事件の犯人から、容疑者は絞れた！？」

「アレクトは見つかるかしら？」

「そう、アレクトって、調べたら、復讐の女神らしいのよね。だから、女性の容疑者を中心に調べてるんだけど。」

「女性？確かに、アレクトは女神ですが、復讐の神自体、あまり男神がないのが事実なんですよ。だから、女性に限定するのは危険です。」

「そつか、でも、今まで君たちが関わった事件は、とても多くてね…。調べるだけでも、今日中に終わるかどうか。」

「では、まだ当分掛かるんですね。でしたら、僕達は、田暮警部と合流したら、爆弾処理班と共に東都タワーに向かいましょう。」

「そうね。あなたたちには、爆弾の搜索を手伝つてもらう方が良さそうね。」

「さあ、とりあえず、警視庁に着いたよ。警部の元に報告に行かなないと。」

田暮と合流し、道中話したことを説明すると、

「よし！じゃあ、佐藤君、高木君、千葉君は探偵部の子らと東都タワーへ。爆弾処理班と鑑識に応援を要請！但し、営業時間内だから、皆私服で行動するようだ。爆弾を見つけたら、直ぐに爆弾処理班へ。爆弾の数はわかつていながら、隅々まで探すこと！解体に掛かるのは、タワーの営業が終わつてからだ。いいな！」

「はい！」

佐藤、高木、千葉の3人は、敬礼しながら返事をし、準備に取り掛かつた。

「残りの者達は、ここで犯人の洗い出しが。それから、2人ずつ交代で帝丹高校の周りをそれとなく巡回してくれ。パトカーと制服は禁物だ。では、こここの指揮は、任せたぞ。白鳥君。」

「はっ。了解しました。」

白鳥は、胸を張り敬礼しながら応えた。

「よし！じゃあ、行くぞ、コナン君達は車に分乗してくれ。」「はい。」

東都タワーに到着した探偵部と警察は、一般客に混じつてタワー内へと入つていった。

日暮は、千葉を伴つて、東都タワーの管理事務所へと向かい、責任者に爆弾が仕掛けられている可能性があると伝え、内密に捜索する許可を取つた。

そして、爆弾処理班を、電波の管理をしている場所へと捜索に向かわせ、鑑識はタワーの外部の捜索、探偵部と高木、佐藤は、管理事務所から戻ってきた日暮、千葉と共に、タワー内部の捜索へと向かつた。

6月22日、午後5時少し前、タワー内外で、一斉に捜索を開始。内密な行動のため、怪しまれない様にと、2～3人ずつのグループに分かれての行動になつた。

タワー内部では、探偵部が、コナンと哀、光彦と歩美に分かれて捜索、警察は、高木と佐藤、日暮と千葉に分かれた。

そして、爆弾発見の第一報は、爆弾処理班からもたらされた。やはり、電波の管理を行う部屋の内部に仕掛けられていた。

しかも、完全に機能がダウンするのを狙つたのであろう。小型の时限爆弾が5つ仕掛けられていた。

この5つは、早々に爆弾処理班の手によつて解体され、爆弾はその機能を失つた。

次に見つかったのは、タワー外部、タワーを支える基礎の部分に仕掛けられていた。

こちらは、解体するために、営業時間終了後、調べて分かつたのだが、先ほどのと大きさは変わらないが、中身は全く違う物だつた。

小さな一つでも、爆破の威力は桁違いという、プラスチック爆弾が仕掛けられていたのだ。

そして、タワー内部では、日暮・千葉以外のグループが、ごく自然なカツプルを装いながら、捜索に当たっていた。

「光彦君！こつちこつちー！」

歩美は、普通の女子高生の様にはしゃいでいるが、その目は、見えている範囲は何一つ見逃さないと黙った風に鋭く光っていた。

光彦も、

「待つてくださいよ～、歩美ちゃん。」

と、優しい笑顔を浮かべながら、目だけは歩美同様に鋭かつた。

そして、別の場所では、

「哀、2人きりになれるところに行かないか？この扉、一枚隔てた向こう側は、殆ど人が居ないんだぜ？」

とコナンは、外に通じるドアを指さして、哀に囁いた。

「いいわよ。私も、あなたと2人きりになりたかったの。」

と哀はコナンに囁き返し、2人でドアの外へと出て行つた。

そんな二人を高木と佐藤は、

「何だか、負けてる気がしない？高校生に…。」

「え？あ…あははは、そうですね、すみません。」

佐藤は顔をひきつらせながら、高木は、自分のふがいなさに落胆しつつ、会話を続けた。

扉の外に出たコナンと哀は、

「ここ、昔、ヘリでジン達に狙われた所よね？」

「ああ、あの時は、ヤバかったな…。さて、人知れず隠すとしたら、外の可能性のが高いと思つたんだが…。」

と、周りを見渡しながら言つたコナンは、ドアのそばに何かがあることに気づいた。

「どうかした？」

哀は、「ナンの顔が真剣な物に変わつていったのを見て、声を掛けた。

「あ……、見つけた。」

「え？ それ？」 ドアの横で屈んだコナンの手には、一つの箱があつた。

「多分な。確認のために、ちょっと開けてみる。」

「慎重にね。私は田畠警部に連絡するわ。」

そして、コナンは、箱を開いた。

そこには、时限式のプラスチック爆弾があつた。

「ビンゴ……だな。」

「ナンの手元を確認しながら、哀は電話をかけていた。

「もしもし？ 警部さん？ あつたわよ。外にね。」

『何！？ 外だつて？』

「ええ、今、ナンが開けて確認したわ。时限式のプラスチック爆弾よ。」

『わかった。じゃあ、儂と千葉君がそこに向かうから、それはそのままに、他にもないか探してくれ。』

『はい。じゃあ、私たちは、このまま外を探すわ。』

『よろしく頼むよ。』

と会話をし、電話を切ると、田畠は千葉に小声で、「千葉君、外だ。ナン君たちが発見した。行くぞ。」
と言い、千葉も小声で、

「はい。」

と返した。

哀は、

「ナン、こひは、警部さん達が来るから、ぐるっと一周回つましよ。」

と声を掛け、爆弾を元に戻し終わつたコナンは、

「ああ。行く。」

と応え、時計回りに歩き始めた。

爆弾は、その後、3つ見つかった。最初の扉の近くから、二時、六時、九時の方向に一つずつ置かれていた。

コナンと哀は、それを回収しながら周り、日暮達の待つ扉の元に辿り着き、爆弾を渡した。

それから、光彦と歩美により、展望台の中心部から発見された。

東都タワーの閉館は、午後11時。

光彦は、6時少し前に高校に戻れるようにと千葉に車で送つてもらつた。

コナン、哀、歩美は、一旦、夕食をとりにタワーを出た。

そして、歩美は家に連絡を入れ、外泊の許可を取り、3人は、午後8時にはタワーへと戻ってきた。

そして、再び爆弾の搜索を開始したのである。

探偵部への復讐？（後書き）

次話は、学校に戻った光彦と元太がメインになる予定です。

探偵部への復讐？（前書き）

すみません。話が殆ど進みませんでした。

探偵部への復讐？

6月22日、午後6時少し前。

光彦は、千葉に送られて帝丹高校へと戻つてきていた。

「さて、まずは、教員室ですね。大友先生がいるか確かめなければいけませんね。」

一人呟きながら教員室へと向かう光彦。

教員室のドアをノックし、中に入ると、そこには机に向かい、何事かを呟き続ける大友の姿があつた。

とりあえず近づいてみた光彦の耳に聞こえてきたのは、

「学年1位が一人！？しかも、全科目満点…、あり得るのか？いやいやいや、ないだろ？しかも、他の二人も、実質2位と3位だと？何なんだよ。頭良すぎだろ…。まあ、小嶋がそこそこのは分かつていたが。トップの四人が探偵部つて…。俺、ついていけんのかよ？」

どうも、先日の中間考査の成績が気になつているらしい。

「大友先生！ちょっとよろしいですか？」

光彦は、先ほどの呟きは聞かなかつた事にし、話し掛けた。

「ん！？えつ？はい？」

大友は、一人の世界に入り込んでいたので、慌てて返事をし、振り返つた。

「大丈夫ですか？」

「あ、ああ、円谷か。どうした？探偵部は、ホームルーム後直ぐに飛び出していつたつて聞いてたんだが…。」

「はい、ちょっと事件が起こりました。」

「なつ…じ、事件？え？あ…、報告か？」

明らかに声と顔に動搖が見て取れたが、光彦はそれを無視し、

「はい、ですが、元太君も合流してからでの説明にしたいので、こ

「で少し待つていて頂けますか？」

「ああ。わかつた。」

大友の返事を受け、光彦は、元太との待ち合わせ場所へと向かつた。

柔道部の部室前。

元太は、着替えを終わらせて、光彦の到着を待つていた。
そこに、走らないまでも、早歩きで光彦はやつてきた。

「おせーぞ！光彦！！」

「すみません、ちょっと教員室に寄つてきたので…。」

「ああ、そつか。先生は居たか？」

「はい、元太君も一緒に事情を話した方が一度で済むかと思いまして、待つもらつてます。」

「じゃあ、急ぐか。でもよお、そういう時はメールしろよ。そしたら、わざわざ光彦がここまで来る必要なかつたじやねえか。」

「あ…、あはは、そうですよね。失念してました。」

光彦は、元太の言葉にはつとし、苦笑いで応えた。

そして、2人は急ぎ、大友の待つ教員室へと向かつた。

教員室に着くと、大友が、応接セットの方へと手招きをしてきた。

二人がそちらに向かうと、お茶とお菓子が用意されていた。

「早かつたな。まあ、座りなさい。長くなりそうな気がしたから、お茶とお菓子を用意しといたぞ。」

と大友は一人を促した。

「おっ！ラッキー 部活終わりで腹減つてたんだよ。」

元太は、座ると同時にお菓子へと手を伸ばした。

そんな元太に呆れつつ、

「すみません。頂きます。」

と光彦も席に着いた。

周りに人がいないのを確認し、光彦が話し始めた。

「まず、事件の概要ですが、今朝、警察へ犯行声明文が届いたんです。それを解読した結果、明日午後6時に東都タワーを爆破すると言つものでした。」

「ばつ爆破！？」

驚いて声を上げる大友に、目だけで静かにさせ、光彦は話を続けた。

「はい、しかも、僕達、探偵部を恨んでの犯行というのが濃厚です。」

「う…恨み！？え？何でだ？？」

「その辺は、まだはつきりとしてないのですが、実際に、犯行声明文の通り、東都タワーで爆弾が発見されました。」

「見つけたのか！！」

元太は、少し嬉しそうに言つた。

「はい。見つかったのは、電波制御室に5つ。タワー基礎部分に数個、展望台の外に4つ、展望台の中心部に1つです。」

「結構あつたな！」

「その爆弾は、どうしたんだ？」

「ええ、制御室以外のは、タワーの営業時間終了後に解体の予定です。」

「何で直ぐに解体しないんだ？」

「先生、一般市民に要らぬ恐怖を植え付けて、パニックにでもなつたら、收拾がつかなくなりますよ。」

少し呆れた様子で大友の質問に答えた光彦は、

「他の3人は、まだ爆弾の搜索に当たつてます。何個仕掛けられるかは書いてなかつたので、隅々まで探す他ないですからね。」

「…俺達も行くか？人手は多い方がいいだろ？」

「俺もか！？」

「いえ、先生は結構です。素人が居ても役に立ちませんから。」

「円谷、おまえ、顔に似合わずはつきり言うんだな…。」

光彦に一刀両断された大友は、がっくりと肩を落として言った。

「あ…、すみません。そんなことよりですね、この後が重要なんですか。」

「何だ？」

「僕達は、この事件、これで終わるとは思っていません。」

「と、言つと？」

「犯人は、俺達に恨みがあるだろ？ つてことは、東都タワーに警察の目が向いてる隙に、ここに爆弾を仕掛けるんじゃないかと思つてるんだよ。」

「ここ！？ 否、待て、え？ だつて、学校だぞ？ 無いだろ。無い無い！」

「先生、確かに、常識的な人間からすれば、大勢の人が集まる学校と言つ場所には、爆弾など仕掛けない。そう思いますよね。でも、相手は、復讐に燃える犯罪者です。僕達にダメージを与えるためなら、何でもやるでしょう。」

「犯人は、俺達を苦しめる為にはどうするのが効果的か考えたんじやねえか？」

「どういふことだ？」

「つまり、僕達探偵部の存在意義です。」

「はあ？ 何だそれは？」

「それは、正義です。よりも多くの人が幸せでいられるように。」

「俺達は、犯罪を許さない。それによつて奪われる命があることも。」

「つまり、犯人は、よりも多くの人に危害が及ぶ方法を選んでるってことだな？」

「ええ。しかも、帝丹高校を狙う。僕達のホームであるここを。」

「ああ、そうか。こういうことだな？ 犯人は、東都タワー爆破の犯行予告を出す。その捜査に警察と探偵部が掛かりきりになる。その隙に、探偵部のホームである帝丹高校に爆弾を仕掛ける。探偵部の所為で、探偵部のホームである高校が爆破される。しかも、相当な

数の被害者を出す時間帯だな。そのことで、探偵部は社会に責められることになるはずだ。自分たちの所為で多くの犠牲が出たと言うことには、精神的にもかなりくるだろう。

「そうです。ですから、僕は、それを防ぐためにも、いつして爆弾の搜索に戻ってきたんです。」

「犯人の特定はまだ出来てねえんだよな？」

「ええ。まだ調べてる途中です。調べてる間も、私服警官が学校辺をパトロールしてくれていますが、完璧とはいえませんからね。」

「俺は、どうすればいいんだ？」

「とりあえず、先生は、この件を上に報告するかどうか、考えてください。あと、探偵部顧問と言う理由で狙われる可能性もありますので、身辺に気をつけてください。」

「ええ！？俺が報告するのか？いや、待てよ。まだ、爆弾が仕掛けられてると決まった訳じゃないんだ。早まる」とはない。うん。だが、ことが起きてからじや遅すぎるな…。」

最後の方は、独り言の様に呟く大友に、

「その辺の判断は、お任せします。」

と言い残し、光彦と元太は、爆弾が仕掛けられていなか、校内の搜索へと向かつた。

一人残された大友は、ふと我に返り、

「ん？あいつら、何か不吉なこと言わなかつたか？俺が狙われる？身辺に気をつける？って、どうすりやいいんだよ…。ヤバいな。もう暗いじゃないか。さっさと帰らないと。」

と呟き、急いで帰り支度をして、走つて帰つて行つた。

校内を、上から下へ順に見回つている最中、元太は、光彦に言った。
「なあ、ちょっと言い過ぎたんじゃないかな？」

「え？ そうですか？」

「いや、確かに、先生が狙われる可能性はあるけどよ。今回の犯人は、明らかに大勢を狙ってるじゃねえか。」

「そうですね。確率的に言えば、先生が狙われる可能性は、ほぼ無いですが。コナン君に、少し脅かしといった方が、余計な首を突っ込まれずに済むだろって言われたもので…。」

「なんだ、そういうことな！ 確かに、あれくらい言つとけば、自分から捜査に加わるうとは思わねえよな。」

「ええ。今は、爆弾の捜索に集中しなければならない時ですしね。と会話を交わしながら、次々と教室を確認していく。

一通り全てを見て回ったが特に怪しい物は置いていなかつた。

『思い過ごしなら、それに越したことはない。』

と、二人は思い、未だ、東都タワーに居るであらう三人と警察の元へと向かうのだった。

光彦と元太は、タワーに向かう途中で、それぞれの家に連絡を入れ、外泊の許可を取り、夕飯を食べた。
タワーに着くと、コナンに連絡を入れ、合流した。

「遅くなりました。あれから何か進展は？」

「ああ、お疲れさん。いや、これと言つて何もないな。」

「学校の方は？」

「一通り回つたけど、何もなかつたぞ。」

「良かつたあ。思い過ごしかな？」

「ああ…、だといいんだが。仕掛けるとしたら夜中の可能性が高いと思う。」

「明日の朝一にもう一度学校を見回る必要がありそうね。」

「では、こここの捜索が終わつたら、コナン君の家で仮眠をとつて、

学校に行きましょう。」「

「あ？まさか、おめーらも外泊の許可とったのか！？」

「勿論です！」

「当たり前じゃねえか。何言つてんだ？」「

「仕方ないわね。でも、そろそろ制服でつかつてこなまよい時間よ。一度着替えを取りに帰りましょう？」

「うん！鞄も邪魔だしね。あ、でも、私と光彦君は袁ちゃんとコナン君の服借りれるからいいけど、元太君はどうするの？」

「あ～、しまつた…。どうするかな。ウチにそんな体格いいやついないからなあ。博士のでも借りるか？」

「そうだな。博士のなら入るか。最近顔見てねーし、行こうぜ！」「

「そうだな。博士のなら入るか。最近顔見てねーし、行こうぜ！」と会話をし、皆で日暮の元に向かった。

「あの、俺達、一旦帰つて着替えしてきますね。制服だと立たちますし。」「

「おお、そうだな。誰かに送らせよ。高木君、千葉君、ちょっと来てくれ。」「

「はい。」「

「悪いが、5人を一旦家に送つてやつてくれ。」「

「あ、ウチだけで大丈夫です。みんな、外泊許可取つてるんで、荷物置いて、着替えるだけでいいんで、すみませんが、お願ひします。」「

コナンは、目暮に補足をし、皆で頭を下げた。

「じゃあ、行こうか。」「

「はい！」「

こうして、5人は高木・千葉の車に分乗し、工藤邸へと向かった。

工藤邸に着くと、皆は家に入り、高木と千葉にも、一旦中に入つてもらひ、待つてゐる間、リビングでコーヒーを飲んでいてもらつた。

コナンは、光彦を連れて自室へ、哀は歩美を連れて自室へ戻り、私服に着替えて來た。

その間、元太は、隣家へ向かい、阿笠博士に服を借りてきた。

それから直ぐに東都タワーへと戻つていつた。

道中、元太は、

「あ、さつき博士がよお、あんま無茶すんなって言つてたぜ。」

「あははは、久しぶりに会いに行つたかと思えば、要件は服貸してだからね。」

「心配もしますよね。昔から事件に巻き込まれてましたし。」

「だよな。でも、博士も無理がきく年じやねえし、一緒に連れていけねえもんな。」

「そうだよね。あ、博士、元気にしてた？」

「おお！ 元気だつたぜ！」

「高校入つてから、遊びに行く暇が無くなりましたしね。」

「あつ！ そうだ。この事件が解決したら、博士の家に遊びに行こう！」

「いいな！ 服も返さなきゃなんねえし、久しぶりにゲームしようぜ！！」

「いいですねえ。じゃあ、頑張つて解決しましょうね。」

「おう！」

「うん！」

と会話を弾ませる3人だった。

一方、高木の車へと乗り込んだコナンと哀は、今回の事件について

話していた。

「なあ、この事件、哀はどう思う？」

「そうね。分かつてることはあるけど…、まず、声明文は、内容に統一性がないわね。ギリシャ神話だつたり、干支だつたり。それと、見つかった爆弾。これは、分かつてただけでも2種類よね？それから、仕掛けられた数。複数犯の可能性があるわ。」

「ああ、そなんだ。それに、やたら復讐を強調している…。不特定多数の人間を狙う、しかも、俺たちへの復讐と銘打つてな。これは、確実に俺たちの弱点を狙つてきてる。社会的に抹殺した上に、精神的にも追い詰めようとしている。そこまでの恨み…、逮捕してきた犯人たちなのか、犯人に近しい人か…、或いは、これから何かを始めようとしている組織か。」

「これだけのことを仕掛けるんだもの、個人的な復讐ならまだしも、組織だとしたら、相当厄介ね。ヤツラの時みたいに、潰すのに相当時間がいるわよ。」

「ああ。早いとこ犯人を絞らねえとな。」

「もう、あんな目には遭いたくないわ。」

「そう…だな。自分も周りも危険に晒すような真似は二度とごめんだ。」

2人は、何かを決意したような、意志の強い目をしていた。

探偵部への復讐？（後書き）

ありがとうございました。
またよろしくお願いします。

探偵部への復讐？（前書き）

明けましておめでとうございます。
本年も宜しくお願い致します。

探偵部への復讐？

探偵部を乗せて帰ってきた千葉と高木。

日暮と佐藤の元へと戻ってきた二人の様子は、正反対だった。

千葉は、

「いやー、あの3人、殺伐とした事件に関わってばかりだけど、明るいですね。微笑ましい会話に癒されましたよ。」

と、ご機嫌だつた。対して高木は、少し考え込んだ様子をしていた。

「高木君？どうかした？」

佐藤は、そんな高木を訝しみ、声を掛ける。

「あ…、あの、コナン君と哀ちゃんが話してたんですが、今回の犯人、もしかすると、新たに動き出す組織の仕業かもしれないと。」「えっ！？どういうこと？」

「あ、あの、2人で、犯人像を考えてたんですが、コナン君が、今までの犯人たちか、犯人に近しい人たちか、新たに動き出す組織かつて言ってたんです。」

「それって、どれも複数形よね？2人は、犯人は、複数犯だと考えてるってこと？」

「はい。どうやら、声明文の内容に統一性が無いこと、使われている爆弾が少なくとも2種類あること、それから、仕掛けられた爆弾の数、これらから、複数犯だと考てるみたいです。」

「ふむ、流石だな。それも視野に入れて捜査を続けよう。千葉君、白鳥君に連絡をしてくれ。」

「はい。」

しかし、未だに、高木の表情が晴れないでいたのに気付いた佐藤は、高木の腕を引き、日暮達から離れ、

「どうしたのよ？まだ何か気になってるの？」

「はい…、あの一人、他にも言つていたことがあるんです。」

「何？」

「たぶん、聞いちゃいけないことだつたんだと思いますが…。」

「何よ？ はつきり言いなさい！」

「哀ちゃんの口から、ヤツラとか、潰すとか聞こえたんです。それに、もう、あんな目には遭いたくないとも言つてました。コナン君も、自分も周りも危険に晒すような真似は二度とごめんだって言つてたんです。」

「それって、過去に何かあつたような言い方よね？」

「はい。」

「でも、あの子達が関わった事件に、そんな大きな組織の事件はなかつた。」

「そうなんです。だから、考えられるのは一つ…。」

「彼らが小2の冬休みに行方不明になつた時ね。」

「はい。それと前後するように、FBIがある組織を壊滅させたじゃないですか。その時、日本に協力者がいて、彼らの助けなくしては壊滅できなかつたと言つてましたよね？」

「ええ。そうだつたわ。でも、協力者の名は明かしてもらえなかつたのよね。」

「はい。それが、あの二人だつたとしたら…？」

「高木君…、これ以上は、その件に首を突っ込むべきじゃないわ。」

「え？ 何故ですか？」

「よく考えてみなさい。あの当時、小2だつたあの一人がFBIの協力者だつたとしたら、それは、非常に不可解なことよ？ 普通、子供の証言は、証拠にならない。でも、FBIは、それを採用し、銃弾の飛び交うような現場に連れて行つてたとしたら…？」

「あつ…、それこそ、あの一人の存在を根本から疑うことになりますね。」

「そうよ。でも、彼らはここに存在しているの。アメリカがその存在を認めてる。それを、一警察官である私たちが疑い、調べ出した

りしたら、消される可能性だつてあるのよ。」

「そうですね。この事は、聞かなかつたことにします。」

「それが一番よ。私も忘れるわ。」

高木と佐藤は、これ以上の詮索は止め、爆弾の搜索に頭を切り替えた。

そこに、「コナンと哀は一人の前を通り過ぎつつ、
「賢明な判断ですね。」

「貴方達がバカじやなくて良かったわ。」

と小声で言つたのだつた。

高木と佐藤は顔を見合させ、二人の後ろ姿を見送り、小さく溜め息を吐いた。

「さて、閉館時間まで後少しね。」

「はい！今之内に回れるところを見て回りましょう。」

と、歩き出した。

歩美、光彦、元太の三人は、一緒に行動していた。一通り展望台を見て回り、その後は、外の階段を登つていった。
コナンと哀は、三人とは逆に、下へと降りていった。

そして時刻は11時。東都タワーは営業を終了した。
爆弾処理班は、見つかつた爆弾を一力所に集め、一つ一つ慎重に丁寧に解体していった。

残りの捜査員は、一斉に下から上へと、見逃さぬように、田を田のようにして、隅々まで探しながら登つていった。

しかし、他には爆弾は仕掛けられておらず、探偵部の5人は、搜索終了の為、工藤邸へと送つてもらつた。

翌朝5時。皆が起きる前に、哀は、一人起きだし、朝食の準備を始めた。

5時半位から、徐々に起きだしてきて、学校へ行く準備を整えた面々は、揃って朝食を食べ始めた。

「まず、今日は、各教室を最初に搜索。その後は、体育館や図書室、特別教室と順に探していこう。」

「コナン君は、今日の爆破が失敗に終わった後、次はいつだと思いますか？」

「そうだな。帝丹高校を狙っているのであれば、一番可能性が高いのは、明日の全校朝礼だろう。」

「そうね。その時には、体育館に校内の全ての人が集まるものね。」「じゃあ、体育館を中心に探した方が良くないか？」

「いや、まだ、そうと決まった訳じゃないからな。それに、これは、帝丹高校に通じる者があつた場合の話だ。」「え？ どういうこと！？」

「つまり、明日の朝、体育館で全校朝礼が行われることは、帝丹高校に関わる者にしか分からない情報なのよ。」

「あ…、そうですよね。だとすると、他にはいつ？」

「日にも時間も特定はできないが、生徒をパニックにするなら、使われていない教室の爆破の可能性が高い。校庭に誘導するとしたら、体育館も狙われるだろう。爆破させといて、皆が校庭に避難する。そこを狙うんじゃないだろうか？」「それじゃあ、やっぱり隙無く探すしかないよね。」「よし！ 飯も食い終わつたし、早く行こうぜー。」

探偵部への復讐？（後書き）

何だか中途半端になつてしましました。

次回は、少し話が動く予定です。

更新が遅くなりましたこと、お詫び申し上げます。

次話も、少しお時間いただきます。気長にお待ちいただけると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7741w/>

5人の高校生活

2012年1月5日23時48分発行